

へば、陋室に居て文史を披閱することであるし、富者の樂といへば、高門の家で笙箏を合奏することである。この兩者に就いて、榮悴各別あることなどは、どうでも善い。ただ賢愚を分つて、交遊せねばならぬので、何も必ずしも貧即賢、富即愚といふ譯ではないのである。

【餘論】これは、孟郊が過激の辭を弄して、富者を攻撃した故に、これを宥め論す爲にしたので、朱竹垞は「末句、太だ説明、反つて味の短きを覺ゆ」といつたが、尤もと思はれる節もある。

岐山下 一首

岐山の下一首

誰謂我有耳。不聞鳳皇鳴。

誰か謂ふ、我に耳ありと、鳳皇の鳴くを聞かず。

塌來岐山下。日暮邊鴻驚。

塌來、岐山下、日暮れて邊鴻驚く。

丹穴五色羽。其名爲鳳皇。

丹穴五色の羽、その名を鳳皇と爲す。

昔周有盛德。此鳥鳴高岡。

むかし、周、盛徳あり、この鳥、高岡に鳴く。

和聲隨祥風。窅窅相飄揚。

和聲、祥風に隨ひ、窅窅として相飄揚す。

聞者亦何事。但知時俗康。

聞くもの、亦た何事ぞ、但だ時俗の康きを知る。

自從公旦死。千載闕其光。

公旦の死せしより、千載その光を闕づ。

吾君亦勤理。遲爾一來翔。

吾が君、亦た理を勤む、爾が一たび來り翔るを遲つ。

【字解】【一】塌來 もと楚辭に見えて、王逸の註に「塌は去るなり」とあるが、後世は、聊か意味が違ひ、顔延之の秋胡詩に塌來空復辭などが、その例で「この頃」と解し、又、極めて軽く「ここに」と見ても善い。【二】丹穴五色羽 山海經に「丹穴の山に鳥あり、狀、鶴の如し、五色にして文あり、名を鳳といふ、この鳥や、見はるれば、天下大に安寧」とある。【三】鳴高岡 詩經の卷阿に鳳凰鳴矣、于彼高岡」とある。【四】窅窅 窅は窅に同じ、ここでは空を翔ける形容。【五】公旦 周公旦。【六】勤理 理は治、即ち政治、前に見ゆ。【七】遲 易に遲歸有時とあり、漢書に「席を側て之を遲つ」とある、即ち待つ。

【題義】岐山は、長安の西北鳳翔府の附近で、その鳳翔府は、むかし周の文王が起つた處である。韓愈が岐山の麓を經過した時、恰も兵亂の後、人心なほ靜まらず、兎角、不穩の狀態であつたから、やがて、鳳凰が出て來て、君徳を謳歌するやうな時節になりたいといふ意を述べたのである。この詩は、本集に岐山下二首とあつて、日暮邊鴻驚より以上、即ち破題の四句を以て第一首としてある。蔣註には「むかし、灌畦暇語の一書あり、謂ふ、子齊、はじめて舉に應ず、韓公、これを賞して、爲に丹穴五色羽を作る。子齊、姓は程、字は昔範、かつて中暮三卷を著す。因語録に見えたり。すなはち、下の詩、當に別篇となすべきに似たり、第だ前詩題するに岐山下を以てす。これ必ず鳳翔に遊ぶ日、作れるならむ。然れども、四語亦た篇を成さず。この詩、これを卷末に載す、疑ふらくは、脱誤あら

む」とある。これで見ると、丹穴五色羽以下が、まとまつた一首で、前の四句は他篇の殘缺といふことになる。しかし、顧嗣立は「この詩、必ずしも二首と作さず、庚陽の二韻、古しへ原と通叶するなり」といつた通り、無論一首であつて、灌畦暇語とやらいふ書に丹穴五色羽の句を擧げたのも、意味の上から、この句を以て全篇に題したものとすれば、何等の差支もない。されば、目錄に二首とあるのは、別に一首あつて、それが亡びたのであらうといふことである。

【詩意】 人人苟くも耳あらば、鳳凰の鳴く聲を能く聞く程に成りたいものである。自分は、まだ鳳凰の鳴くのを聞かないから、耳が無いのも同然である。この頃、岐山の麓に來かかり、ここは、むかし鳳凰が鳴いた處だといふから、是非その聲を聞きたいと思つて居たが、鳳凰どころか、日暮になると、邊地の雁が兵器の影などに驚いて、飛鳴するばかりであつた。元來、鳳凰は、丹穴といふ山に生まれ、五色の羽を備へ、聖主が位に在れば見はれるといふので、むかし、周の文王は盛徳ありしが故に、この鳥は、岐山の高岡に出て來て鳴いたといふことである。その時は太平の世であつたから、和らいた聲は、目出たき風に隨つて、高らかに聞こえ、そして、鳳凰は、青天の上に翔つて、飄揚と舞ひ上つて居たのである。鳳凰の聲を聞かば、その時が太平の世であるといふ證據にもなる處から、人人は、争つて之を聞かうとして居るので、自分も、矢張、その志であるが、殘念ながら、とうとう之を聞かなかつた。鳳凰は、周の世に出たといふが、それは文武兩王の御世に限られて居るので、攝政にして

大聖たりし周公旦が歿して仕舞つてからは、千載の久しき、その光を闕して、今に至るまで出て來ないから、その聲を聞くことの出來ないのも、まことに、仕方の無いことである。しかし、今の元和の聖天子は、随分、政治を勤めて能く天下を治められて居るから、鳳凰も出て來ねばならないので、汝が一たび現はれて、ここに來り翔らむことを翹望して止まぬ次第である。

【餘論】 結末二句は、憲宗が天晴の明君であるといふので、至治の世に復さむことを囑望したのである。岐山を過ぎて鳳凰を思ひ、鳳凰より至治に及び、すべてを當時の事に引きつけた處は、流石に韓愈の手筆である。朱竹垞は「突起して奇なり」といひ「意深からず、却つて古に近し」といつた。

韓昌黎集卷二

古詩

北極一首贈李觀

北極有羈羽。南溟有沈鱗。
川源浩浩隔。影響兩無因。
風雲一朝會。變化成一身。
誰言道里遠。感激疾如神。
我年二十五。求友味其人。
哀歌西京市。乃與夫子親。
所尚苟同趨。賢愚豈異倫。
方爲金石姿。萬世無緇磷。
無爲兒女態。憔悴悲賤貧。

北極一首、李觀に贈る

北極に羈羽あり、南溟に沈鱗あり。
川源浩浩として隔て、影響兩つながら因なし。
風雲、一朝に會すれば、變化して一身を成す。
誰か言ふ、道里遠しと、感激すれば疾きこと神の如し。
我年二十五、友を求めて其人に味し。
西京の市に哀歌して、乃ち夫子と親む。
尚ぶ所は、苟くも趨を同じうす、賢愚豈に倫を異にせむや。
方に金石の姿と爲つて、萬世緇磷なからむ。
兒女の態を爲し、憔悴して賤貧を悲む無かれ。

【字解】北極有羈羽、南溟有沈鱗。列子の湯問には「終髪の北に溟海といふ者あり、天池なり、魚あり、その廣さ數千里、その長さ稱ふ、その名を鯤となす。鳥あり、その名を鵬と爲す、翼、垂天の雲の若し、その體稱ふ、世、豈に此物あるを知らむや。大禹行いて之を見、伯益知つて之に名づけ、夷堅聞いて之を志るす」とあり、莊子の逍遙遊には「北冥に魚あり、その名を鯤と爲す、鯤の大、その幾千里なるを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬と爲す、鵬の背、その幾千里なるを知らざるなり。怒つて飛ぶ、その翼、垂天の雲の若し。この鳥や、海運すれば、將に南冥に徙らむとす。南冥といふ者は天池なり」とある。列子では、鯤と鵬とが二つの物で、關係もないものにしてあるし、莊子では、鯤が變じて鵬と成つたといつて居る。列子の書は、雜駁なもので、戰國より漢に互つて、數人の手に成つたものだと言輩は考へて居るが、莊子の内篇は、純然たる其手筆で、これは、或は列子の方が莊子を取つたものかと思はれる。この詩に見えた羈羽は鵬、沈鱗は鯤で、それが合體すれば、一身となるといふので、鯤鵬の奮を翻して、又新意を出したのである。羈羽は、獨りぼつちの鳥。沈鱗は、水底に沈んで居る魚。【三】道里遠。陶淵明の詩に「怨道里長とある。【三】昧其人。その人に値はぬといふ義。【四】西京。即ち長安、東なる洛陽に對して言ふ。【五】縹磷。論語に「磨して磷せず、涅して縹せず」とあつて、縹は黒くなる、磷は汚れる。

【題義】李觀は、前に重雲の詩の項に見えて居た。總說中に略述した通り、韓愈は、貞元八年に進士に及第して、その時、年は二十五。この詩にも我年二十五とあるから、即ち、其年の作である。李觀は、韓愈と同年に及第し、韓愈が第一、それから歐陽詹・李觀といふ順で、この年の進士には、名家が多かつたから、一に龍虎榜と稱されたといふ位。この詩は、當時、試験に應ずる爲に、皆長安に上京し、そこで、韓愈は李觀と初めて相知つたので、その準備の爲に勉強して居る間に贈答をしたものらしく、蓋し、李觀に贈つた詩の中の最初の者であらう。

【詩意】北の果に獨りぼつちの鳥が居て、尋常の物とは違つて居るが、どこへ往つても容れられぬから仕方がない。南の大海には、萬仞の底に沈んだ大魚が居て、これも身體が大きくて、誰にも相手にされない。この二つの物の間には、大陸の川原が浩浩として横はり、自然その隔てを爲して居るから、兩者互に影も見えず、響も聞こえず、風馬牛、相及ばざるが如く、從來何等の交渉もなかつた。然るに、天上の風雲が一たび動いて相會すれば、羈羽と沈鱗とは、忽ち變化して、一身に成つて仕舞ふ。かうなると、道路の遠く隔つて居たことなどは、何でもなく、唯だ兩者の心が感激すれば、その變化の速なることは、全く神の如くである。われと李觀とは、丁度これに比すべきものであつて、顧みれば、われは年二十五に成る今日まで、同心の友を探がしても、一向然るべき人に出合はず、この度、長安の都に出て來てからも、孤獨なる儘、哀歌を唱へて居た處が、ふとした事で、君と相知るやうに成つた。われと李觀と、志を同じうするは、まことに貴ぶべきことで、われの今に愚なると李觀の生來天稟賢なるとは、比べ物にならぬが、そんな事には頓著せず、たとへば、羈羽と沈鱗と、變化して一身と成つた様な想がした。されば、今後は、君と共に金石の姿となつて、いつまでも白くして堅く、萬世を経るとも、黒ずんだり、汗れたりすることなく、徒に兒女の態をなしつつ、形容憔悴したといつて、貧賤を悲むやうな事があつてはならぬ。

此日足可惜一首贈張籍

此日惜むべきに足る一首、張籍に贈る

此日足可惜。此酒不足嘗。この日、惜むべきに足れり、この酒、嘗むるに足らず。捨酒去相語。共分一日光。酒を捨て去つて相語り、共に一日の光を分つ。

念昔未知子。孟君自南方。念ふ昔、未だ子を知らず、孟君、南方よりす。

自矜有所得。言子有文章。自ら得るところあるを矜つて、子が文章あることを言ふ。

我名屬相府。欲往不得行。我が名相府に屬す、往かむと欲するも行くことを得ず。

思之不可見。百端在中腸。これを思へども、見るべからず、百端、中腸に在り。

維時月魄死。冬日朝在房。維れ時れ月魄死し、冬日朝に房に在り。

驅馳公事退。聞子適及城。驅馳、公事より退き、子が適ま城に及ぶを聞く。

命車載之至。引坐於中堂。車を命じて、之を載せて至り、引いて中堂に坐せしむ。

開懷聽其說。往往副所望。懷を開いて、其說を聽けば、往往、望むところに副ふ。

孔丘歿已遠。仁義路久荒。孔丘歿して已に遠く、仁義、路久しく荒れり。

紛紛百家起。詭怪相披猖。紛紛として百家起り、詭怪、相披猖す。

長老守所聞。後生習爲常。長老は聞くところを守り、後生は習うて常と爲す。

少知誠難得。純粹古已亡。少知も誠に得難し、純粹は古しへも已に亡し。

譬彼植園木。有根易爲長。かの園に植うるの木に譬ふ、根あれば長きを爲し易し。

留之不遣去。館置城西旁。これを留めて去らしめず、館して城西に置く。

歲時未云幾。浩浩觀湖江。歲時、未だ云に幾ならず、浩浩として湖江を觀る。

衆夫指之笑。謂我知不明。衆夫これを指して笑ひ、我を知明かならずと謂ふ。

兒童畏雷電。魚鼈驚夜光。兒童は雷電を畏れ、魚鼈は夜光に驚く。

州家舉進士。選試繆所當。州家、進士に舉げ、選試、當るところを繆る。

馳辭對我策。章句何煒煌。辭を馳せて我が策に對し、章句、何を煒煌たる。

相公朝服立。工席歌鹿鳴。相公、朝服して立ち、工席に鹿鳴を歌ふ。

禮終樂亦闋。相拜送於庭。禮終りて、樂も亦た闋り、相拜して庭に送る。

之子去須臾。赫赫流盛名。之子去ること須臾、赫赫として盛名を流す。

竊喜復竊歎。諒知有所成。竊に喜んで復た竊に歎じ、諒に成すところあるを知る。

人事安可恆。奄忽令我傷。
 聞子高第日。正從相公喪。
 哀情逢吉語。惆悵難爲雙。
 暮宿偃師西。徒展轉在牀。
 夜聞汴州亂。遠壁行徬徨。
 我時留妻子。倉卒不及將。
 相見不復期。零落甘所丁。
 驕兒未絕乳。念之不能忘。
 忽如在我所。耳若聞啼聲。
 中途安得返。一日不可更。
 俄有東來說。我家免罹殃。
 乘船下汴水。東去趨彭城。
 從喪朝至洛。還走不及停。

人事安んぞ恆なるべき、奄忽我をして傷ましむ。
 子が高第を聞くの日、正に相公の喪に從ふ。
 哀情、吉語に逢ひ、惆悵として雙を爲し難し。
 暮に偃師の西に宿し、徒に展轉して牀に在り。
 夜、汴州の亂を聞き、壁を遠つて、行いて徬徨す。
 我、時に妻子を留め、倉卒、將ゆるに及ばず。
 相見ること、復た期せず、零落して丁るところに甘んず。
 驕兒、未だ乳を絶たず、これを念うて忘るる能はず。
 忽ち我が所に在るが如く、耳に啼聲を聞くが若し。
 中途にして安んぞ返ることを得む、一日も更ふべからず。
 俄に東來の説あり、我が家、殃に罹ることを免ると。
 船に乗じて汴水を下り、東に去つて彭城に趨く。
 喪に從つて朝は洛に至る、還り走つて停まるに及ばず。

假道經盟津。出入行澗岡。
 日西入軍門。羸馬顛且僵。
 主人願少留。延入陳壺觴。
 卑賤不敢辭。忽忽心如狂。
 飲食豈知味。絲竹徒轟轟。
 平明脫身去。決若驚鳧翔。
 黃昏次汜水。欲過無舟航。
 號呼久乃至。夜濟十里黃。
 中流上灘潭。沙水不可詳。
 驚波暗合沓。星宿爭翻芒。
 轅馬躡躑鳴。左右泣僕童。
 甲午憩時門。臨泉窺鬪龍。
 東南出陳許。陂澤平茫茫。

道を假りて、盟津を經、出入して澗岡を行く。
 日、西にして、軍門に入れば、羸馬顛して且つ僵る。
 主人少らく留まらむことを願ひ、延き入れて壺觴を陳ぬ。
 卑賤敢て辭せず、忽忽として心狂するが如し。
 飲食、豈に味を知らむや、絲竹、徒に轟轟たり。
 平明、身を脱して去り、決として、驚鳧の翔けるが若し。
 黃昏、汜水に次し、過ぎむと欲するも舟航なし。
 號呼、久しうして乃ち至り、夜、十里の黃を濟る。
 中流より灘潭に上り、沙水、詳にすべからず。
 驚波、暗くして合沓たり。星宿争つて芒を翻す。
 轅馬、躡躑して鳴き、左右、僕童を泣かしむ。
 甲午、時門に憩ひ、泉に臨みて、鬪龍を窺ふ。
 東南、陳許を出づれば、陂澤、平かにして茫茫たり。

道邊草木花。紅紫相低昂。
 百里不逢人。角角雄雉鳴。
 行行二月暮。乃及徐南疆。
 下馬步隄岸。上船拜吾兄。
 誰云經艱難。百口無天殤。
 僕射南陽公。宅我睢水陽。
 篋中有餘衣。盎中有餘糧。
 閉門讀書史。窻戶忽已涼。
 日念子來遊。子豈知我情。
 別離未爲久。辛苦多所經。
 對食每不飽。共言無倦聽。
 連延三十日。晨坐達五更。
 我友二三子。宦遊在西京。

道邊、草木花さき、紅紫相低昂。
 百里、人に逢はず、角角として雄雉鳴く。
 行行二月の暮、乃ち徐の南疆に及ぶ。
 馬を下つて隄岸を歩し、船上つて吾が兄を拜す。
 誰か云ふ、艱難を経て、百口、天殤なしと。
 僕射の南陽公、我を睢水の陽に宅せしむ。
 篋中に餘衣あり、盎中に餘糧あり。
 門を閉ぢて書史を讀む、窻戶忽ち己に涼し。
 日に子が來り遊ばむことを念ふ、子、豈に我が情を知
 別離、未だ久しと爲さず、辛苦、經るところ多し。
 食に對して毎に飽かず、共に言うて、聽に倦むなし。
 連延三十日、晨より坐して五更に達す。
 我が友二三子、宦遊して西京に在り。

東野窺禹穴。李翱觀濤江。
 蕭條千萬里。會合安可逢。
 淮之水舒舒。楚山直叢叢。
 子又捨我去。我懷焉所窮。
 男兒不再壯。百歲如風狂。
 高爵尙可求。無爲守一鄉。

東野は禹穴を窺ひ、李翱は濤江を觀る。
 蕭條たり千萬里、會合、安んぞ逢ふべき。
 淮の水舒舒たり、楚山直に叢叢たり。
 子又我を捨てて去る、我が懷、焉ぞ窮まるるところ。
 男兒再び壯ならず、百歲風の狂するが如し。
 高爵、尙ほ求むべし、一鄉を守ることを爲す無かれ。

【字解】 分一日光 一日の光陰を共に分つ。
 【一】 孟君 即ち孟郊。 【二】 屬相府 汴州董晉の幕下に居たことを指す。
 【三】 維時 時はこれと訓すべし、詩經に多く見ゆ。 【四】 月魄死 陰曆の朔日頃をいふ。 【五】 冬日朝在房 房は二十八宿の一、太陽が房といふ星座に來る。月令に「孟冬の月、日、房に在り」と見ゆ。上の句と并せて、十月の一、二日頃といふこと。 【六】 詭怪道理に合はぬ奇怪な事ども。 【七】 披猖 昌被の如し、楚辭の註に「衣を被つて帶せざる貌」とある。覆ひかぶせる。 【八】 館 家を借りて宛がふ。 【九】 夜光 珠の名。 【一〇】 州家 その州の主人公、即ち董晉の役所。 【一一】 選試繆所當 汴州に於て進士豫選の試験を行ふに就いて、自分が誤つて試験官に成つたといふこと。この時、反舌無聲の詩を試みた處が、張籍は見事に及第した。 【一二】 相公 即ち董晉。 【一三】 工席 工は樂工。 【一四】 閑 終る。 【一五】 之子 詩經に之子于歸とあつて、對者を指して云ふ。 【一六】 諒 まことに。 【一七】 奄忽 倏忽、驀忽等に同じ。 【一八】 聞子高第日 張籍は、その後、上京して、貞元十五年、高郢が知舉たりしときに登第した。この年二月、董晉が病死したので、韓愈は、その喪を護して、洛陽に行くことになつたので、その詳は、前の總説に見えて居る。 【一九】 惻怛 楚辭の遠遊に恨愔愔而乖懷とあつて、亂れる貌。 【二〇】 難爲雙 喜んで善いか悲んで善いか分らぬ

といふ意。【三】 偃師 縣名、今洛州に在る。【三】 汴州 韓愈の本傳に「愈、喪に従つて四日ならざるに汴軍亂る」とあつて、この年二月乙酉、宣武軍亂れて、留後の陸長源が殺されたことといふ。【二】 將 率ゆる。【三】 甘所 西京賦に「惟愛所丁とあり、爾雅に「丁は當なり」とあつて、成り行きに儘に甘んずる。【三】 不可更 旅程を一日たりとも變更することは出来ない。【三】 乘船下汴水 蔣註に「公の妻子、先づ徐州に往く。唐地理志、徐州彭城郡今南直隸に屬す」とある。【三】 朝至洛 蔣註に「或は朝の字なし、洛の下に陽の字あり。今按ずるに、朝至洛は、蓋し洛語の語を用ふ。又下文日西入三軍門といへば、これ當に朝至洛に作るべきこと明かなり」とある。【三】 盟津 即ち孟津。【三】 澗岡 溪山の間。【三】 主人 河陽節度使李範を指す、註に李元とあるのは誤である。【三】 次 やどる。【三】 汜水 河南成皋縣に在る。【三】 十里黃 汜水は此で黄河と落ち合ふから、川幅が十里もある。【三】 灘潭 河中の淺灘をいふ、方崧卿の説に「郭璞曰く、江東の人、水中の沙堆を呼んで潭と爲すと、潭は即ち灘なり」とある。【三】 躡躡 跳り上がる。【三】 時門 地名、左傳昭公十九年に「鄭大水、龍、時門の外の洧淵に鬪ふ」とある。【三】 陳許 二地の名、今ともに河南開封府に屬す。【三】 陂澤 陂は隄塘、澤は卑濕の地。【四】 徐南疆 徐州の南界。【四】 吾兄 蔣註に「公に三兄あり、皆早世す。集中に見ゆるものは、雲卿の子愈、紳卿の子岌、皆公の從兄、或は曰く、吾兄は張籍を謂ふと、非なり」とある。【三】 天塲 天は幼年で死ぬこと、塲は不慮の難に罹つて横死すること。【三】 僕射南陽公 僕射は官名、南陽公は爵名、これは徐泗濼節度使張建封を指す。二月の末、韓愈は、徐州に著して、張建封を訪ふと、取り敢へず、節度推官に任命して呉れた。【四】 睢水陽 睢水は河の名。無論、徐州に在る。陽は日を受ける方で、山ならば南麓、川ならば北岸。韓愈の孟東野に與ふる書に「主人余と故あり、余を符離睢水の上に居らしむ」とある。【四】 東野窺禹穴 東野は孟郊の字、蔣註に「禹穴は本と蜀に在り、會稽に作るものは是に非ず。史記の自敘に、會稽に上るといふは、吳越を總ぶるなり。禹穴を探るとは、巴蜀を言ふなり。後人解せず、遂に會稽禹廟の傍の一小坎を以て之に當つ、故に退之亦た考に失し、遂に孟郊が越に遊ぶを以て、禹穴を窺ふといふ、これ亦た誤を以て誤を承くるなり」といつた。但し、韓愈は、時俗に従つて襲用したので、さう六つかしくいふ必要はない。【四】 李翱觀濬江 浙江の觀濬は、むかしから有名で、この濬江は、これを指したのであらう。李翱の論性の末に「南濬江を

觀て越に入る、而して、吳郡の陸儋存せり、これと言ふ。儋曰く、尼父の心なり」とあるので、多分この時だらうといふことである。【四】 楚山直 直は蠱に同じ、徐は故の楚地にして、南、江淮に通ずるが故に、楚山といつたのである。【四】 如風狂 疾風の一過し去る様だといふ意。

【題義】 張籍の略傳は、前に總説の中に述べて置いたから、參照して貰ひたい。この詩は、何義門が「貞元十五年、公、時に徐に在り、籍、公に謁するを得たり、未だ幾ならずして、辭して去る、故に是詩を作つて之を送る」といつた通り、徐州に於て、張籍を送つたので、詩中には、最初、張籍と交を結ぶに至りしことより始め、自分が此地の節度使張建封に身を寄せて居た處へ張籍が尋ねて来て、日夕會合をして居たが、今次何かの都合で、南、楚地に向つて出立することに成つた、まことに名殘惜しいといふので、大半は、自己の經歷を述べたものである。この詩は、杜甫を學び、北征・彭衙行の面影を傳へて居る。但し、押韻に至りては、一韻到底で、大體は七陽であるが、一東・二冬・三江・八庚・九青を通押し、その上、複韻、即ち同じ韻を二度使ふこともあつて、前人の議論も、なかなか入釜しい。しかし、韓愈その人の見識で、古體の詩を作るには、近體と同じき窮屈な韻法に據る必要はないといふので、詩經、楚辭に溯つて、以上六部の文字は殆んど一韻と見ても差支がないといふ考から、之を雜用したのである。要するに、韓愈にして始めて可なりといふべく、後人が、こんな眞似をした處で、誰も是認して呉れる筈はない。

【詩意】この日は、實に惜むに足るべく、君と一處に居るのも今日限りである。この酒は、嘗むるに足らず、それよりも、一言でも多く話をして、胸のすく様にした。そこで、酒を棄てて、君と共に語り明かし、この一日の光陰を共に長閑に過ごさうではないか。おもへば昔、まだ君と相知らざりし時、孟東野は、南方を旅行した歸りだといつて立ち寄り、頗る誇り顔に、自得するところあるもの如く、今次、旅中に張籍といふ者に遇つたが、その文章は、素張らしいものだといつたので、これが即ち君の事を傳聞した其始まりであつた。その時、自分は、董晉の幕下に屬して、事務を執つて居たから、わざわざ出かけて、遇ひに行くことも出来ず、その人を思へども、相見るに由なく、千々に心に思ひ亂れて居たところが、その年の十月一二日頃、例の如く、終日公事に奔走して後、退廳する時、君が適まこの汴州に来たとのことであつた。そこで、大に喜んで、車を迎ひに遣り、君を載せて我が寓に來らしめ、中堂に案内して對坐し、自分の懷抱を開いて、君の説くところを拜聴したところが、果然、豫期せしところに協ひ、愈よ以て君の偉いことが分かつた。顧みれば、孔子が歿せられしより、ここに幾千年、仁義の道も、いつしか荒蕪に歸して、往來も出来ぬ位、その後、諸子百家が紛然として起り、正理に合はぬ奇詭怪異の説を唱へて、互に他を并さむと企て、儒教の衰微は、愈よ以て甚しい。長老は、唯だ聞くところを固守して、獨善を以て能事となし、聖人の道を復興しやうと思ふものもなく、後生は、その説を習うて常となし、儒教は、退嬰主義の者だといふ位に思つて居る。

されば、少しく仁義の道を知つて居る者さへ、なかなか求め難く、まして、純粹な斯道を研究して、治國平天下の大業を成さうといふ者は、むかしから絶無で、君が常人と異なるところは、主として、此點に在る。たとへば、彼の園中に植ゑた木のやうなもので、根さへあれば、それから、枝葉の繁茂するは、造作もない。君は、既に根柢を得て居るから、これから、勉強次第で、どんな、偉い者にも成れる。そこで、自分は、及ばすながら、君をして大成せしめむと欲し、これを留めて去らしめず、城西の傍に小さな家を借りて、そこに君を置いてやり、日夕往來して、一處に學藝を研究した。かくて、歳時未だ幾ならざるに、君の文章は、益々進んで、浩浩として湖江の如く、明かに其大を増して來た。然るに、世人には、さういふ事が分からぬから、あんな貧乏書生が、何に成らうぞ、韓愈も、入らぬ世話をして居る馬鹿な奴だといつて、君を指しつつ、我が人を見ることが明かならざるを嘲笑して居た。元來、兒童は雷電を畏れ、魚鼈は夜光の珠に驚くが、世人は之と同じく、ほんの目さきだけの事で、格別深い考もないから、君の人物を知らないのも、まことに無理はない。その内に、汴州に於て、進士豫選の試験を行ふことになり、自分は、謬つて試験委員長に成つたが、その時、わが出した試問に對して、君は辭を馳せて答案を書かれ、その文は、章句の末末まで、光彩陸離として輝くばかり、無論、好成绩で及第したから、愈よ紹介の文書を移して長安に送り出すことに成り、その送別の爲に、大宴會が催され、節度使の董晉は、朝服を着けて臨場し、樂工は、その席に於て、鹿鳴の古

詩を歌ひ、まことに、名譽至極な事であつた。かくて、饗宴の禮も濟み、樂も亦た終らむとする時に、董晉は、親ら相拜して之を公庭に送り、將來の雄飛を祝された。未だ幾ならずして、君は上京し、赫赫として盛名を馳せ、都でも大分評判が善いといふことを傳聞し、われは心竊に喜び、又私に感嘆し、君が遠からず成功することは言ふまでもない事で、自分も世話甲斐があると思つた。しかし、人事は固より常なく、禍福相倚り、忽ちにして、我をして傷心せしめるやうな出来事が起つた。それは、外でもないが、君が愈よ進士の試験に應じて登第したといふ報告を得た時、此方に於ては、主人と頼んで居た董晉が俄に病死したので、一方には哀情を催し、一方には吉語を耳にし、心が打亂れて、喜んで善いか、悲んで善いか、自分ながら全く分からぬやうな始末。それから、自分は、董晉の喪を護して、その故郷なる洛陽に送り届けることになり、日暮に黄河の西岸なる偃師縣に投宿し、展轉反側、牀の上に困んで居ると、その夜、今まで居た汴州に於て大騷動が起つたといふことを聞き、遽て身を起し、壁を繞つて、うろろしたるが、何とも仕方がない。自分は妻子を汴州に留めて置いて、倉卒の際、これを引き具して其地を立ち去るにも及ばなかつたので、かう成つた上は、再び彼等と相見ることが出来ないかも知れぬ。おのが一身は、どうせ不運に生まれ付いたのだから、成り行きの儘に甘んじて居るが、唯だ一つ心残りになるのは幼女で、まだ乳を絶たぬ位、これを念うて忘れることも出来ず、忽ちにして、自分の傍に来て居る様に思ひ、恍惚として、その泣聲を聞くやうな氣がした。そこ

で、一遍立ち歸つて、その模様を詳しく見届けたいが、自分は、現に主人の靈柩を護して行く途中だから、引き返すことも出来ず、おまけに、日程も定まつて居るので、一日たりとも、變更する譯には行かない。すると、幸にも、東方から便があつて、わが一家は、幸に殃に罹ることを免れたといふので、やつと、胸を撫で下して安心した。兎角する内に、妻子は難を免れて、後から追ひ付いたから、自分は、洛陽の用事を濟ましたら、彭城に往つて張建封の世話に成る積りだから、一足先に往つて居ろといふので、舟に乗せて汴水を下り、東に向つて彭城に行かせ、それで、やつと心配が無くなつた様な次第。それから、自分は、董晉の喪に従つて、朝に洛陽に至り、用事も片付いたから、早速、彭城に向ふことにして、一宿するにも及ばず、やがて道を取つて、孟津の渡場を經、今度は、馬に乗つて、谿山の間を登頓下上して辿り行き、日暮には、河陽節度使李範の軍門に到着したが、今まで乗つて居たやくざ馬は、疲れ切つて、倒れて仕舞つた。すると、李範は、大に喜んで、暫時逗留しろといひ、その宅に迎へ入れて、種種酒肴を陳して、款待して呉れた。自分は、もとより卑賤の身分であるから、少しも辭退せず、遠慮なく御馳走に預つたが、妻子の事にかかると、心落ち著かすして、さながら、狂するが如く、飲食をしても、味が分からず、絲竹の聲も、唯だ轟轟たるのみで、さつぱり面白くもなかつた。その内に、夜が明けると、李範の引き留めるを聞かず、無理に振り切つて身を脱し、その決起する様は、さながら驚鳥の翔けるが如く、急ぎに急いで、黄昏の頃、汜水の岸に

著いた。汜水には渡し場があるが、生憎、渡らうとしても舟が見えず、屢ば聲を揚げて呼ぶと、漸く對岸から渡し守が来て、夜、十里も河幅のある黄河を渡つた。その中流には、淺瀬があつて、そこを上らねばならず、舟が沙に膠着することもあるが、夜であるから、その模様は、はつきりとは分らなかつたが、時として、舟が深い處に這入つて、驚波が刎ね起り、それに映る星の光が芒を翻して閃くことがあつた。わが車を輓く馬も、一處に舟に乗せてあるが、驚いて跳ね上り、左右に居る小者は、聲を揚げて泣き叫ぶ位で、その困難は、一通りでない。かくて、甲午の日、時門といふ處に休息した。ここは、春秋の頃、龍が鬪つた處であるから、泉に臨んで、その故蹟を窺つた。次いで、田舎道を辿つて、東に行き、西に行き、陳許の處を通ると、ここらは、一帶の平地で、隄塘池沼が相交つて居て、道の邊には、草木が花咲いて、紅や紫が靡き亂れて居る。しかし、茫茫たる荒野で、百里の間、人にも逢はず、時たま、角角として雄雉が鳴き叫ぶのみである。行き行きて、二月の末に、やつと徐州の南境に著し、馬から下りて、隄岸を歩くと、そこに渡し場があつて、吾が従兄が迎ひに来て居たから、舟に上つて始めて挨拶をした。今までは、非常の困難を経たのに、一家百口、幼死したのもなく、横死したものもないといふのは、勿怪の幸であつて、ここに、初めて愁眉を開いた。徐州に居る僕射南陽公張建封は、自分を迎へて、睢水の北岸に然るべき家を造つて與へられ、やがて、官職をさへ宛てがはれたから、生活も、どうやら樂になり、篋笥の中には餘分の著物もあり、米櫃

の中には餘れる米があつて、朝夕に困らぬ様になつたから、門を閉ぢ、客を謝して、ゆつくり書物で見やうといふ氣にもなり、折から、窓戸の間、忽ち涼を生じて、世は、まさしく秋に成つた。日ごとに、君が此に来て呉れば善いかと思つて居たので、君の方では、我が心情を察知して居た譯でもなからうが、嬉しや、君が此に來遊された。別離の後、日久しといふ譯でもないが、その間、自分は、さまざまの憂き目に遇つて、経験したことも多かつたので、是非君に聞いて貰はねばならぬ。それから、我ひとり食に對すれば、腹が膨れて居る様で、飯を食ふ氣にもなれぬが、君と共に話をして居れば、實に聽くに倦むことなく、三十日ばかり、引きつづいて、早朝より坐して五更にも及ぶ位、おもふ存分に對談をした。然るに、君は、今、われと別れて南方に行かれるといふから、ここに別れの思に堪へ兼ねる次第である。わが友人としては、君ばかりでなく、外に二三人はあるが、その中、孟東野は、近ごろ、越に行いて禹穴を探らむとし、李翺は、浙江に往つて濤を観るといふので、いづれも、遠く立ち去り、蕭條として千萬里の外に隔り、滅多に會合することも出来ぬ。淮水は舒舒として長く流れ、楚山は、矗として簇がつて居る。さういふ處へ、君も亦た今次我を捨てて出かけるといふので、我が悲しい思は、まことに窮まる處もない位。さばれ、男兒たるもの、若い時は二度となく、百年の壽命も、旋風の一掃するが如く、知らぬ間に盡きて仕舞ふから、君にしても、今の中、せつせと旅行でもして、汎く交際を求めるのが善いので、今後立派なる高爵を求められることは、至極結構

な事といふべく、碌碌として一郷を守り、家にばかり、こびり付いて居るには及ばぬ。この別は、まことに幸いが、これも、君自身の爲であるから、この行の幸多からむことを祈る次第である。

【餘論】この篇も随分長いが、例の如く、段落は截然として、少しも紊れて居らぬ。此日足可惜の四句は總提。念昔未知子より魚驚驚三夜光に至るまでは、初めて張籍と交を結び、しばらく自分の家に置いて、さまざまに奨励したことを敘し、州家舉進士より愉悅難爲雙に至るまでは、張籍が進士の豫選に成功し、次いで上京して愈よ進士に成つたことを敘し、暮宿偃師西より東去趨彭城に至るまでは自分が董晉の喪を護して上洛せしことより、汴州の亂に及び、そして先づ妻子を徐州に遣したことを敘し、從喪朝至洛より百口無天殤に至るまでは、洛陽に到着して喪事を終りし後、直に引返して、自分も徐州に赴きしことを敘し、僕射南陽公より結末、無爲守一郷に至るまでは、愈よ徐州に落ち著き、やがて張籍が來訪し、それから、今回又出發するを送ることを敘し、はるかに起首に回想して、現在の地位に立ち返つたのである。乾隆御批には「籍と交結の初に追溯し、今日重ねて逢うて別れ去るに至り、しかも、其中己の崎嶇險難を歴敘し、意境紆折、時地分明、摹刻傳へざるの情、翻縷必すしも詳にせざるの事を併せて、倥傯雜沓、眞に波瀾夜驚き、風雨驟に至るの勢あり。若し、後人これを爲さば、これを冗散に失はざるもの鮮し。須らく、その勁氣直達の處を玩ぶべし。數十句、一句の如し。尤もその通篇章法博撓操縱、筆力、一髮の千鈞を引くが如きを玩ぶべし。庶はく

は、規矩の外に神明たるべし」とある。それから、朱竹垞は破題を評して「起句奇壯、意高遠」といひ、孔丘歿已遠以下十餘句に就いては「敘事太だ詳、太だ實なるを覺ゆるも、亦た稍や拙」といひ、暮宿偃師西の一段に就いては「自己、跋涉辛苦、又この變を聞いて敘し來り、稍や味あるを覺ゆ。大抵文、情に生ず、これ本等」といひ、道邊草木花の四句に就いては「この間の點景、方には是れ詩家の趣味たるを知るを要す。北征の詩、或紅如丹砂等の句、亦た是れ此意」といひ、淮之水舒舒、楚山直叢叢の二句、わざと對句を爲さぬことに就いては「一の之字を添へ、故らに對を避く、乃ち更に古健。然れども、秋懷の詩、何ぞ嘗て對せざらむ。ここには、上下調法如何を見るを要す」といつた。それから、この詩の押韻に就いては、前にも概説して置いたが、歐陽修は「退之、用韻に工なり。韻を得て寛なれば波瀾横溢、傍韻に泛入し、乍ち還り、乍ち離れ、出入回合、殆んど拘はるに常法を以てすべからず。此日足可惜の類の如き、是れなり。韻を得て窄ければ、復た傍出せず、しかも、難に因つて巧を見、愈よ險、愈よ奇。病中贈三張十八の類の如き、是れなり。譬へば、善く馬を馭するもの、通衢廣陌には縱橫馳逐、惟だ意の之くところ、水曲蟻封に至りては、疾徐節に中つて、しかも少しも蹉跌せず、乃ち天下の至工なり」といつて居る。されば、古しへの通韻を用ひて、恬として怪まざるは、韓愈にして、初めて之あるものといふべく、洪容齋は「退之の此首、張籍に贈る、凡そ百四十句、東・冬・江・陽・庚・青の六韻を雜用す。その亡ぶるに及んで、籍、詩を作つて之を祭る、凡そ

百六十六句、陽庚の二韻を用ふ。その語、鏗鏘震厲、全く韓體に倣ふ。謂はゆる乃出二侍女、合彈琵琶等なるものなり」といひ、李光地は「按ずるに詩・易・書・春秋及び秦漢以上の古文、韻、東冬・江を用ひて一部を爲し、陽一部、青一部、庚は半ば陽に入りて、半ば青に入るなり。蒸は自ら一部たり。支・微・齊・佳・灰、一部たり。而して、支韻の字は、半ば歌に入り、歌・麻は一部たり。而して、麻韻の字、半ば虞に入り。魚・虞は一部たり。蕭・肴・豪・尤は一部たり。尤韻の字、又その半を以て支と虞とに入る。眞・文・元・寒・刪・先は一部たり。侵・覃・鹽・咸は一部たり。これ長洲顧寧人氏の區別するところ、凡そ十部、以て古韻に合す、その援据詳明にして、證驗的確なり。顧氏、韓公の古韻を識らざるを譏る。蓋し、古詩とは乃ち元和聖德詩の類なりと謂ふ。然れども、顧氏の學は、詩書古文に質して、古文に合ふものを以て多しと爲す。聲氣の元、歌樂の用に至りては、古人律を協へ文を同じうする所以の本なれば、未だ明かにする能はざるものあるに似たり。蓋し、東冬・江・陽・庚・青・蒸の七韻は、原と一部たり、その元、一氣生ずるところを以て之を用ひ、以て歌曲に叶ふるは、收聲必ず同じきが故なり。眞・文・元・寒・刪・先、及び侵・覃・鹽・咸、皆然り。支・微・齊・魚・虞・歌・麻の諸韻に至りては、又各部の根、凡そ各部中の字、生音起韻、皆、これよりして得、應に自ら一部と爲して之を通過すべし。その源派分明ならむことを欲し、故に亦た別つて三部となす。歌・麻なり。魚・虞なり。支・微・齊なり。然れども、魚・虞の韻は、能く蕭・肴・豪・尤を生ず、故に蕭・肴・豪・尤は、魚・虞と同一收聲にして以て通用すべし。支・微・齊は、能く佳・灰を生ず、故に佳・灰は支・微・齊と同一收聲にして、以て通用すべきなり。歌・麻と魚・虞とに至りては、別部と雖も、しかも尤も相近し。蓋し、古人、魚・虞の字を讀んで、皆模の字の如く、麻の字を讀んで、皆歌の字の如く、歌・模兩部相近く、その收聲亦た頗る同じければ、魚・虞の蕭・肴・豪・尤に通すべきもの、歌・麻亦た通すべし。東冬・七韻、眞・文の六韻、侵・覃の四韻の如き、亦た支・微・魚・虞・齊・歌・麻の生ずるところと雖も、然れども、齒舌唇鼻の間に翻轉して之を得、佳音直切の生ずるところ、蕭・肴・豪・尤・佳・灰の如き者の比に非ず、故に各自ら部を爲して相通すべからざるなり。退之の此詩、正に東冬等一部を用ひ、聖德詩は歌・魚・虞・尤等、上聲の一部を用ひ、謝自然の詩は眞・文等の一部を用ひ、皆、本を極め、源を窮め、古韻の精意を得たり。その學博くして、その見卓なり。且つ三代秦漢の古書、かくの如きもの、頗る衆し、第だ先入を主として察せざるのみ。歐公は以て、旁韻に泛入するに意あつて、以て奇を見ると爲し、又或は以て當つるに叶聲を以てして之を求むと爲す、これ固より淺近の論、而して顧氏の顯に譏斥を爲す、亦た未だ苟くも警るを免れざるなり」といひ、俞瑒は極めて簡單に「この詩、用韻、雜に非ざるなり。古しへ、庚・陽二韻、原と自ら相通す。鹿鳴采芑の詩を見て、自ら却つて俗說通用轉用の例に非ざるを見るなり。その東韻に入るものは、桑中の詩、亦た然り」といつた。これ等を併看すれば、その雜用なるもの、實は雜用に非ずして、古しへの韻法に叶へることを知るであらう。この詩には疊韻が少くないので、

古詩 此日足可惜一首附張籍

光・鳴・更・狂の字が韻として各二つ用ひてある。胡仔は「退之は、好んで用韻を重疊して、以て己の意を盡す、蓋しその病たるを郵へざるなり」といひ、俞琰は「少陵の飲中八仙歌、かつて韻を疊用す、この詩、中間の敘次、亦た彭衙・北征の光景に仿たり」といつて居る。

幽懷

幽懷

幽懷不能寫。行此春江潯。幽懷寫くべからず、この春江の潯を行く。

適與佳節會。士女競光陰。適ま佳節と會し、士女、光陰を競ふ。

凝妝耀洲渚。繁吹蕩人心。凝妝、洲渚に耀き、繁吹、人心を蕩す。

間關林中鳥。亦知和爲音。間關たり林中の鳥、亦た知る、和して音を爲すを。

豈無一罇酒。自酌還自吟。豈に一罇の酒なからむや、自ら酌み還た自ら吟するのみ。

但悲時易失。四序迭相侵。但だ悲む、時は失ひ易くして、四序迭に相侵すを。

我歌君子行。視古猶視今。我は君子行を歌ふ、古を視ること猶ほ今を視るがごとし。

【字解】【一】寫。除く。【二】潯。水涯。【三】競。光陰。月日の早いのに負けぬ様に行樂に急なるをいふ。【四】繁吹。笛の聲の繁多なるをいふ。【五】蕩。とろかす。【六】間關。和鳴の聲。【七】君子行。古樂府の題で、文選に載せ、その起首に君子防二未

然二不處嫌疑間、瓜田不縛履、李下不正冠、嫂叔不親授、長幼不比肩とある。【八】視古猶視今。列子に「世事苦樂、古しへ猶ほ今のごときなり」とある。

【題義】幽懷といふ題は、例の如く、第一句から取りしこと、もとより論なく、わびしき思といふ意で、われ一人世と異なる心の寂しさを詠出したのである。註釋家の説に據ると、韓愈が徐州なる張建封の幕中に居た時分、その命を奉じて、ある時、都に出張したことがあつたが、その目的を達するこゝとが出来ず、そして、幕僚には、始終氣兼をせねばならぬから、今度歸ると、その間が愈よ面白くない、しかし、公然、建封に訴へ出ることも出来ぬから、この詩を作つたといふのであるが、それは、單なる想像に本づいたので、確乎たる史實はない。又一説には、この詩の中なる君子行の君子は、次の君子法三天運といふ詩に關係がある。そして、君子法三天運の詩は、註釋家の説に據ると、順宗永貞中の作たることは、誰しも異論がないので、さうすると、この詩は、韓愈の友人たる劉禹錫・柳宗元輩が、韋執誼・王叔文と交通し、李下の冠、瓜田の履の嫌疑を避けないのは、甚だ其意を得ず、且つ洵に嘆はしいことであるといふ意を逗露したものといふことに成る。しかし、詩を以て諷諭に意ありとなすは、彼士論詩家の常弊で、予輩の好まざるところ、必ずしも之に拘泥せず、唯ださういふ解釋があるといふことを知つて居れば、それで澤山である。

【詩意】わびしき思を除き兼ねて、ひとり、春江の岸邊を漫歩すれば、折しも、長閑けき春の日で、

士女は遊ぶに忙しく、妝を凝らして洲渚に輝くばかり、笛の聲は繁くして、人の心を蕩かす程である。林中の鳥も、亦た間關として鳴きわたり、さながら之と相和するが如くである。われに一樽の酒が無いではないが、世俗と異なれば、自然友だちも少く、ひとりで酌んで、又ひとりで歌ふばかり。おもへば、時は失ひ易く、四時は遠慮なく推し移つて、まことに歲月は人を待たない。われは、君子行てふ古詩を歌つて、自ら慰めて居るが、かの未然を防ぎ、嫌疑の間に居てはならぬといふのは、昔も、今も、全く同じことである。

【餘論】朱竹垞は「これ選調、これ自らは是れ詩の正派」といつた。それから、起首は阮籍の詠懐の中の獨坐空堂上、誰可與歡者、出門臨永路、不見行車馬に本づいたので、竹垞は「起は是れ嗣宗の獨坐空堂上の四句を裁して兩句と爲し、却つて、自然に近し」といつた。

君子法天運

君子天運に法る

君子法天運。四時可前知。

君子は天運に法り、四時前知すべし。

小人惟所遇。寒暑不可期。

小人は惟だ遇ふところ、寒暑期すべからず。

利害有常勢。取捨無定姿。

利害、常勢あり、取捨、定姿なし。

焉能使我心皎皎遠憂疑。

焉んぞ能く我が心をして、皎皎、憂疑に遠ざからしめむ。

【字解】(一)法、則る。(二)前知、前以て知る。(三)皎皎、光明の貌。

【題義】この詩は、前首の條に一寸言つた通り、劉禹錫・柳宗元、二人の爲に作つたのである。徳宗の崩御に次いで、順宗が即位された處が、王伾・王叔文の二人は、帝が東宮に居た頃、寵を得て居たから、朝政の革新を企て、宰相の章執誼と結託して、順宗が病氣で物を言ふことが出来ないのを幸とし、天子の詔と稱して、短い時日に、様様の事を遣つた。劉柳二人は、その幕賓として大に信賴せられ、一時飛ぶ鳥をも落す勢であつたが、韓愈は之を傳聞し、さういふ悪い事をした處で、とても長く續くものではないといふ意を述べたのである。

【詩意】世に君子といはれるものは、天運に法つて、一舉一動、道理に違はぬやうにするので、天運は、春夏秋冬、自然に順序があつて、四時の推移は、もとより、前以て、知ることが出来る。君子は、利害を豫察して、去就を爲すから、決して、その身を誤るやうな事はない。これに反して、小人は、唯だ其境遇に従つて、一己の僥倖を得むとし、寒暑の推移などは、少しも、あてにしない。元來、利害には常勢あつて、かういふ事をすれば利、かういふ事をすれば害といふ様に、ちやんと決まつて居るのに、小人の取捨するところは、全然誤つて居て、一定の體式といふものがない。今や、劉柳の二人までが、取捨を誤るといふは、まことに呆れた話で、自分は、彼等の仲間に立ち交ふことは出来

ない。我が心は、皎皎として潔白であるが、友人中に、さういふものがあるから、自分の身にも悪い事があるのではないかと思はれることを心配して居るので、どうか、さういふ事のない様に、我が心をして憂疑より遠ざかる様にして欲しいものである。

落葉一首送陳羽

落葉一首、陳羽を送る

落葉不更息。斷蓬無復歸。

落葉更に息まず、斷蓬復た歸るなし。

飄飄終自異。邂逅暫相依。

飄飄として、終に自ら異なり、邂逅暫く相依る。

悄悄深夜語。悠悠寒月輝。

悄悄として深夜に語り、悠悠として寒月輝く。

誰云少年別。流淚各霑衣。

誰か云ふ、少年の別を、流淚、各衣を霑す。

【字解】【一】斷蓬 ちぎれて飛ぶ蓬の穂。【二】邂逅 めぐり合ふ。【三】少年別 梁の沈約の詩に、平生少年日、分り手易日前期とある。

【題義】陳羽は、韓愈と同年の進士で、その人が故郷に歸るに就いて、これを送つて作つたのである。

【詩意】落葉は、木から離るれば、ちりちりばらになつて、風のまにまに飛ぶことを止めぬし、斷蓬は、一たび吹き上げられると、又元の處に歸るといふことはない。我と君とは、落葉や斷蓬に比

すべく、飄飄として、遂には異なるべきものであるが、偶然都に於て邂逅し、一處に試験を受けて及第し、暫時互に相依つて助け合つて居たのに、又ぞろ此に別となつた。悄然として、夜の更くるまで語りつづけると、窓前には、悠悠として、寒月が照り輝いて居る。むかしの人は、少年の別は、他日相遇ふことがあるから、格別苦にもならず、無造作に手を分つといつたが、なかなか、そんな譯のものではなく、互に涙を流して、衣裳が濡れる程になつた。

【餘論】蔣之翘の評に「晚唐の人、律詩かくの如く、古體に入つて較や別、自ら致あり」といひ、朱竹垞は「これ亦た拗律といふべし」といつた通り、これは、律體で、第五句の平仄の聊か入り違つた處は、拗體と見るべきものである。されば、これを古體に入れたのは、斷じて編者の誤である。

歸彭城

彭城に歸る

天下兵又動。太平竟何時。

天下兵又動き、太平竟に何時ぞ。

訐謨者誰子。無乃失所宜。

訐に謨るものは誰が子、乃ち所宜を失ふなきか。

前年關中旱。閭井多死饑。

前年關中の旱、閭井、死饑多し。

去歲東郡水。生民爲流屍。

去歲東郡の水、生民、流屍となる。

上天不虛應。禍福各有隨。

上天、應を虚しくせず、禍福、各隨ふあり。

我欲進短策。無由至彤墀。

我、短策を進めむと欲するも、彤墀に至るに由なし。

刳肝以爲紙。瀝血以書辭。

肝を刳つて以て紙と爲し、血を瀝いで以て辭を書す。

上言陳堯舜。下言引龍夔。

上言は堯舜を陳べ、下言は龍夔を引く。

言詞多感激。文字少葳蕤。

言詞、感激多く、文字、葳蕤少し。

一讀已自怪。再尋良自疑。

一讀、すでに自ら怪み、再尋、良に自ら疑ふ。

食芹雖云美。獻御固已癡。

芹を食うて、美と云ふと雖も、御に獻ずるは、まこと一

緘封在骨髓。耿耿空自奇。

緘封して骨髓に在り、耿耿として空しく自ら奇とす。

昨者到京城。屢陪高車馳。

昨は京城に到り、屢ば高車に陪して馳す。

周行多俊異。議論無瑕疵。

周行、俊異多く、議論、瑕疵なし。

見待頗異禮。未能去毛皮。

待せらるるは、頗る禮を異にすれども、未だ毛皮を去

到口不敢吐。徐徐俟其讖。

口に到るも、敢て吐かず、徐徐として其讖を俟つ。

歸來戎馬間。驚顧似羈雌。

戎馬の間に歸り來つて、驚顧して羈雌に似たり。

連日或不語。終朝見相欺。

連日、或は語らず、終朝、相欺かる。

乘間輒騎馬。茫茫詣空陂。

間に乘じて輒ち馬に騎し、茫茫として空陂に詣る。

遇酒卽酩酊。君知我爲誰。

酒に遇へば卽ち酩酊、君知れりや、我をば誰と爲すかを。

【字解】【一】評議。大に謀る、天下の大柄を握つて政治を行ふ。【二】彤墀。墀は階下の地。宮殿は、そこに赤い敷瓦を列べ

てある。【三】龍夔。二人の名、堯を輔佐した臣下。【四】葳蕤。草木の形容、ふさふさと繁茂して居る貌。【五】食芹。説文に「芹

は堯葵なり」とあり、列子に「宋に田父の喜んで芹を食ふものあり、郷豪に對して之を稱す。郷豪、取つて之を嘗む、口に置くと

に慘む。衆晒うて之を怨む。その人、大に慙づ」とあり、晉康の山濤に與ふるの書に「野人、背を炙ふるを快しとして、芹子を美と

して之を至尊に獻ぜむと欲するものあり。區區の意ありと雖も、亦た已に疎なり」とある。【六】獻御。天子の供御に獻ずる。【七】

高車。大官の乗る車。【八】周行。色色説もあるが、こゝでは在廷の臣僚。【九】異禮。尋常の禮に異なること。【十】其讖。揚子

法言に「讖、抵るべきか」とあつて、その註に「讖は諱隙なり」とある。【二】羈雌。羈は偶なきこと、獨り離れた雌。【三】終

朝。終日に同じ。【三】茫茫。ぼんやりして。【四】遇酒卽酩酊。晉書に「山簡、出でて征南將軍となり、襄陽に鎮す。時に童子

あり、歌うて曰く、山公出三何許、往至高陽池、日夕倒載歸、酩酊無所知、時時能騎馬、倒著白接羅、舉鞭問葛疆、何如并州

兒」と。

【題義】彭城は徐州、この詩は、韓愈が張建封の幕中に居た時の作である。韓愈の作に係る歐陽詹の

哀詞に「貞元十五年の冬、某、徐州の從事となり、京師に朝正す」とある。そして、この詩に歸彭城

とあるから、これは貞元十六年、長安から徐州に還つて來たのである。篇中に天下兵又動といふは、

十五年の秋、諸道の兵を起して吳少誠を討つをいひ、前年關中旱といふは、十四年の冬、京師飢をた
るをいひ、去歲東郡水といふは、十五年の秋、鄆滑に水ありしをいひ、その事は、醒齷の詩にも見え
て居る。それから、韓愈は、張建封の代理として上京したのであるから、當路の大臣などに遇つて、
種種話をして見たが、とても、おのが言を用ひて呉れないといふので、彭城に歸りし後、在京中の事
を追想して、この詩を作つたのである。

【詩意】 去年の秋、天下兵又動き、吳少誠を征伐されたが、今は大軍を動かすべき時勢ではなく、か
ういふことでは、太平は何時來るであらうか。今日、天下の大柄を握つて天子を輔佐する人の爲すと
ころは、宜しきを失つて居るのではないか、まことに譯が分からない。それから、一昨年の冬には、
關中が非常に旱で、村里の間には、餓死したものが随分多かつたし、去年の秋には東郡に大洪水があ
つて、其地の人民は、皆死骸となつて流失して仕舞つた。この天變地異の後を承けて、今しも、兵を
動かすといふのは、まことに氣が知れない。上天は、決して、應報を虚しくはせぬので、水旱、とも
に然るべき理由があつて、人を戒める爲めにしたので、禍福は、すべて善惡の行爲に隨つて來るもの
である。そこで、我は拙い論策を天子の御前に上言して、御警戒あるやうにと申し上げたいと思つた
が、賤い身分であるから、丹墀の處まで參上することが出来ない。しかし、是非、おのが志を貫徹
させたいといふので、肝を剝り取つて紙となし、血を滴らせて文字を書き列ね、上には、堯舜が無爲

垂拱して天下治まつたから、その道を講せねばならぬといひ、下には、堯の時には、龍夔などいふ
名臣があつたので、さういふ様に輔佐の名臣が御側に居なければ駄目だといひ、どうにかして、これ
を君の御手元に差し上げやうと思つて、その草稿を読み直して見ると、その言辭には、感慨激烈のこ
とが多く、おまけに、文飾がなくて露骨である。かくて、一讀して自ら怪み、再び其意味を尋ねて、
自ら疑ひ、どうも、これでは一寸差し出し兼ねると思つた。むかし、齊國の百姓は、芹がうまいから、
之を主君の供御に獻じたいと云つたものがある。その志は、さることながら、まことに愚な話であ
る。そこで、その上書を己が骨髓の中に封じとめて、唯だ耿耿として、自ら憐み、奇なり、奇なりと
いつて澄まして居る外はなかつた。去年の末、張建封の代理となつて、長安に上京し、數ば高車に
乗るところの當路の大臣輩に陪して、議論を鬪はしたことがあつた。そして、在廷の臣僚には、俊異の
人物が多いが、その議論は、如何にも婉曲であつて、些の瑕疵もなく、その上、韓退之は當今の文章
家だといふので、特別の待遇を賜はつたのは善いが、それは、ほんの表面だけの事で、その底まで、
毛皮を被つて居るから、その真相を窮める譯に行かない。そこで、我が意見を述べ立てやうとして、
もう口まで出かかつたが、しばらく差控へて、之を吐かず、徐徐として、善き機會もあれかしと待つ
て居た處が、とうとう言ひ出さずに仕舞つた。やがて、空しく彭城に歸ると、例の吳元濟征伐で、兵
馬を繰り出すといふ最中であつたから、番を離れた鳥の様に、ぼんやりして居た。張建封は、非常に

優待して呉れたが、時も時、場合も場合であるから、連日、或は一言も語り出でず、終日、やみやみと欺かれて居る様な気がした。仕方がないから、閑暇なる儘、馬に乗つて、何處といふ目當もなく、茫茫然として隄の處に來かかつた。この不平を消遣するには、他の方法もないから、酒さへあれば、飲んで酩酊する、それを見た人は、韓退之は、あんな飲んだくれの詰まらぬ男かといつて、わが本當の面目を知らずにけなし付ける、それが、まことに心苦しいが、胸の有耶無耶を搔き拂ふには、今さら仕方がない次第である。

【餘論】 乾隆御批には「時を憂ひ、亂を傷み、無聊に感憤し、馬に空陂に騎す、窮途の哭に減せず。周行俊異の數語、風刺微妙、謂はゆる中朝大臣老於事、詎肯感激徒媿嬰なり。刳肝瀝血の句は、少陵鳳凰臺の詩より化して出づ、又庾信の經藏碑に皮紙骨筆の句あり、退之、釋典を用ふることを喜ばずと雖も、然れども、前人の詞語を運化して自ら嫌ふなきなり」とある。周行多俊異は、反語に類し、滿廷の臣僚が純然たる官吏風で、相手の者を巧に言ひくるめて、口を開かしめず、そして、表面上、それを優遇して、巧に追ひ回すといふ様な有様は、宛然見るが如くである。

酔後

酔後

煌煌東方星。奈此衆客醉。

煌煌たり、東方の星、この衆客の酔を奈かむ。

初喧或忿爭。中靜雜嘲戲。

初め喧しくして或は忿争し、中ごろ靜にして嘲戲を雜ふ。

淋漓身上衣。顛倒筆下字。

淋漓たり身上の衣、顛倒す筆下の字。

人生如此少。酒賤且勤置。

人生、かくの如きは少し、酒賤しければ且つ勤めて置け。

【字解】 一 東方星 曉の明星。 二 嘲戲 文選の典論に、雜以嘲戲とある。

【題義】 この詩は、その題の通り、酔後の状態を有りの儘に寫したのである。

【詩意】 曉の明星が、煌煌として光つて居るが、この席は猶ほ散せず、衆客は皆酔ひ潰れて居るか仕方がない。初めは、何か少しばかりの言葉の行違から、入釜しく、騒がしく、忿り争ふこともあつたが、中ごろは、又靜になつて、色色冗談を言ひながら、互に打解けて居る。さうして、興が益す酩酊になると、著物の上に酒が淋漓として灑ぎかかり、興に乗じて、字を書いても、顛倒して、まことに變てこな物に成つて仕舞つた。かくの如く、多勢の人が相會して痛飲するのは、滅多に無いことであるし、おまけに、太平の今日、酒代も安いから、夜が明けても構はず、その儘に酒を置き放しにして、十分に飲むが善い。

【餘論】 魏道輔の紫薇詩話に「夏英公竦、老杜の初秋月を評して云ふ、微升紫寒外、已隱暮雲端。意、

肅宗を主とするなり。吾、退之の煌煌東方星を觀るに、其れ順宗の時の作か、東方は、憲宗の儲宮に在るなり」といひ、つまり、順帝の在位中、王叔文・韋執誼輩が權威を恣にして、勝手な眞似をして居るのを諷したものだといつたが、蔣之翘は之を駁して「彼此ともに失す、二公もし託寄あらば、斷じて此の若き謬あらず」といひ、これは流石に見識が高い。方世舉は、この首を以て、次の醉贈張秘書の後に作つたので、當夜の狀況を補寫したものだといつたが、この解釋は、極めて面白い。朱竹垞は、之を評して「醉態宛然たり」といつた。

醉贈張秘書

醉うて張秘書に贈る

人皆勸我酒。我若耳不聞。
 今日到君家。呼酒持勸君。
 爲此座上客。及余各能文。
 君詩多態度。藹藹春空雲。
 東野動驚俗。天葩吐奇芬。
 張籍學古淡。軒鶴避雞羣。

人皆我に酒を勸むれども、我は耳に聞かざるが若し。
 今日、君が家に到り、酒を呼んで持して君に勸む。
 この座上の客たるは、余に及ぶまで、各文を能くせり。
 君の詩は態度多し、藹藹たり春空の雲。
 東野は、動もすれば俗を驚かし、天葩、奇芬を吐く。
 張籍は古淡を學び、軒鶴、雞羣を避けしむ。

阿買不識字。頗知書八分。

阿買は字を識らず、頗る八分を書するを知る。

詩成使之寫。亦足張吾軍。

詩成つて之を寫さしむれば、亦た吾軍を張るに足る。

所以欲得酒。爲文俟其醺。

酒を得むと欲する所以は、文を爲らむとして、其醺を

酒味既冷冽。酒氣又氤氳。

酒味すでに冷冽、酒氣又氤氳。

性情漸浩浩。諧笑方云云。

性情漸く浩浩、諧笑方に云云。

此誠得酒意。餘外徒繽紛。

これ誠に酒意を得たり、餘外徒に繽紛。

長安衆富兒。盤饌羅羶葷。

長安の衆富兒、盤饌、羶葷を羅ぬ。

不解文字飲。惟能醉紅裙。

文字の飲を解せず、惟だ能く紅裙に酔ふ。

雖得一餉樂。有如聚飛蚊。

一餉の樂みを得と雖も、聚飛の蚊の如きあり。

今我及數子。固無蕪與薰。

今我及び數子、固より蕪と薰となし。

險語破鬼膽。高詞媿皇墳。

險語は鬼膽を破り、高詞は皇墳に媿ぶ。

至寶不雕琢。神功謝鋤耜。

至寶は雕琢せず、神功は鋤耜を謝す。

方今向太平。元凱承華勛。

方今、太平に向ひ、元凱、華勛を承く。

吾徒幸無事。庶以窮朝曛。吾が徒、幸に無事、庶はくは、以て朝曛を窮めむ。

【字解】【一】座上客 後漢書の孔融傳に「融、字は文學、性寛容にして忌少く、士を好み、好んで後進を誘益す。閒職に退くに及び、賓客日に其門に盈つ。常に嘆じて曰く、座上、客、常に満ち、罇中、酒、空しからず、吾、憂なし」とある。座上客の三字は、之に本づいたのであらう。【二】君詩多態度 態度は風情、石林詩話に「韓退之、張籍（これは張祜書を誤つて張籍としたのである）に贈るに云ふ、君詩多態度、謫謫春空雲、と。司空圖、戴叔倫の語を記して云ふ、詩人の辭、藍田日暖にして、良玉、煙を生ずるが如しと。亦た是れ形似の微妙なる者、但だ學者その言を味ふこと能はざるのみ」とある。【三】東野 孟郊の字、前にも見ゆ。【四】天花 天より雨ふらす花。【五】奇芬 即ち奇香。【六】張籍 前に數ば見ゆ。【七】軒鶴避雞羣 左傳に「衛の懿公、鶴を好み、鶴、軒に乗ずるものあり」といひ、晉書に「嵇紹、はじめて洛に入るや、或は王戎に謂つて曰く、昨、稠人中に於て嵇紹を見る、昂昂然として野鶴の雞羣に在るが如し」とある。朱註に「言ふは、張籍、古淡を學んで、綺靡に驚せず、乘軒の鶴を以て反つて雞羣を避くるが如きなり」といつて居るが、これは「雞羣を避けしむ」と訓すべく、雞羣の方が自然屈伏して避けるといふ義に見ればならぬ。又顧嗣立の説に「以上四句、兩つながら相呼應す。東野の二句は、即ち薦士の詩に謂はゆる敷柔肆紆餘と榮華宵三天秀と、是れなり。張籍の二句は、即ち調三張籍の詩に謂はゆる騰身跨汗漫、不著三織女囊、これなり。亡友犀月、かつて謂ふ、東野文昌、兩君得るところ、極めて相似す、しかも、同じく公に許さる、公の才大なるを見るに足る。知言と謂ふべし」とある。【八】阿買 人名、大方幼字であらう。趙堯夫の言に「或は魯直に問ふ、阿買は是れ退之の何人、答へて云ふ、退之の姪と。必ず據るところあつて云ひしならむ」とある。【九】字 二ここでは古字。【一〇】八分 隸書に近き書體、周越書苑に「八分は、秦の羽人上谷の王次仲、隸書を飾つて之を爲す。鍾繇、これを章程書といふ。蔡文姬別傳、臣の父邕言ふ、程邈の字八分を割いて二分を取り、李斯の小篆、二分を割いて八分を取る、故に八分といふ」とあつて、小篆八分に隸書二分といふ字體である。【一一】張晉軍 左傳桓公六年に「楚の鬬伯比曰く、我、吾が三軍を張る」とある。【一二】醜 醉ふこと。【一三】冷冽 寒きこと。【一四】氤氳 匂ふこと。【一五】浩浩 浩大の貌。【一六】云云 衆語のがやがやすること。【一七】續紛 錯亂の貌。【一八】羶葷 羶は臭、葷は辛臭の菜。【一九】猶興薰

臭草と香草。【二〇】破鬼膽 開元天寶遺事に「李果、洛陽の令となる、劉兼といふものあり、その境を過ぐ、夜、戸外の語聲を聞いて曰く、古今の正人李令、是れなり。その好事を見れば、人をして膽を破らしむと。戸を開いて之を視るも物なし、乃ち鬼神なり」とある。【二一】嬈 爾雅に「妃は嬈なり」とあつて、註に「相偶嬈するなり」とある、くらべる。【二二】皇墳 書經の序に「伏羲、神農、黃帝（即ち三皇）の書、これを三墳といふ」とある。【二三】元凱 八元八凱、左傳文公十二年に「高陽氏、才子八人あり、これを八凱といふ。高辛氏、才子八人あり、これを八元といふ」とある。【二四】華助 舜の字は重華、堯の字は放勳、これを併言す、即ち堯舜といふこと。當時、憲宗はじめて即位、杜黃裳・鄭餘慶・李吉甫・裴均・李藩の徒、相繼いで相たりしをいふ。【二五】朝曛 曛は日の入ること、朝暮と同義。

【題義】これは、張祜書といふ人の處に招かれて、酒宴をした其席上に於て作つたのである。蔣註に「舊本の下に、或は徹の字を註す。徹は元和四年の進士、この詩は、元和の初に作り、徹は猶ほ未だ第せす。公は五六年の間、皆東都に在り。この詩、蓋し長安に在るの日作る、徹に非ざるなり」とある。そこで、方世舉は、張徹ではなくて、張曙だらうといつた。現に、張曙は、元和の初に進士となつて、直に祕書郎の官を授けられたといふから、大方それに相違なからう。但し、張徹にせよ、張曙にせよ、詩意の上には何等の關係は無いから、その邊の事は、大抵にして済まして置けば宜しいと思ふ。【詩意】われは、生來あまり酒を好まず、人がいくら勸めて呉れても、耳にも懸けないが、今日君の家を訪うて、酒を出させて自ら酌み、且つ君にも注いで勸めた。凡そこの座上の客たるものは、予と共に、いづれも、文藝の士であつて、第一、君の詩は、風情多く、たとへば、謫謫たる春天の雲の如

く、孟郊の詩は、動もすれば、俗を驚かし、天から降り来る花の、えならぬ奇香を吐くが如く、張籍の詩は、古淡を學んで、綺靡に馳せず、たとへば、車に乗つた鶴が、雞羣の中に下りても、飛び離れて獨り抜きん出て居る様なもので、いづれも詩が上手である。そして、吾が甥の阿買は、まだ學問が深くないから、六づかしい字は知らぬが、生來、餘程上手に八分の字體を書くから、詩成りし後、この阿買に淨書させると、亦た以て吾が軍を張つて、大に氣焰を揚げるに足りる、元來、酒を得むと欲する所以は、文を作る間に酔はうと思ふので、酔ふと、自然興が湧いて、早速、作が出来るからである。酒の味は、すでに強くして、浸みる様であるし、酒の氣は、どこもなく匂ふ様であつて、大分、好い心持に成り、性情は、次第に浩浩として、氣が大きくなり、諧謔談笑、今しも大分賑かである。かくの如きは、酒の眞意を得たもので、この以外の者は、徒に雜亂するばかり、全く以て取るに足らぬ。長安の富貴人は、皿に様様の物を並べて、ひどく肴ごのみをするが、本來、風流なる文字の飲を解せざるが故に、唯だ紅裙を待らし、絃歌を以て、その興を助けるだけで、まことに、俗惡の極といふべく、しばしの間の歡樂を得たりとも、畢竟、蚊が羣れ飛んで騷がしいと同一である。今、われと數子とは、格別、酒の肴をも擇ばず、至極あつさりして居るが、詩を作れば、その險怪の語、以て鬼神の膽を破るべく、高超の詞、古しへの三墳に倣ひ、まことに大したものであるが、至上の寶たる珠は、雕琢を待たず、天然の功は、耕耘を待たざると同じく、何も故らに苦心經營して作つたのではなく、

自得の妙、乃ち此の如く、これ即ち醉中に得たところの文字の眞趣である。顧みれば、方今の世、漸く泰平に向はむとし、八元八凱にも比すべき幾多の名相輩出し、堯舜の如き吾が君を輔佐して行くから、四海すでに虞なく、吾が徒は、微官に居て、幸に事なきものなれば、希はくは、醉歌して、朝夕を送ることも出来るであらう。

【餘論】西清詩話に「張文潛云ふ、東坡、かつて言ふ、退之の詩、長安衆富兒、盤饌羅羶葷、不レ解文字飲、惟能醉紅裙」と。疑ふらくは、清苦自ら飾るもの如し。豔姫踏レ筵舞、清眸射レ劍戟といふに至りては、すなはち知る、その老子、箇中興復た淺からず。文潛戲れに答へて曰く、文字の飲を愛するものは、俗人の酒を沾ふと科を同じうす」とある。朱竹垞は「只だ文字の飲を説く、杜の簡薛華醉歌と同じ、但だ少しく其超逸を遜るのみ」といひ、何義門は「詩の瓠葉、君子有酒、箋に云ふ、この君子は庶人の賢行あるものを謂ふ、その農功畢るや、乃ち酒漿を爲り、以て朋友を合し、禮を習ひ、道藝を講ずるなり。公の詩、文字飲、これに本づく」といひ「三君の文たる、上に既に之を言ふ、險語の四句、乃ち及レ余各能レ文の意を終る、筆勢錯綜、その誇を見ず、然れども、公に於て、實に愧ぢざるなり」といつて居る。

同冠峽

同冠峽

南方二月半。春物亦已少。

南方二月の半、春物亦た已に少なり。

維舟山水間。晨坐聽百鳥。

舟を山水の間に維ぎ、晨に坐して百鳥を聽く。

宿雲尙含姿。朝日忽升曉。

宿雲、尙ほ姿を含み、朝日、忽ち曉に升る。

羈旅感和鳴。囚拘念輕矯。

羈旅、和鳴に感じ、囚拘、輕矯を念ふ。

潺湲淚久迸。詰曲思增繞。

潺湲として涙久しく迸り、詰曲として思ひ増す繞る。

行矣且無然。蓋棺事乃了。

行け、且く然ること無かれ、棺を蓋うて、事乃ち了らむ。

【字解】

【一】春物 春景色。【二】宿雲 夜一つ處に留まつて居た雲。【三】含姿 姿態を含む。【四】囚拘念輕矯 囚拘に均

しき身は、鳥の輕矯たるを羨ましく思ふ。【五】潺湲 楚辭に横流涕兮潺湲とある。【六】蓋棺 晉書に載する劉毅の言に「丈夫兒、蹤跡尋常なるべからず、便ち羣小中に混するも、棺を蓋うて事方に定まる」とあり、杜甫の句に蓋棺事則已とある。

【題義】

これから以下の數篇は、前の赴江陵云云の詩の條に述べて、貞元二十年、四門博士より陽山

令に左遷された時の作である。陽山は、嶺南道廣州に屬して、今の廣東に近く、この時分は、南方の

僻地であつた。そして、同冠峽は、陽山の西北七十里に在つて、日本の里數十里程で、もう廣州に著く

といふ處に在る。集中に次同冠峽といふ詩があつて、第九卷に載せ、もとより同時の作であらうが、

かくの如く別別に成つて居るのは、例の編輯の錯亂である。

【詩意】

南方の廣州に差しかかつて、同冠峽を経る時は、二月の中旬であつた。もとより、南方は時

節が早いから、春景色も最早残り少なになつて居た。この時、舟を山水の間に繋いで、一夕ここに泊

し、晨に坐して、百鳥の鳴くのを聞いた。谷間に宿れる雲は、なほ面白き姿を含み、やがて朝日が曉

の空にさし上つた。何分にも、羈旅の身であるから、鳥の和鳴するを聞いても、自分に思ひくらべて、

却つて淋しさを覺え、囚拘に等しき軀には、鳥がいつも輕げに飛び廻るを羨ましく思ふ。潺湲として

涙は斷えず流れ出で、詰曲として結ばれたる思は、愈よ繞り縈ふのみである。しかし、いくら嘆い

たとて仕方がない、この儘行くとして、そんな眞似はせずもあれ、人間の事は、棺を蓋うて後に論が

定まるといふから、眼前の憂き目に心を亂すは、愚の極である。かう思ひ直して、やがて、舟を進め

た。

【餘論】

短幅の中に波瀾横生し、結二句は、自慰自奮の語である。朱竹垞は「昌黎の詩、大抵、謝客

を師として、これに俊快を加ふ」といつた。

送惠師

惠師を送る

惠師浮屠者。乃是不羈人。

惠師は浮屠の者、乃ち是れ不羈の人。

十五愛山水。超然謝朋親。

十五にして山水を愛し、超然として朋親に謝す。

脫冠剪頭髮。飛步遺蹤塵。

冠を脱して頭髮を翦り、飛步して蹤塵を遺る。

發跡入四明。梯空上秋旻。

跡を發して、四明に入り、空に梯して、秋旻に登る。

遂登天台望。衆壑皆嶙峋。

遂に天台に登つて望めば、衆壑皆嶙峋たり。

夜宿最高頂。舉頭看星辰。

夜、最高頂に宿し、頭を舉げて星辰を看る。

光芒相照燭。南北爭羅陳。

光芒相照燭して、南北争つて羅陳す。

茲地絕翔走。自然嚴且神。

この地、翔走を絶ち、自然、嚴且つ神なり。

微風吹木石。澎湃聞韶鈞。

微風、木石を吹き、澎湃として韶鈞を聞く。

夜半起下視。溟波銜日輪。

夜半、起つて下に視れば、溟波、日輪を銜む。

魚龍驚踊躍。叫嘯成悲辛。

魚龍驚いて踊躍、叫嘯して悲辛を成す。

怪氣或紫赤。敲磨共輪囷。

怪氣、或は紫赤、敲磨して共に輪囷。

金鷄既騰翥。六合俄清新。

金鷄、すでに騰翥し、六合俄に清新。

常聞禹穴奇。東去窺甌閩。

常に禹穴の奇なるを聞き、東に去つて甌閩を窺ふ。

越俗不好古。流傳失其真。

越俗、古を好まず、流傳その眞を失ふ。

幽蹤邈難得。聖路嗟長堙。

幽蹤邈として得がたく、聖路長く堙れむことを嗟す。

廻臨浙江濤。屹起高峨岷。

廻つて浙江の濤に臨めば、屹起して峨岷よりも高し。

壯志死不息。千年如隔晨。

壯志死して息まず、千年、晨を隔つるが如し。

是非竟何有。棄去非吾倫。

是非竟に何かあらむ、棄てて去るは吾が倫に非ず。

凌江詣廬嶽。浩蕩極遊巡。

江を凌いで廬嶽に詣り、浩蕩として遊巡を極む。

崔嵬沒雲表。陂陀浸湖淪。

崔嵬、雲表に沒し、陂陀、湖淪を浸す。

是時雨初霽。懸瀑垂天紳。

この時、雨はじめて霽れ、懸瀑、天紳を垂る。

前年往羅浮。步屐憂南海漚。

前年、羅浮に往き、歩して憂す南海の漚。

大哉陽德盛。榮茂恒留春。

大なるかな陽徳の盛なる、榮茂、恒に春を留む。

鵬鷲墮長翮。鯨戲側修鱗。

鵬は鷲つて長翮を墮し、鯨は戯れて修鱗を側つ。

自來連州寺。曾未造城闈。

連州の寺に來りしより、かつて、未だ城闈に造らず。

日攜青雲客。探勝窮崖濱。
太守邀不去。羣官請徒頻。
囊無一金資。翻謂富者貧。
昨日忽不見。我令訪其鄰。
奔波自追及。把手問所因。
顧我却興歎。君寧異於民。
離合自古然。辭別安足珍。
吾聞九疑好。夙志今欲伸。
斑竹啼舜婦。清湘沈楚臣。
衡山與洞庭。此固道所循。
尋崧方抵洛。歷華遂之秦。
浮游靡定處。偶往即通津。
吾言子當去。子道非吾遵。

日に青雲の客を攜へ、勝を探つて崖濱を窮む。
太守邀ふれども去らず、羣官請ふこと徒に頻りなり。
囊に一金の資なければども、翻つて富者を貧しといふ。
昨日忽ち見えす、我、その鄰を訪はしむ。
奔波、自ら追ひ及び、手を把つて所因を問ふ。
我を顧みて却つて歎を興す、君、寧ろ民に異ならむや。
離合、古しへより然り、辭別、安んぞ珍とするに足らむ。
吾、九疑の好きを聞き、夙志今伸べむと欲す。
斑竹、舜婦を啼かしめ、清湘、楚臣を沈む。
衡山と、洞庭と、これ固より道の循ふところ。
崧を尋ねて方に洛に抵り、華を歴て遂に秦に之く。
浮游、定處なく、偶ま往かば即ち通津。
吾言ふ、子當に去るべし、子の道は吾が遵ふに非ず。

江魚不池活。野鳥難籠馴。
吾非西方教。憐子狂且醇。
吾嫉惰遊者。憐子愚且諄。
去矣各異趣。何爲浪霑巾。

江魚は池にして活さず、野鳥は籠にして馴らし難し。
吾は西方の教に非ず、憐む子が狂にして且つ醇なるを。
吾は惰遊の者を嫉む、憐む子が愚にして且つ諄なるを。
去れ、各趣を異にす、何すれぞ浪りに巾を霑す。

【字解】一 浮屠 佛といふこと。後漢書の襄楷傳に「浮屠は即ち佛陀、但だ聲轉するのみ」とある。浮圖、沒汰、勃陀、母駄、佛徒、部多とも書くが、皆同じである。舊譯には、知者、新譯では覺者としてある。二 不羈 蔣註に「不羈は馬を以て喻となす。言ふは、羈辱を受けざるなり。鄒陽の吳王に上る書に「不羈の士をして牛馬と息を同じうせしむ」とある。なほ史記に見えた同書の註には「拘繫するところなきなり」といひ、漢書の司馬遷傳には「少にして不羈の才を負ふ」とある。三 遺蹤塵 その足跡を留めるといふこと。四 發跡 出立する。五 四明 山の名、明州に在つて、寧波府城の西南に當る。六 秋晏 爾雅に「秋天を晏天といふ」とあり、又李白の詩に「衆星羅三秋晏」とある。七 天台 山の名、台州に在る。道書に、上、台星に應するから名づけたとある。八 嶼岫 甘泉賦に「嶼岫嶼岫」とあつて、李善註に「深くして厓なきの貌」とある。九 翔走 飛禽走獸。一〇 澎湃 上林賦に「洶湧澎湃」とあつて、司馬彪の解に「澎湃は波相戻るなり」とある。一一 韶鈞 韶は舜の樂、鈞は鈞天廣樂。一二 輪囷 鄒陽の獄中の書に「輪囷離奇」とあつて、張晏の解に「委曲盤戾なり」とある。一三 金鷄 淮南子に「日中に駿鳥といふものあり、三足の鳥なり、金鳥と稱するあり、その色を以ての故に云ふ」とある。隋の孟康の詩に「金鳥升三曉氣、玉鑑濛三晨曦」とある。一四 六合 四方上下、即ち天地。一五 甌閩 今の福建地方、周には七閩の地であつて、甌治子、かつて劍を此に鑄りしが故に甌閩と稱す。一六 聖路 舜禹南巡の路。一七 浙江 即ち潮江、越絶書に「子胥、死して大江に捐てらる、發憤馳騰、氣、奔馬の若く、乃ち神を大海に歸す」とあり、水經註に「錢塘江濤、二月八月、最も高く、峨峨二丈有餘。吳越春秋、以て子胥文種の神と爲すは、

これを謂ふなり」とある。【一八】峨岷。峨眉山と岷山、ともに蜀中の高山。一統志に「眉州城南、岷山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、峨眉山と爲り、三峰を突起す」とある。【一九】廬嶽。即ち廬山、唐では江州に屬し、後には江西南昌府城の西に在る。【二〇】崔峯。高峻の貌。【二一】陂陀。司馬相如の哀二世賦に「登陂陀之長阪」とあつて、匡謬正俗に「陂陀は猶ほ靡迤といふがことよのみ」とある。【二二】湖淪。湖は彭蠡湖を指す。【二三】懸瀑垂天紳。李白の廬山開先寺瀑布の詩に、挂流三百丈、噴壑數十里といひ、宋之間の詩に、兩巖天作帶、雲壑樹披衣とある。天神は、天の帶。孟郊の詩にも用ひてある。【二四】羅浮。二山の名、後の廣州曾城博羅二縣の境に在る。【二五】憂。突き當る。【二六】南海滯。東都賦に東澹滯滯とあつて、その註に「滯は崖なり」とある。【二七】鸞。飛び上る。【二八】側修鱗。杜甫の詩に修鱗脫遠枝とある。今の動物學でいへば、鯨に鱗は無いが、むかしは鯨を魚と考へて居たから、かく云つたのである。【二九】城闐。闐は城上の重門。詩經に出、其闐闐とあつて、その註に「闐は曲城なり」とある。【三〇】青雲。ここでは仙人じみた方の事で、山林隱逸の士をいふ。【三一】異於民。民は吾と同義に用ふ。【三二】九疑。湖中記に「九疑山は、營道縣に在り、九山相似て、行者疑惑す、故に九疑と名づく」とあり、水經註に「峰は數郡の間に秀で、異嶺同勢、遊者疑ふ」とある。【三三】斑竹啼舜婦。博物志に「帝の二女、舜の二妃を湘夫人といふ。舜崩す、二妃啼いて以て竹を揮ふ、竹、盡く斑なり」とある。【三四】清湘沈楚臣。史記に「屈原、楚に仕へ、上官大夫に讒せられ、石を懷いて汨羅に投じて死す」とある、汨羅は即ち湘水の淵で水至つて清きが故に清湘といつたのである。【三五】衡山。即ち衡岳、衡州に在る。【三六】尋崧。崧は嵩山、即ち中嶽、河南登封縣に在つて、漢の洛陽の地。【三七】洛。即ち洛陽。【三八】歷華。華は華山、山海經に「一名太華、石壁、上、削り成すが如し」とある、即ち西嶽。【三九】秦。長安は、古しへの秦の都なるが故に云ふ。【四〇】非吾遊。吾が遊ふものに非ずといふ意。【四一】江魚不池活。この二句は、潘岳秋興賦の譬猶三池魚籠鳥有三江湖山藪之思に本づいたのであらう。【四二】西方教。即ち佛教。

【題義】詩中に自來連州寺とあるを見ると、無論、韓愈が陽山の令たりし時に作つたので、陽山は、即ち連州の屬邑である。それから、韓愈は、王宏中の爲に、宴喜亭の記を作り、その中に、連州に居

た頃、學佛の人景常元惠と與に遊んだと書いてあるので、その元惠は、即ち此に謂ふ惠師である。元惠上人は、雲水の坊主で、足跡、海内に遍ねく、この詩、廣州に立ち寄つて、韓愈に遭つたものと見える。そして、これから、揚子江を渡つて、洛陽・長安の兩京へ往かうといふから、韓愈は、乃ち此詩を作つて贈つたのである。韓愈は、佛骨表を上つた位で、非常な佛嫌ひであるにも拘はらず、坊主とも大分交遊したので、この惠師といひ、次に見えた靈師といひ、その他高閑、大顛、文暢あり、賈島も、元は坊主で無本といつた。彼が坊主と交際したのは、坊主を教化して、聖人の道に引き入れる爲だといふものもあるが、それは、故事付けで、孟尚書に與ふる書中に大顛の事を記して「頗る聰明にして道理を識る、實に能く形骸を外にし、理を以て自ら勝り、事物の爲に侵亂されず、これと語るに、盡くは解せずと雖も、要するに、自ら胸中滯礙なし。以爲へらく、得がたしと。因つて、與に來往す」とあるのが、多くの場合に於ける真相であらう。しかし、流石は韓愈であるから、これ等の坊主に與へた詩文には、坊主臭いことは少しも言はないので、この詩に於ても、唯だ旅行の事のみを述べて居るのが、即ちその好適例である。

【詩意】元惠上人は、坊主ではあるが、卓犖不羈の人であつて、年わづかに十五の頃から、天下の山水を愛し、超然として、朋友親戚に暇乞を爲し、冠を脱して頭髮を剪りし後、自由自在に、山水の間を飛び歩いて、到る處に、その足跡を留めて居る。かくて、第一に發跡して、四明山に入り、雲梯を

躡んで、秋空に上り、やがて天台に登つて望むと、多くの谷には、巖が角角しく尖つて居る。夜、その最高頂に宿し、頭を擧げて天上の星辰を望むと、その数は、限りなく、光芒互に照らし合つて、南北に争つて列れる衆壑と相映じて居る。ここは、非常に高い處で、飛禽走獸も居らず、自然に莊嚴にして神神しい。その時、微風が木石を吹くと、澎湃として大きな聲を發し、さながら韶鈞といふ古しへの尊い音樂を聞く様な氣がした。夜半に不圖起つて脚底を見下すと、海波の中に日輪が銜まれ、水中に住む魚龍などの怪物は、海が焼けるかと思つて、叫び嘯いて悲辛を爲すかと疑はれ、奇怪なる水蒸氣は、或は紫、或は赤といふやうに、様様の色彩を爲し、互に磨擦し合つて、はては、ぐるぐる廻旋する。その内に、金鳥は、すでに中天に跳り上り、天地の間は、俄に清新になつた。凡そ高山で日出を觀るのは、奇絶快絶であるが、これは、天台の絶頂であるから、又一しほである。上人は、前から會稽には禹穴と云つて、大禹の故蹟があると聞いて居たから、東に向つて、古しへの甌閩の地を窺つたが、ここは、むかし、百越といつて、文身斷髮の野蠻國であつたから、今でも、その風が残つて居て、古跡を保存するなどいふ考もなく、口耳相承けて、流傳して居る間に、いつしか其眞を失ひ、段段臆氣に成つて、果して、さうであるか、どうか、分らない様になり、舜や禹の如き聖人の通つた路も、長しへに湮滅して仕舞ひ、格別面白くもなかつた。そこで、踵を廻して、浙江に來り、廣陵の觀濤を試みると、濤は屹然起立して、蜀中の岷岷二山よりも高く、伍子胥が冤死した其餘憤が、

死後なほ猶ほ息まず、千年後の今でも、昨日の事の様に感せられる。子胥の事の實否は分からぬが、そんな事は、吾吾の關係したことでないといふので、これを棄て去り、今度は、揚子江を溯つて、廬山に往き、浩蕩として巡遊を極めた。抑も廬山は、非常に面白い山で、崔嵬として高い處は、雲表に隠れ、跛陀として低い處は、段段下つて隄の様になり、やがて鄱陽湖に這入つて仕舞ふ。時しも雨が初めて晴れると、名だたる瀑布は、水量が増加して、さながら、天の帯かと疑はれる位。ついで去年は、廬山から嶺南に出て廣東に赴き、羅浮山に遊び、歩いて、南海の端に突き當つて引き返した。その南海の端は、流石に熱帯地方であるから、陽徳の廣大なるを見るべく、草木は繁茂して四時常に春の如く、大鵬は飛び上つて長い羽を落し、鯨は戯れて水中に長い鱗を逆立てて居る。そこで、愈よ引き返し、この頃、陽山附近の連州なる某寺に留錫せられ、大分、歸依する者もあるが、かつて、城門に入つたことはなく、日ごとに、山林隱逸の士を攜へて、山水の勝を探り、この先には、もう陸もないといふ海岸の果までも窮められた。かくて、太守は、其徳を慕うて、態態迎ひに往つても、上人は、出て行かず、羣官が頻りに招いても、無益であつた。上人の高尙なることは、これを以て概見すべく、囊中には、一錢もないが、却つて、富者を貧なりといひ、ひとりて打澄まして居る。われは、幸ひ陽山に居て、上人と交際することが出來たが、昨日、突然行方が知れなく成つたといふ知らせがあつた。さて何處へ往つたかといふので、使を遣つて、その鄰の人に尋ねさせ、はては奔波

して、自身で跡を追ひかけて、やつと之に追ひ付き、手を執つて、どうした譯かといつて問ふと、上人は、一向平氣で、われを顧みて却つて嘆息し、君は大に吾と異なつて居る、離合は、むかしから有ることで、暇乞をするなどは、どうでも善いことである。それを態態跡を追ひかけて、此まで來られた處を見ると、君は、どうも、吾とは、考が違つて居る。九疑山の絶勝は、久しく聞いて居たから、今度こそ、夙志を伸べむが爲に、其地に行くので、その外、娥皇女英が、舜の崩御を聞いて、これを追へども及ばず、やがて、涙を揮ふと、それが竹にかかつて、斑竹になつたといふ其遺跡もあるし、楚の忠臣たりし屈原が、水に投じて死んだ汨羅といふ處も、ちやんと残つて居る。それから衡山と洞庭湖とは、路順であるから、是非立ち寄る積りであるし、その次には、嵩山を尋ねて、洛陽に至り、華山を歴て、愈よ長安に乗り込むといふ豫定で、もとより、雲水の身で浮遊するからには、處定めず、ぶらぶらして居るし、偶然行つた處が、即ち路の經由する處である。さういふ譯だから、格別暇乞もせずに出立したのであると、かう云つた。そこで、此方も聊か腹が立つたから、なる程、さういふ了見ならば、ここを去つて行くも善からう。元來、君の守れる道は、我が遵奉すべき道でなく、君が君の道に従ふのは、もとより勝手次第。江中に住む魚は、池に持つて來ては生きて居らず、野に住む鳥は、籠中に飼つて馴らすことは六づかしい。君の如く、天下を飄遊するものを、しばしなりとも、無理に止めたのは、吾輩が悪かつた。われは、儒教を信じて、西方の佛教は大嫌ひであるが、君が、坊主に

似合はず、氣違ひみて、且つ醇粹なる處は、平生氣に入つて居たし、われは、坊主を以て、無職業なるのらくら者として大に悪んで居たが、君が獨りお上手も言はず、そして、淳朴なものには、平生心服して居た。そこで、今日、君を送るといつても、尋常別離の態を爲さず、君にして往きたくば、遠慮なく往くが善い、君と我とは、本來、趣を異にして居るから、何も女女しく涙を流して、巾を霑すにも及ばないと、かう云つて、笑つて別れやうではないか。

【餘論】 黄氏日抄に「惠師を送るの詩、皆、その游歴の勝概を敍し、終に之を律するに正道を以てす」といひ、朱竹垞は「名山の遊を歴敍し、挨次鋪敍、語を下す鍊淨」といひ、その精彩は、天台廬山の勝を敍した處に在るので、結末十句は、送別の意を述べたのであるが、尋常情思の外に逸出して居る處が、まことに面白い。

送靈師

靈師を送る

佛法入中國。爾來六百年。

佛法、中國に入る、爾來六百年。

齊民逃賦役。高士著幽禪。

齊民、賦役を逃れ、高士、幽禪を著く。

官吏不之制。紛紛聽其然。

官吏、これを制せず、紛紛として、その然ることを聽す。

耕桑日失隸。朝署時遺賢。
 靈師皇甫姓。胤胄本蟬聯。
 少小涉書史。早能綴文篇。
 中間不得意。失跡成延遷。
 逸志不拘教。軒騰斷牽攀。
 圍棋鬪白黑。生死隨機權。
 六博在一擲。臯盧叱廻旋。
 戰詩誰與敵。浩汗橫戈鋌。
 飲酒盡百觥。嘲諧思逾鮮。
 有時醉花月。高唱清且緜。
 四座咸寂默。杳如奏湘絃。
 尋勝不憚險。黔江屢洄沿。
 瞿塘五六月。驚電讓歸船。

耕桑日に隸を失ひ、朝署、時に賢を遺す。
 靈師は皇甫の姓、胤胄、本と蟬聯たり。
 少小にして書史に涉り、早く能く文篇を綴る。
 中間、意を得ず、跡を失うて延遷を成す。
 逸志、教に拘はらず、軒騰して牽攀を断つ。
 棋を圍んで白黒を鬪はし、生死、機權に隨ふ。
 六博、一擲に在り、臯盧、廻旋を叱す。
 詩を戦はして、誰か與に敵せむ、浩汗、戈鋌を横ふ。
 酒を飲んで百觥を盡し、嘲諧、思、逾よ鮮なり。
 時あつて花月に酔ひ、高唱、清且つ緜たり。
 四座咸な寂默、杳として湘絃を奏するが如し。
 勝を尋ねて、險を憚らず、黔江、屢は洄沿。
 瞿塘五六月、驚電、歸船に讓る。

怒水忽中裂。千尋墮幽泉。
 環廻勢益急。仰見團團天。
 投身豈得計。性命甘徒捐。
 浪沫蹙翻涌。漂浮再生全。
 同行二十人。魂骨俱坑填。
 靈師不掛懷。冒涉道轉延。
 開忠二州牧。詩賦時多傳。
 失職不把筆。珠璣爲君編。
 強留費日月。密席羅嬋娟。
 作者至林邑。使君數開筵。
 逐客三四公。盈懷贈蘭荃。
 湖游泛滢沆。溪宴駐潺湲。
 別語不許出。行裾動遭牽。

怒水、忽ち中より裂け、千尋、幽泉に墮つ。
 環廻、勢益す急、仰いで團團の天を見る。
 身を投ずる、豈に計を得むや、性命、徒に捐つるを甘んず。
 浪沫、蹙まつて翻涌、漂浮して、再生全し。
 同行二十人、魂骨俱に坑填。
 靈師、懷に掛けず、冒涉、道、轉た延ぶ。
 開忠二州の牧、詩賦時に多く傳ふ。
 職を失うて、筆を把らず、珠璣、君が爲に編す。
 強ひて留めて日月を費し、密席に嬋娟を羅す。
 昨は林邑に至り、使君、數ば筵を開く。
 逐客三四公、懷に盈ちて蘭荃を贈る。
 湖游、滢沆に泛び、溪宴、潺湲に駐まる。
 別語、出すを許さず、行裾、動もすれば牽くに遭ふ。

鄰州競招請。書札何翩翩。
 十月下桂嶺。乘寒恣窺緣。
 落落王員外。爭迎獲其先。
 自從入賓館。占恠久能專。
 吾徒頗攜被。接宿窮歡妍。
 聽說西京事。分明皆眼前。
 縱橫雜謠俗。瑣屑咸羅穿。
 材調眞可惜。朱丹在磨研。
 方將斂之道。且欲冠其顛。
 韶陽李太守。高步陵雲煙。
 得客輒忘食。開囊乞繒錢。
 手持南曹敍。字重青瑤鐫。
 古氣參彖繫。高標摧太玄。

鄰州、競うて招請し、書札、何ぞ翩翩たる。
 十月、桂嶺を下る、寒に乗じて窺縁を恣にする。
 落落たり王員外、争ひ迎へて其先を得たり。
 賓館に入つてより、占恠して久しく能く專にす。
 吾が徒、頗る被を攜へ、宿を接して、歡妍を窮む。
 西京の事を説くを聽けば、分明、皆眼前。
 縱橫、謠俗を雜へ、瑣屑、咸な羅穿。
 材調、眞に惜むべし、朱丹、磨研に在り。
 方に將に之を道に斂めむとし、且つ其顛に冠せむと欲す、
 韶陽の李太守、高歩して雲煙を陵ぐ。
 客を得ては、輒ち食を忘れ、囊を開いて、繒錢を乞ふ。
 手に南曹の敍を持し、字は青瑤に鐫せしよりも重し。
 古氣、彖繫を參へ、高標、太玄を摧く。

維舟事干謁。披讀頭風痊。
 還如舊相識。傾壺暢幽悃。
 以此復留滯。歸驂幾時鞭。

舟を維いで、干謁を事とし、披讀すれば、頭風痊ゆ。
 還た舊相識の如く、壺を傾けて幽悃を暢ぶ。
 これを以て復た留滯、歸驂、幾時か鞭たむ。

【字解】【一】佛法入中國 蔣註に「按するに、後漢の明帝、夢に金人を見、羣臣に問ふ。或は曰く、西方に神あり、名を佛といふ、その形、長丈六尺にして金色、と。ここに於て、使を天竺に遣して、佛の道法を問ひ、形像を圖畫して以て歸り、その教、因つて流れて中國に入る。この詩、漢の明帝の時に據つて之を言ふのみ。故に、その佛骨表に云ふ、後漢の時、流れて中國に入ると。又云ふ、漢の明帝の時、始めて佛法あるなり」とある。但し、もつと古い時代にする説もあるので、漢武故事に「昆邪王、休屠王を殺して來り降り、その金人の神を得て、これを甘泉宮に置く」とあれば、佛の中國に入ったのは、漢武からで、成哀の間には、經もあつたらうと云はれて居る。又杜預の行守編に「漢武、昆明池を作り、地を掘つて黑灰を得たり。東方朔云ふ、西域の道人に問ふべし、と。西域の道人は佛の徒なり」とあり、又開皇歷代三寶記に「劉向稱す、予、典籍を覽る、すでに經あるを見る、將に知らむとす、周時の九流釋典、秦、燕除すと雖も、漢興つて復た出づと。すなはち、先漢の前、逆に周に至り、佛あり、經あり、その來るや遠し。范曄、胡すれぞ、以て明帝の時始めて中國に入ると謂ふか。退之は一世の大儒、謬誤を承襲するものに非ず、將た、心、その教を惡むに由つて、復た詳に其源流の自るところを考へざるのみ」とある。【二】朝署 朝廷と官署。【三】蟬聯 晉書に「爵位蟬聯、文武相繼ぐ」といひ、又吳都賦に蟬聯林邱とあつて、その註に「蟬聯は絶えざる貌」とある。【四】延遷 逡巡して進まざる貌。【五】軒騰 飛び上る。【六】牽攀 牽制拘攀、戒律の拘束。【七】圍棋 邯鄲淳の藝經に「碁局縱橫各十七道、合せて二百八十九道、白黑碁子各一百五十枚」とあり、桓譚新論に「俗に圍棋あり、これ兵法の類」とある。【八】六博 楚辭の招魂に「篋徽象碁有六博」とあり、劉綰、采の目、これを六つ轉がして丁と牛とを争ふ。【九】鼻盧 采の目の名、丁といひ牛といふやうな意で、晉書劉毅傳に「毅、劉

裕と樛蒲す。殺、擲つて雉を得たり、大に喜び、牀を繞つて叫んで曰く、盧を能くせざるに非ず、これを事とせざるのみと。裕、これを惡み、因つて五木を授し、これに久しうして曰く、老兄、試に卿の爲に答へむと。すでにして、四子ともに黒く、その一子、轉躍して定まらず、裕、聲を厲まして之を喝すれば、即ち盧と成る、殺、意殊に快からざるなり」とあり、杜甫の詩に馮陵大叫呼三五百、祖耽不三肯成三鼻盧」とある。【一〇】 戰詩 一に争戦に作り、或は文戦に作り、詩戦に作る。方崧卿は「戰詩戰文、唐人の語なり」といひ、白樂天は戰文重三韓鞅」といひ、劉夢得は戰文矛戟深誰與といつた。【一一】 戈鋌 鋌は小矛。【一二】 湘絃 楚辭に使湘靈鼓瑟兮令三海若舞三馮夷」とある、湘靈は湘君の靈魂。【一三】 黔江 揚子江の上流で、重慶以上をいふ。【一四】 涸沿 詩經に邇洞從之とあり、爾雅に「流に邇つて上るを涸洞といふ」とある。又書經に「江海に沿ふ」とあつて、その註に「流に順つて下るを沿といふ」とある。二字で江水を上下すること。謝靈運の詩に水涉盡涸沿とある。【一五】 瞿塘 寰宇記に「瞿塘は、夔州の東一里に在り、古しへの西陵峽なり、連崖千丈、崩流電激」とあり、水經註に「峽中に瞿塘・黃龍の二灘あり、夏水廻復、沿沂息むところ」とある。【一六】 開忠二州牧 開忠は二州の名、今一は重慶に屬し、一は夔州に屬す。魏道輔の言に「二牧は章處厚・白居易なり」とあるが、二人の出でて守たりしは、元和の末であるのに、この詩は貞元二十年であるから、この説は、無論誤つて居る。【一七】 林邑 驩州に在る。【一八】 蘭荃 香草の名。【一九】 滌沆 西京賦に滌池滌沆とあつて、李善の註に「滌沆は寛大なり」とある。【二〇】 桂嶺 縣の名、賀州に在る。【二一】 王員外 唐書王仲舒傳に「吏部考功員外郎に遷り、坐累して連州司戸となる」とあるが、舊唐書の本傳には見えぬ。なほ後に次石頭驛の條下に於て詳論することにする。【二二】 占愆 獨占して外に出さぬ。【二三】 接宿 泊まり込む。【二四】 西京 即ち長安。【二五】 朱丹 呂氏春秋に「丹は磨くべきなり、しかも、赤を奪ふべからず」とある。【二六】 道 即ち儒家の道。【二七】 冠其顛 頭に冠を著せる。【二八】 李太守 この人の事は分からぬ。【二九】 乞 與へる。【三〇】 南曹 南曹は吏部員外郎、即ち王仲舒を指す。紱は、今次靈師を送るの序である。王仲舒は、古文家で、韓愈の作つた墓志に「爲るところの文章、世俗の氣なし」とある。【三一】 象繫 易の象辭と繫辭傳、杜甫の詩に前哲垂三象繫」とある。【三二】 太玄 揚雄の著、易に擬して宇宙現象の階段的發達の形式を徽號的に表顯したものの。【三三】 頭風 莊子に「今予病少しく瘞ゆ」とあり、典略に「魏の太祖、陳琳を以て記室を管せしめ、諸書を作る。檄草して成るに及びて、太祖に呈す。太祖、先に頭風に苦む。この日、疾發す。琳の作るところを讀み、翕然として起つて曰く、これ我が病を瘥やす」とある。【三四】 幽情 情は憂悒。

【題義】 この詩も、前首と大抵同時、即ち貞元十九年、陽山に於て作つたのである。篇中に王員外といふ人があるが、名は弘中、字は仲舒、その時、連州司戸に謫せられて居たことは、宴喜亭記に見えて居る。靈師は俗姓を皇甫といつたことが、同じく篇中に見えて居るだけで、その他の經歷等は、一切分からぬ。

【詩意】 佛法が我が支那に入つたのは、後漢の世で、それから、今日に至るまで六百年、一般の人民は、佛道に入れば納税の義務を免れるといふので、相争つて此教を奉じ、高尚なる士人は、深遠秘密の禪を研究して、世事を抛擲して仕舞ふやうになる。しかも、何等の制裁も無く、歴代の官吏は、まことに不注意で、毫も之を禁せず、紛紛として、その然るに任せて置いたから、弊害が百出した。そこで、耕桑を業とするものは、追追に少くなり、朝廷官署に於ても、賢人を遺して之を登用するこゝとが出来ないといふ有様である。ここに、靈師は、本姓皇甫氏で、名家の裔が今日まで蟬聯して絶えない。されば、この靈師も、年若き頃より、書史を涉獵し、早くから、上手に文章を作つたが、中ごろ、不得意の境涯に陥り、跡を失つて、愚圖愚圖して居る内に、とうとう坊主と成つて仕舞つた。しかし、普通の坊主とは違ひ、飄逸なる志を持つて居て、教義に拘泥せず、おのが勝手に飛び上つて、

少しも戒律などの束縛を受けない。第一に碁が好きで、黑白の石を鬪はし、生死は石を下す機権から生ずるといふので、佛教には無い生死だの、機縁だのいふことに關係して居る。その次には、博奕が好きで、六つの采を投げ出して、丁半を争ひ、はては氣合を以て、これを叱して廻旋せしめるといふので、これも、全く坊主らしくない。その外、詩を作つて、人と文藻を鬪はし、その時は、非常な勢であるから、誰も之に敵するものなく、才鋒は森然として、數限りなき矛を押し立てた様である。その上に又酒も飲むので、平生百杯を盡し、飲めば飲む程、氣が確かになつて、口に任かせて、諧謔の言葉を吐き出し、それが愈よ鮮かである。仍つて、時としては、花月に酔ひ、大勢の居る席上で、聲高に歌ひ出すと、その聲は清らかに、長く引いて聞こえ、四座の客は、皆感に堪へ兼ねて、ひっそりして居ると、歌聲愈よ揚がつて、さながら、湘靈が瑟を弾するやうである。それから、旅行も大好で、勝地を探るに就いては、少しも路の險なるを憚らず、揚子江の上流を屢ば上下したことがある。中にも、五六月の頃に、瞿塘峽を通つたことがあつたが、歸船の速なることは、閃めく電光にも勝る位、そこに難所があつて、逆巻く水は、中間に於て一段凹んで居て、その處に嵌まり込んだら最後、千尋の深さある黄泉の底へ落ちて仕舞ふ。そこで、水は其難所を繞つて渦をなし、その勢、益す急に、左右は絶壁に支へられ、仰いで、團團たる天を見るのみである。されば、慣れた舟人ですへ、この難所に身を投じて舟を進めるは、計を得たものでなく、その巖陰を避けて、他の側を通ることを習とする

のに、靈師は、水の逆落しに成つて居る處に舟を入れやうとしたので、丸で命を無駄に棄てるやうなものである。それでも、同行を志願したものが大分あつて、愈よ浪が盛められ、巖に當つて碎け、沫を生じて涌き返つて居る處に舟を入れると、水勢益す激して、舟は見る間に顛覆したが、靈師は、水練の心得があつた故に、自ら泳いで再生し、どうやら、助かつたものの、同行二十人は、魂も、骨も、粉微塵に成つて、渦巻いて居る穴の底に沈んで仕舞つた。こんな大事變に出遇つても、靈師は、格別心にも止めず、相變らず、冒險的の跋涉を試み、次第に道を延ばして、蜀の奥地に進んで往つた。ここに、開忠二州の刺史は、偉らい人達で、その詩賦は、從來多く世上に傳はるにも拘はらず、左遷の厄に遭つて此に來てからは、碌に筆も執らなかつたが、今次靈師が來遊せしに因つて、珠璣を列ねた様な文字を編んで、見事な詩を贈つたとのことである。そののみか、靈師を無理に引き留めて、歲月を送り、ある時は、祕密の座敷に於て、嬋娟たる美人を侍坐せしめたといふことである。その後、靈師は、方方歩るいた末に、古しへの林邑、即ち廣東地方に來ると、太守は、頻りに之を歡迎して、數ば宴を催し、例の左遷の厄に遇つた三四の人人も、しきりに詩文を贈答し、たとへば、懷中に滿つるまで蘭荃等の香草を贈つた様なものであつた。それから、滌沆として廣き湖水に遊んでは舟を泛べ、潺湲の音涼しき溪中に往いては、宴を催し、やがて別れの事を言葉にほめかすと、滅多に此からは外に出さぬといつて、行きかけた裾を引つ捉へて、決して離さない。すると、近鄰の諸州でも、是非一度は來

て貰ひたいといつて、競うて靈師を招待し、その書札は、翩翩として遣つて來るが、林邑の太守が靈師を解放せぬから仕方がない。しかし、その年の十月に桂嶺を下り、熱帶地方では冬の方が善いといふので、この時に乗じて探勝を縦にし、やつとの事で、我が今居る連州に到着した。ここに吏部考功員外郎の王仲舒といふ人が居て、その性質は、極めて磊落であるが、争つて迎へ、率先して自宅に案内し、賓館に入れ置き、丸で獨りで靈師を占領して、出し惜みをする様な風で、久しい間、自ら専らにすることが出來た。陽山は、連州に近いが、交通が不便であるから、自分達は、夜具を持參し、泊りがけで之を訪問し、互に心を語り合せて、十分の歡喜を極めた。就中、長安洛陽の事を語り出すのを聞けば、遷謫の身には、耳新らしく、明かに眼前に湧き出る如く思はれ、まことに面白くて堪まらぬ位であつた。靈師が話をする時には、縦横に閭巷卑俗の語を交へ、極めて細かなことまで羅列穿通するから、愈よ以て妙である。そこで、段段話をして見ると、靈師は、天晴の材調、坊主にして置くのは、まことに惜い位、げにや、朱丹も磨かざれば、赤い光も出ないといふ通り、これ程の材調あるものを坊主の中に埋没させて置くのは、まことに、残念至極であるから、どうかして、この人を引き摺つて來て、孔子の道の中に收め、そして、剃り毀つた頭に毛を生やして、冠を著け、つまり還俗するやうにしたいと思つた。これから、靈師は、連州の鄰境なる韶州に往くといふが、その地の李太守は、高歩して雲煙を凌ぎ、隨分出世をして居るにも拘はらず、ひどく客を愛し、客に對しては

飲食をも忘れる位、その上、囊を開いて、金錢でも、布帛でも、少しも惜まずして、客に與へるといふ位、腹の大きい人物であつて、かの南曹に官する王員外の作つた贈序を讀んで、はじめて靈師の事を知つたといふが、成程、その贈序は、大した名文で、青瑤に彫り付けたものよりも重い位。その文章は、古色に富んで、丁度、易の彖辭や繫辭傳を混用した様であり、高尚なる標致は、揚雄の太玄經をも滅茶滅茶に碎き去る程である。そこで、李太守から、態態迎ひを寄越し、靈師は、やがて舟を繫いで謁見することに成つて、近近出發するが、さて始めて相逢ふ時、君の事を知つたのは、この贈序の御蔭だから、もう一遍、念の爲に讀んで見やうといつて、やがて之を披讀すると、頭痛も直る位、まして、贈序中に見えた當人に逢つたのだから、その面白いことは、言ふまでもない。君とは、今回始めて逢ふが、右の次第で、舊知も同様であるといひ、酒壺を傾けて、憂悒の情を暢べられることであらう。しかし、かくの如く、李太守に好遇されて、その地に滯留したならば、何時、馬に鞭つて此地に歸つて來るか、それは、前以て分からぬことで、自分は、靈師の還俗を希望するのであるが、それも、當分差し控へる外はない。マア、彼方へ往つて、チャホヤと持て囃されるのも悪い事ではないから、ゆつくりして居るも善からう。

【餘論】この篇は、六段より成り、起首、佛法入ニ中國より朝署時遺賢に至るまでは、佛教流行の弊害を敘し、靈師皇甫姓より杳如奏三湘絃に至るまでは、靈師の人物、尋常僧侶と其撰を異にし、圍碁博奕

詩酒を好むことを敍し、尋勝不憚險より冒涉道轉延に至るまでは、瞿塘の冒險を主として、その旅行を敍し、開忠二州牧より書札何翩翩に至るまでは、從前處處に於て歡迎されたことを敍し、十月下桂嶺より且欲冠其顛に至るまでは、今次陽山に於て邂逅せる次第を敍し、韶陽李太守より結末歸驂幾時鞭に至るまでは、これから韶州に赴くことを敍したのである。乾隆御批には「退之、佛を闢き、却つて頻りに浮屠に贈る詩を作る。前篇は、但だ、その山水に放浪するを敍し、後篇は、干謁飲博、有らざるところなし。その浮屠と稱する所以は、皆彼法の戒むるところ、良に彼法に拘はらざるを以て、乃ち始めて吾が徒に近く、且つ其人を人にせむと欲するのみ、并せて未だ先王の道を明かにし、以て之を道くに暇あらざるなり。二僧、諸方を遊走し、行止亦た略ぼ相似たり。而して、兩作、各生面を開き、絶えて雷同せず、是れ其匠心布置の處」とある。それから朱竹垞は「亦た是れ順敍鋪去、筆力自ら蒼」といひ、何義門は瞿塘の數句を評して「造句警奇」といひ、「この段、獨り才調あるのみならず、且つ膽勇を兼ねるを見る」といひ、朱丹の四句を評して「四語是れ詩を作るの旨」といひ、ともに善く肯綮に中つて居る。

縣齋有懷

少小尙奇偉。平生足悲吒。

少小にして奇偉を尙び、平生悲吒するに足れり。

縣齋に懷あり

猶嫌子夏儒。肯學樊遲稼。

猶ほ子夏の儒を嫌ひ、肯て樊遲の稼を學ばむや。

事業窺臯稷。文章蔑曹謝。

事業、臯稷を窺ひ、文章、曹謝を蔑す。

濯纓起江湖。綴珮雜蘭麝。

纓を濯うて江湖に起り、珮を綴つて、蘭麝を雜ふ。

悠悠指長道。去去策高駕。

悠悠として長道を指し、去去として高駕に策つ。

誰爲傾國媒。自許連城價。

誰か傾國の媒たらむ、自ら連城の價を許す。

初隨計史貢。屢入澤宮射。

初め計吏に隨つて貢せられ、屢は澤宮に入つて射る。

雖免十上勞。何能一戰霸。

十上の勞を免ると雖も、何ぞ能く一戰して霸たらむ。

人情忌殊異。世路多權詐。

人情、殊異を忌み、世路、權詐多し。

蹉跎顔遂低。摧折氣愈下。

蹉跎として顔遂に低れ、摧折して氣愈下れり。

治長信非罪。侯生或遭罵。

治長、信に罪に非ず、侯生、或は罵に遭ふ。

懷書出皇都。銜淚渡清灞。

書を懷にして皇都を出で、涙を銜んで清灞を渡る。

身將老寂寞。志欲死閒暇。

身、將に寂寞に老いむとし、志、閒暇に死せむと欲す。

朝食不盈腸。冬衣纔掩骼。

朝食、腸に盈たす、冬衣、纔に骼を掩ふ。

軍書既頻召。戎馬乃連跨。
 大梁從相公。彭城赴僕射。
 弓箭圍狐兔。絲竹羅酒炙。
 兩府變荒涼。三年就休假。
 求官去東洛。犯雪過西華。
 塵埃紫陌春。風雨靈臺夜。
 名聲荷朋友。援引乏姻婭。
 雖陪彤庭臣。詎縱青冥靶。
 寒空聳危闕。曉色曜修架。
 捐軀辰在丁。鍛翻時方禡。
 投荒誠職分。領邑幸寬赦。
 湖波翻日車。嶺石坼天罅。
 毒霧恒熏晝。炎風每燒夏。

軍書、既に頻りに召し、戎馬、乃ち連りに跨る。
 大梁、相公に從ひ、彭城、僕射に赴く。
 弓箭、狐兔を圍み、絲竹、酒炙を羅ぬ。
 兩府、變じて荒涼、三年、休假に就く。
 官を求めて東洛に去り、雪を犯して西華を過ぐ。
 塵埃紫陌の春、風雨靈臺の夜。
 名聲、朋友を荷ひ、援引、姻婭に乏し。
 彤庭の臣に陪すと雖も、詎ぞ青冥の靶を縱にせむ。
 寒空、危闕を聳え、曉色、修架を曜かす。
 軀を捐て、辰、丁に在り、翻を鍛がれて、時、禡に方れり。
 荒に投ずる、誠に職分、邑を領する、幸に寬赦。
 湖波、日車を翻し、嶺石、天罅を坼く。
 毒霧、恒に晝に熏し、炎風、毎に夏を燒く。

雷威固已加。颶勢仍相借。
 氣象杳難測。聲音吁可怕。
 夷言聽未慣。越俗循猶乍。
 指摘兩憎嫌。睚眦互猜訝。
 祇緣恩未報。豈謂生足藉。
 嗣皇新繼明。率土日流化。
 惟思滌瑕垢。長去事桑柘。
 斷嵩開雲扃。壓穎抗風榭。
 禾麥種滿地。梨棗栽繞舍。
 兒童稍長成。雀鼠得驅嚇。
 官租日輸納。村酒時邀迓。
 閒愛老農愚。歸弄小女姪。
 如今便可爾。何用畢婚嫁。

雷威、固より已に加はり、颶勢、仍つて相借す。
 氣象、杳として測り難く、聲音、吁怕るべし。
 夷言、聽いて未だ慣れず、越俗、循うて猶ほ乍。
 指摘、兩つながら憎嫌、睚眦、互に猜訝。謂はむや。
 祇だ恩未だ報いざるに緣つて、豈に生、藉るに足れりと。
 嗣皇、新に明を繼いで、率土、日に化を流ぐ。
 惟だ瑕垢を滌ひ、長く去つて桑柘を事とせむを思ふ。
 嵩を斷りて雲扃を開き、穎を壓して風榭に抗す。
 禾麥、種ゑて地に滿ち、梨棗、栽ゑて舍を繞る。
 兒童、稍や長成、雀鼠、驅嚇を得む。
 官租日に輸納し、村酒時に邀迓。
 閒に老農の愚なるを愛し、歸つて小女の姪を弄せむ。
 如今、便ち爾るべし、何ぞ婚嫁を畢るを用ひむ。

【字解】【一】奇偉 尋常ならずして優れて居る。【二】悲吒 郭璞の游仙に撫心獨悲吒とあり、杜甫は令三人幾悲吒といつて居る。吒は嘆く痛惜する。【三】子夏儒 論語に、孔子、子夏に向つて「汝、君子の儒となれ、小人の儒となる勿れ」とある。【四】樊遲 孔子の弟子で、圃を爲るを學びたいといつた事が同じく論語に見えて居る。【五】卓犖 卓陶と后稷、堯を輔佐した名臣。【六】曹謝 魏の曹植に宋の謝靈運とを併稱す。【七】濯纓 屈原の漁父に滄浪之水清、可三以濯吾纓、兮とある。【八】綬環 佩玉、腰の飾り。魏の曹植に宋の謝靈運とを併稱す。【九】傾國媒 漢書外戚傳に「李延年、上に侍す、歌うて曰く、北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾三人城、再顧傾三人國。上、嘆息して曰く、世、豈に此人あらむやと。平陽主、因つて延年に女弟あるを言ふ、上、召して之を見る」とある。【一〇】連城價 史記に「趙王、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王、これを聞き、願はくは、十五城の價を以て、請ふ璧に易へむ」とある。【一一】隨計吏貢 漢書武帝紀に「元光五年、吏民當世の務に明かなるあるを徴して、計を借にせしむ」とあつて、その註に「計とは計吏の簿を上るを謂ふなり」とある。計吏と一處で、すべてを官費で支拂つて貰ふ。【一二】入澤宮射 禮記に「諸侯、歳ごとに貢士を天子に獻す、天子、これを射宮に試む」といひ、又「天子將に祭らむとするや、必ず先づ射を澤に習ふ、澤は士を擇ぶ所以なり」とあつて、その註に「澤は宮名」とある。【一三】十上勞 戰國策に「蘇秦、秦の惠王に説く、書十たび上つて説行はれず」とある。【一四】一戰霸 左傳僖公二十七年に「一戰して霸たるは文の教なり」とある。【一五】蹉跎 つまづく。【一六】治長 論語に「子、公治長を謂ふ、縲紲の中に在り」と雖も、その罪に非ざるなりと。その子を以て之に妻はす」とある。【一七】侯生 史記に「魏に隱士あり、侯嬴といふ、大梁夷門の監者たり。公子無忌、左を虚しうして之を迎ふ。嬴、客あり、市居の中に在り、車を引いて市に入り、下つて其客朱亥を見、睥睨して久しく立ち、其客と語る。從騎、皆竊に侯生を罵る」とある。【一八】出皇都 貞元十一年、韓愈は博學宏詞に試みられ、それから、三たび宰相に上書せしが、報ぜられざるに因つて、京師を去り、潼關を過ぎて河陽に歸り、河陽から洛陽に往つた。【一九】清瀾 瀾水は八水の一で、長安の南郊を流れ、その水が澄んで居るから清といつたのである。源を藍田の谷に發し、西北に流れて、渭に入る。もと滋水と云つたが、秦の穆公が霸功を章にする爲に今の名に改めた。【二〇】磬 埤蒼に「腰骨なり」とある。【二一】大梁從相公 貞元十二年、汴州に往つて董晉に依りしことをいふ。【二二】彭城赴僕射 十五年、徐州に至りて、張建封に依りしことをいふ。

【二三】酒爵 爵は炙に同じ、即ち酒有の義。【二四】兩府 汴州と徐州。董張二人、相繼いで組謝せしことをいふ。【二五】三年就休 假、この二句は、貞元十六年、張建封の死ぬ少し前に徐を去つて洛陽に歸り、その年の冬、長安に至り、三月又洛陽に歸り、十八年の春、はじめて四門博士に任ぜられ、十九年、監察御史に陞進したことを指すので、三年間は、丸で休暇同様であつたといふこと。【二六】西華 即ち華山、洛陽の西に當るから西華といつたのであらう。【二七】紫陌 都大路。天に紫微垣があつて、人主の宮は、これに象るが故に、宮を紫宮といひ、又紫禁といひ、殿を紫宸といひ、そして、京都の街衢を紫陌といつたのである。【二八】靈臺 むかし文王が築いたので、鄠縣、即ち長安の近郊に在る、何義門の解に「靈臺は四門博士に調せられしをいふ」とある。【二九】姻媿 姻は親戚、媿は爾雅に「兩婿相謂うて媿といふ」とあつて、即ち妻が互に姉妹なること。【三〇】形庭 前に見えた丹墀に同じ。形庭の臣といへば御史で、この時、韓愈は監察御史たりしが故に云ふ。【三一】青冥靴 青冥、一に青雲に作る、ここでは雲の上といふ意。靴は、手綱の革。【三二】危闕 高く聳えたる宮城。【三三】修架 長く綴いた屋根の棟。【三四】辰在丁 上疏の日が丁に當つて居るといふので、これは、貞元十九年十二月、監察御史を以て、天旱人飢の疏を上り、仍つて、陽山令に左遷されしことをいふ。【三五】鍛 鍛は鳥の羽の病。即ち羽蟲が出來、鳥の羽を害して飛べなくなること、ここでは、榮遷を得ず、却つて貶謫されしことを指す。【三六】時方藉 藉は年終の祭。廣雅に「夏には清祀といひ、商には嘉平といひ、周には大藉といひ、秦には臘といふ」とある。韓愈が陽山令に貶せられて長安を出發したのは、十二月であつたといふこと、前に三學士に寄する詩にも、商山季冬月、水凍絕三行翰とあつた。【三七】日車 淮南子に「自ら車に乗じ、駕するに六龍を以てし、羲和を御と爲す」とあり、杜甫も西江浸日車といひ、愁畏日車翻といつて居る。つまり、日神は車に乗つて大空を驅けるといふので、日車は即ち太陽。【三八】天罅 罅は孔、自然に裂けて穴になつて居る。【三九】相借 勢すさまじく一時天地を占領する。【四〇】越俗 陽山は、春秋の時、南越の地なりしより云ふ。【四一】循猶乍 その風俗に倣つても、その時だけで、又、忘れて仕舞ふ。【四二】睢眦 老子に「而睢眦たり、而眦眦たり、而誰と居る」とあつて、睢眦は仰ぎ視る貌。【四三】嗣皇 永貞元年、順宗の即位せしことを指す。【四四】流化 流は布く、即ち教化を四方に布く。【四五】瑕垢 瑕は玉の疵、垢はあか、古るい罪科。【四六】桑柘 柘は桑の屬で、山桑もしくは野桑といふ。つまり野生の桑で

あらう。【四七】 斷蓋 嵩山を切り開く。【四八】 懸額 頴川に臨む。【四九】 抗 あぐ、高く聳かす。【五〇】 雀鼠得驅嚇 莊子に「鴟、腐鼠を得たり。鴟鵂、これを過ぐれば、仰いで之を視て嚇といふ」とあつて、註に「嚇とは、怒つて物を拒ぐ聲」とある。ここでは、耕作物の害を爲す鼠や雀を驅つて追ひのけるといふこと。【五一】 遶遶 二字ともに迎へる。【五二】 小女姪 後漢書に河間姪女工數、錢とあつて、その註に「姪は少なり」とある、年の若きこと。【五三】 畢婚嫁 後漢書に「向平、字は子平、隱居して仕へず。建武中、男女娶嫁、すでに畢るや、敕して家事相関するなく、當に我が死せし如くなすべし」とあり、齊書に「蕭惠基、常に所親に謂つて曰く、婚嫁畢るを須つて、當に歸つて舊廬に老ゆべし」とある。つまり、男子には其婦を娶り、女子は他に嫁せしめて、すつかり子供の始末をつけるといふ意。

【題義】 縣齋は縣令の官舎で、これは、韓愈が陽山の令たりし時に作つたのである。且つ篇中に嗣皇新繼、明とあるを見れば、貞元二十一年、順宗即位の事を傳聞したのである。有懷は、懷抱を述べるといふ意で、韓愈の希望は、遷謫を赦された後、全然浮世の事を棄て去つて、嵩山頴水の間に歸隱したいと云ふのである。

【詩意】 われは、年なほ若き頃より、世人と異にして俊偉なることを旨として居たが、従前の境遇は、まことに嘆き悲むべきものであつた。しかし、孔子に君子の儒となれと云はれた子夏の様な學者になるのも厭であるし、樊遲が志願した様に、百姓の眞似をすることも好まない。何でも、事業を爲せば、古しへの阜陶后稷の如く成りたいと思ひ、文章を作れば、曹植・謝靈運をも侮蔑する位に成りたいと、かういふ志望であつた。そこで、江湖の清き水に臨んで、冠の紐を洗ひ、腰下に佩ぶるに蘭麝の香高

きものを以てし、すこしも、世俗の汗れを受けぬ覺悟で、修養を旨として、道義を身に行ひ、悠悠として人生の長路を指し、去去として立派な馬車を馳せる身分に成りたいと思つて居たが、いくら傾國の美人でも、媒をして薦めるものが無ければ、君寵を得るに由なきと同じく、自分は、長く沈淪すること免れず、かの和氏の璧と同じく、十五城に交換する程の價値があつても、自分だけ承知するのでは、何にも成らない。その初、郷貢進士となり、計吏に連れられて上京し、射を澤宮に試みらると同じく、數ば試験場に立ち入り、蘇秦が十度まで上書したといふ程の苦勞は無かつたものの、なかなか一戦して覇を爲すことは出來ず、兩三度失敗した後、やつと進士に及第した。しかし、人情として、特別に優れたるものを忌み嫌ひ、その上、浮世は、權謀詐術が多いから、生來文才あつて、しかも資性極めて愚直なる自分は、到底、目ざましき立身をする事が出來ず、屢は蹶いて、不景氣な顔色をなし、幾度も失策して、氣が減入ることを免れず、往往にして人から誤解されたが、實際は、公治長の如く、全く罪に非ず、それから、侯嬴の如く、兎角無禮な奴だといつて、人から罵られたこともあつた。そこで、長安に居ても仕方がないから、これのみ自分の財産ともいふべき二三の書冊を懷にして、都を立ち去り、灞水の清き流を渡るときには、覺えず涙ぐんだ位。固より身は寂寞の中に老ゆるを甘んじ、閒暇無事の間に生涯を終りたいと志ざしたものの、それでは、第一、衣食に差支へ、朝食は腹にも盈たず、冬の衣は、わづかに腰を掩ふだけで、とても、寒さを凌げない。時しも、天下騷亂に

苦み、國家愈よ多事であつて、軍書を以て絶えず兵士を召集し、そして、馬に跨つて出征するといふ位だから、どうにか任用の路が無いこともあるまいといふので、汴州に往つては董晉に依り、彭城に往つては張建封の幕中に赴き、或は狩場の御供をして、弓箭を以て狐や兔を取り圍む有様を實視し、或は宴會に陪席して、絲竹の聲賑しき間に列ねたる酒肴を御馳走に成つたこともある。しかし、董晉も、張建封も、程なく相繼いで歿し、汴州も、徐州も、荒涼の景色に變じたから、自分も、此を立ち去り、その後、三年の間は、丸で休職といふ状態に在つたが、やがて官を求めむが爲に、洛陽より出で、雪を犯して、西の方、華山の麓を通つたが、随分難儀な旅行であつた。やつとの事で、長安に到着すると、都大路の春は、流石に賑はしく、塵埃が地に捲いて起る位、そこで、四門博士となり、文王の遺蹟たる靈臺は、風雨の夜など、殊に寂しく、兩ながら感慨に堪へ兼ねた。その内に自分は、文章を以て賣り出し、朋友の御蔭で、大分評判も善かつたが、美官に引き上げて呉れる様な有力者は、姻戚の中に無かつたから、仕方がない。それでも、やつとの事で監察御史を拜命し、丹墀に參候する身分とはなつたが、快馬を飛ばせて青雲の上を駆け廻るといふ様な、目ざましい榮達は、到底望むことが出来ない。兎角する内、自分は、上疏したるに因つて左遷せられ、俄に長安を出ることになつたが、その時は、冬であつて、顧みれば、九重の城闕は高く寒空に聳え、そして、曉色は長く續ける屋根の棟に耀いて居たか、これが都の見納めかと思ふと、覺えず、愴然として心悲しくなつた。自分が一身を賭して上疏し

たのは、丁の字の付く日であつて、羽蟲に苦められた鳥の如く、貶謫の憂き目に遇つたのは、十二月、即ち年の暮であつた。萬里の天涯なる荒漠の地に向ふのも、職分ならば致し方なく、まして、小邑でも領することの出来たのは、寛大なる恩赦であつて、もつと、ひどい目に遇つた處で、何とも言ふ譯には行かない。陽山に向ふ途すがら、渺渺たる湖波は、太陽の光を閃かし、嶺頂の石は、中から裂けて、自然に孔をなして居る。それから、愈よ陽山に到着して見ると、毒霧は、常に白晝を燻べ、暑い風は、いつもながら夏を焼くが如く、その上に雷鳴甚しくして、その威愈よ加はり、颶風が往往天地を占領して吹きめくることがある。かくの如く風土の變化は、杳然として測り難きが上に、耳に入る聲音は、まことに恐ろしい位。夷の言葉は、聞いて未だ慣れず、越地の風俗は、一寸眞似て見ても、到底長くは續かない。おまけに、自分は、遠來の人であるから、よそ者扱ひにされ、少しの事をも指摘されて、互に憎み嫌ひ、ぎよろりと睨み合つて、猜み訝るといふ始末。まことに、こんな邊鄙に居るのは、厭で堪まらないが、天恩未だ報いざるに因つて、しばらく此に留まるも、微官であるから、生活を之に託することは六つかしい。聞くとところに據れば、皇太子が新に即位して明德を繼がれ、率土の濱までも、日に教化を布き施されるといふことで、ここに古い罪科を洗ひ落し、これより長く去つて、田園の中に養蠶でもして暮らしたいと思ふ。その場處は、どこが善いかといへば、嵩山を切り開いて、雲に倚る扉を開き、潁川の流を壓するばかりにして、風の吹き入る臺榭を築き、米や

麥を一ばいに田に作り、梨や棗を家の周圍に栽培し、子供等は段段に生長し、一處になつて田畑を荒らす雀や鼠を追ひ除け、お上へ差し出す租税は、屹度その日までに上納し、そして、田舎酒を用意して、近隣の者を招いて共に樂み、老農の愚直なるを愛し、娘どもの年若きものを相手に笑ひさざめて閑日月を送りたい。苟くも、志だにあらば、かういふ事は、今が今でも出来るので、何も、古しへの向子平の如く、子女の婚娶を終つてからで無ければならぬといふ譯でもない。

【餘論】この詩は、仄韻の排律で、對偶極めて精當、詞彩爛然として居る。大體、五段より成り、起首、少小尙奇偉より自許三連城價に至るまでは、自ら其抱負を敘し、初隨三計吏貢より侯生或遭罵に至るまでは、郷貢進士となつて上京せしことを敘し、懷書出皇都より鑠翻時方禧に至るまでは、出京後、汴徐二州を經、それから四門博士より監察御史となり、陽山令に左遷されたことを敘し、投荒誠職分より豈謂三生足藉に至るまでは、陽山貶謫中に於ける感懷を敘し、嗣皇新繼明より結末何用畢婚嫁に至るまでは、今次官を罷めて、嵩山頽水の間に隱遯したいといふ希望を述べたのである。蔣本の評に「詩甚だ佳なる處なし、只だ事を敘する、頗る詳快懇切なり」といひ、顧嗣立は「公の詩、句句來歴あり、しかも能く務めて陳言を去るものは、全く反用に在り。醉贈張祕書の詩、本と老杜の稽紹、鶴雞羣に立つの語を用ひて、偏に張籍學古淡、軒鶴避雞羣」といひ、送文暢の詩、本と老杜の每愁夜中自足蝸の語を用ひて、偏に照壁喜見蝸といひ、薦士の詩、本と漢書「強弩の末、力、魯縞

に入るに能はず」の語を用ひて、偏に強箭射魯縞といひ、嶽廟の詩、本と謝靈運の猿鳴誠知曙の語を用ひて、偏に猿鳴鐘動不知曙といひ、この詩の結語、もと向平婚嫁畢の事を用ひて、偏に如今便可爾、何用畢婚嫁と云ふが如く、眞に舊事を翻新せしむ。この秘を解し得れば、臭腐皆化して神奇とならむ」といひ、朱竹垞は「規格、三學士に寄すると同じ、但し彼は一一實敘、此は組織華縟」といひ、乾隆御批には「仄韻の排律、名手希なるところ、かくのごとく組織精工、頓挫悲壯、集中に在つて亦た自ら一格を成す、塵埃紫陌の聯、梅花灞水の句と同一風致」とある。

合江亭

合江亭

紅亭枕湘江。蒸水會其左。
瞰臨眇空闊。綠淨不可唾。
維昔經營初。邦君實王佐。
翦林遷神祠。買地費家貨。
梁棟宏可愛。結構麗匪過。
伊人去軒騰。茲宇遂頽挫。

老郎來何暮。高唱久乃和。
 樹蘭盈九畹。栽竹逾萬个。
 長綆汲滄浪。幽蹊下坎坷。
 波濤夜俯聽。雲樹朝對臥。
 初如遺宦情。終乃最郡課。
 人生誠無幾。事往悲豈奈。
 蕭條縣歲時。契闊繼庸懦。
 勝事誰復論。醜聲日已播。
 中丞黜凶邪。天子閔窮餓。
 君侯至之初。閭里自相賀。
 淹滯樂閒曠。勤苦勸慵惰。
 爲余掃塵階。命樂醉衆座。
 窮秋感平分。新月憐半破。

老郎來ること何ぞ暮き、高唱久しうして乃ち和す。
 蘭を樹ゑて、九畹に盈ち、竹を栽ゑて、萬个に逾えたり。
 長綆、滄浪を汲み、幽蹊、坎坷を下る。
 波濤、夜、俯して聽き、雲樹、朝に對して臥す。
 初めは宦情を遺れたるが如く、終には乃ち郡課を最とす。
 人生誠に幾くもなく、事往いて、悲、豈に奈せむや。
 蕭條として歳時縣なり、契闊にして庸懦を繼ぐ。
 勝事、誰か復た論せむ、醜聲、日に已に播す。
 中丞、凶邪を黜け、天子、窮餓を憫む。
 君侯至るの初、閭里自ら相賀す。
 淹滯して閒曠を樂み、勤苦して慵惰を勸む。
 余の爲に塵階を掃ひ、樂を命じて衆座を醉はしむ。
 窮秋、平分を感じ、新月、半ば破れたるを憐む。

願書巖上石。勿使泥塵澆。

願はくは、巖上の石に書し、泥塵をして澆さしむる勿れ。

【字解】【一】紅亭。赤色に塗つた亭樹。【二】湘江。水經に「湘水は、零陵始安縣陽海山より出で、又東北零陵縣の西を過ぐるや、承沅湘といひ、衡州に至つて蒸水に合するときは、蒸湘と云ふ。【三】蒸水。一に承水といふ、水經註に「承水は、衡陽重安縣の西、邵陵縣界の邪蓋山より出づ」とあり、漢書地理志に「承陽は、承水の陽に在り、讀んで蒸の若し」とある。又蒸水は、その水氣蒸すが如きが故に名づけたといふことである。【四】邦君。地方長官、ここでは齊映を指す。【五】伊人。この人。【六】軒騰。飛び上る、立身する。【七】老郎。字文炫を指す。【八】來何暮。後漢書廉范傳に「廉叔度、何來暮とあるに本づく。【九】九畹。楚辭に「余既滋蘭之九畹、兮、又樹蕙之百畝」とあつて、王逸の註に「十二畝を畹と爲す」とある。【一〇】萬个。史記貨殖傳に「竹竿萬个」とあつて、古書には皆个の字を用ひてある。【一一】滄浪。楚辭に「滄浪之水清兮」とあつて、ここでは、清い水の義に用ひたのである。【一二】坎坷。石の相迫つて塞がつて居る處。【一三】最郡課。郡課とは、地方郡縣の役人の良否を課考すること、最は善い方の第一といふ義。【一四】縣。はるかなり。【一五】契闊。遠達しいこと、中間の長いこと。【一六】君侯。今の刺史の鄒某を指す。【一七】淹滯。無爲にして長く留まる。【一八】感平分。ここでは秋の最中。【一九】半破。上弦の月で、まだ半は缺けて居る。【二〇】澆。汚す。

【題義】諸本に題「合江亭寄刺史鄒君」とあつて、その方が明瞭で、もとは、さうであつたらうが、これは、後人が短くして仕舞つたのであらう。願註に「亭は、衡州の負郭に在り、今の石鼓頭、即ち其地なり。地形特異、巖然として二水の間に崛起す。旁に朱陵洞あり、亦た之を朱陵仙府といふ。唐人の題刻、巖上に散滿す。公、陽山より江陵に量移するとき、衡山を過ぐ」といひ、又「鄒君は其名を逸す。亭は故相齊映の作るところ、故に曰く、維昔經營初、邦君實王佐と。宇文炫、又その制を増

す、故に曰く、老郎來何暮、高唱久乃和と。前刺史元澄、政なし、廉使中丞楊公憑、奏して之を黜け、遂に鄒公を用ふ。その中丞黜三凶邪といふは、意ふに此を指すならむ」といつて居る。すると、この詩は、韓愈が陽山令から江陵に量移された時、洞庭湖南の衡州を通り、因つて、この亭を過ぎて作つたのである。亭は、詩中にも見える通り、湘江と蒸水との交會點に當つて居るから、その名があるので、元と此地方の長官で後に宰相となつて聲名ありし齊映が初めて之を建て、齊映去りし後數年、當時相當に名望のあつた宇文炫といふものが、この地方に來て修理を加へ、その後、元澄といふものが刺史となつて來任したが、これは宜しくない男であつたから、廉訪使の楊憑が之を彈劾して追ひ黜け、それから鄒某といふものが著任したので、韓愈の來たのは、丁度その頃であつた。鄒某は唐書にも見えないから、その人の閱歷等は、一切不明である。

【詩意】合江亭の朱塗の建物、湘江に臨んで峙ち、そして蒸水は其左に於て合流し、つまり、この亭は、蒸湘二水の交會點に當つて居る。そこで、亭上から俯瞰すると、まことに眇然として、廣廣とした景色、殊に、二水は、綠色、淨く澄み、唾をするだに勿體ないと思ふ位。初めて、この亭を經營したのは、刺史の齊映といふ人で、天晴、王佐の才を具へた偉らい人物であつた。その頃、このあたりは、林が茂つて、鎮守の祠があつたが、その林木を剪り拂つて、祠をも外に遷して仕舞ひ、それから、おのが財布の底をはたいて、土地を買ひ占めたといふことであつた。されば、梁棟は、廣く

して愛すべく、その結構は、如何にも麗はしいが、しかし、この場所に過ぎたといふのではなく、江山の景致に對して、まことに相應しいやうであつた。その齊君は、もとより、邊鄙の地方官を以て終るやうな人でなかつたから、やがて、都に召し還され、忽ち立身して、宰相の高位に上つたが、あとに残された此亭は、いつしか頽挫して、毀はれて仕舞つた。次に、老郎の宇文炫といふ人が刺史となつて來任したが、その來方の遅かつたのは、いささか遺憾で、たとへば、陽春白雪の高調も、久しうしてから、やつと和する人が出て來たやうなものであつた。しかし、宇文炫が遲蒞ながらも來たから好かつたので、やがて、蘭の如き香草を九畹に比すべき近邊の開地に種をまき、又竹を移植すること萬竿の多きに及んで、巖かどの兀兀たる間に細道を作つて、そこを辿り下ると、長い井戸繩で、滄浪の水に比すべき清き江水を汲み上げることが出来るやうにした。かくて、宇文炫自身は、ここに住んで居て、夜は、俯して波濤の響くを聞き、朝は、向ひ合つて、雲樹の團合せるを寝ながら眺めて居られた。かくの如くして、初めは、役人の務を全く忘れて居る様に、人から思はれ居たが、治民の成績、頗る觀るべく、地方吏員の良否を課考するとき、第一の最善であつたといふを聞いては、誰しも、感服せぬものは無かつた。しかし、人生の事は、決して、いつまでも續くものではなく、この宇文炫も、亦た中央政府に召し還され、折角の文彩吏治、ともに過去の夢となり、これを回憶すると、まことに、悲に堪へられぬ程である。かくて、蕭條として物淋しい中に歲月を送り、契闊として久しい間を隔

てて、刺史の役を繼いだのは誰かといふと、元澄といふ凡庸懦弱の詰らぬ一俗吏であつた爲に、折角の勝事も、最早口にするものなく、刺史の不評判のみが日に増し世間に傳播することと成つた。ここに、中丞の楊憑といふ御方は、觀察使として、この地に來り、こんな事では、とても駄目だといふので、元澄の如き凶邪の者を黜くことにし、天子も亦た人民の窮餓を憐んで、手腕のある立派な刺史を遣はれることになり、その選に中つて、はるばる下向したのが、今の鄒君で、その來任を聞いて、閭里皆互に相賀した位。君は、一方では、此處に淹滞して、無爲の中に閒曠なる景色を樂み、そして、一方では、自ら勤苦して、模範を示し、慵惰の者をば勵まし獎められた。そこへ我輩が丁度來かかつたから、予の爲に、塵階を掃うて懇に迎接し、樂を命じて座上の衆賓を酔はしめ、まことに、大した歓迎ぶりであつた。今しも、秋の半、しかも、名月には聊か間があつて、まだ月が半は缺けて見える時分、偶然ここに來て、御馳走に成つたから、この亭の縁起より始めて、君の功績を巖上の石面に書きつけやうと思つて、この詩を作つたのであるが、やがて之を鐫りつけ、そして、いつまでも泥塵に汗されぬ様に注意して、特に保存して貰ひたいものである。

【餘論】この詩は、韓集中に於ては、もとより格別の者でもないが、瞰臨眇空闊の二句、波濤夜俯聽の二句の如き、寫景の工、頗る愛すべきを覺える。

陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題一首因獻楊常侍

杜侍御に陪して、湘西兩寺に遊び、獨宿して題あり一首、因つて楊常侍に獻す

長沙千里平。勝地猶在險。
 況當江闊處。斗起勢匪漸。
 深林高玲瓏。青山上琬琰。
 路窮臺殿闕。佛事煥且儼。
 剖竹走泉源。開廊架崖廣。
 是時秋之殘。暑氣尙未斂。
 羣行忘後先。困息棄拘檢。
 客堂喜空涼。華榻有清簟。
 澗蔬羹蒿芹。水果剝菱芡。
 伊余夙所慕。陪賞亦云忝。
 幸逢車馬歸。獨宿門不掩。

長沙千里平かに、勝地猶ほ險に在り。
 況んや、江の闊き處に當つて、斗起、勢、漸に匪ず。
 深林、高くして玲瓏、青山、上に琬琰たり。
 路、窮まつて、臺殿闕け、佛事、煥として且つ儼なり。
 竹を剖いて泉源を走らしめ、廊を開いて崖に架す。
 この時、秋の殘、暑氣尙ほ未だ斂まらず。
 羣行して後先を忘れ、困息して拘檢を棄つ。
 客堂、空涼を喜び、華榻、清簟あり。
 澗蔬、蒿芹を羹、水果、菱芡を剝ぐ。
 伊れ余夙に慕ふところ、陪賞亦た云に忝し。
 幸に車馬の歸るに逢ふ、獨宿して門掩はず。

山樓黑無月。漁火燦星點。
 山樓、黒くして月なし、漁火、燦として星のごとく點ず。
 夜風一何喧。杉檜屢磨颯。
 夜風、一に何ぞ喧しき、杉檜、屢ば磨颯。
 猶疑在波濤。怵惕夢成魘。
 猶ほ疑ふ波濤に在るか、と、怵惕して、夢、魘を成す。
 靜思屈原沈。遠憶賈誼貶。
 靜に屈原の沈むを思ひ、遠く賈誼の貶せらるるを憶ふ。
 椒蘭爭妬忌。絳灌共讒詔。
 椒蘭、争うて妬忌し、絳灌、共に讒詔す。
 誰令悲生腸。坐使淚盈臉。
 誰か悲をして腸に生せしめ、坐ながら涙をして臉に盈
 翻飛乏羽翼。指摘困瑕玷。
 翻飛、羽翼に乏しく、指摘、瑕玷に困めらる。
 珥貂藩維重。政化類分陝。
 貂を珥んで、藩維重く、政化、分陝に類す。
 禮賢道何優。奉己事苦儉。
 賢を禮して、道、何ぞ優なる、己を奉じて、事、苦だ儉なり。
 大廈棟方隆。巨川楫行剡。
 大廈、棟、方に隆、巨川、楫、行く、剡る。
 經營誠少暇。遊宴固已歎。
 經營、まことに暇少く、遊宴、固より已に歎れり。
 旅程愧淹留。徂歲嗟荏苒。
 旅程、淹留を愧ぢ、徂歲、荏苒を嗟す。
 平生每多感。柔翰遇頻染。
 平生、毎に感多く、柔翰、頻りに染むるに遇ふ。

展轉嶺猿鳴。曙燈青燄燄。

展轉すれば、嶺猿鳴き、曙燈、青くして燄燄たり。

【字解】【一】斗起。北斗の形の如く突起して聳えて居る。【二】匪漸。なだらかでない。【三】琬琰。蜿蜒に同じ。【四】佛事。法事ではなく、佛堂内の飾り付け等を合稱す。【五】剖竹。篔簹を云ふ。【六】崖。崖、音は掩、説文に「崖は巖に因つて崖を爲る」とある。【七】秋之殘。殘はのこるではなく、動詞にすると、そのこなふ、つくるといふ義、このも盡さる方で、即ち秋の末といふ義。【八】困息。一處に休息する。【九】棄拘檢。禮法に關係せぬ。【一〇】清簞。簞は竹むしろ、謝朓は「清簞清夏室」といひ、杜甫は「清簞疎簾看奕棋」といつた。【一一】蒿芹。蒿はよもぎ、詩經に「食野之蒿」とあつて、その註に「蒿なり、即ち青蒿」といひ、又薄采其芹」とあつて、その註に「水菜なり」とある。【一二】菱茨。茨も水菜の一種。【一三】磨颯。風に搖すられて木の幹が互に摺れ合ふ。【一四】魘。おびへる、うなされる。【一五】屈原沈。屈原が汨羅に沈みしこと、前に屢ば見ゆ。【一六】賈誼。賈誼は都から出されて長沙王太傅となつた。【一七】椒蘭。離騷に余以蘭爲可恃兮、羌無實而容、椒專佞以慢愔兮、機又欲充夫佩韓」とあつて、王逸の註に「蘭は楚の懷王の弟司馬子蘭なり、椒は楚の大夫子椒なり」とある。【一八】絳灌。漢書の賈誼傳に「文帝、誼を以て公卿の位に任ぜむことを議す。絳灌、乃ち誼を毀つて曰く、洛陽の人、年少初學、専ら權を擅にして、諸事を紛亂せむとす、と。ここに於て、天子、以て長沙王の太傅と爲す」とあつて、顏師古の註に「絳は絳侯周勃、灌は灌嬰なり」とある。【一九】臉。顔面。【二〇】瑕玷。ともに玉の疵。【二一】珥貂。左思の詠史に七葉珥三漢貂」とあつて、李善註に「珥は挿なり」とあり、董巴の輿服志に「侍中、中常侍は、武弁を冠し、貂尾を飾となす」とある、即ち楊常侍を指す。【二二】藩維重。一地方の綱維を握つて居る、其任が重い。【二三】分陝。公羊傳に「陝よりして東は、周公これを主り、陝よりして西は召公これを主る」とあつて、何休の註に「陝は今の弘農陝縣、是れなり」とある。【二四】剡。けづる、易の繫辭に「木を剡つて楫となす」とある。【二五】徂歲。行く年。【二六】柔翰。軟かい紙。【二七】展轉。寝られずして體を動かすこと、前に見ゆ。

【題義】この詩は、杜侍御と共に、湘西兩寺に遊び、その寺に獨宿した時、寺壁に題し、そして、楊

常侍といふ人に寄せたのである。湘西兩寺は、一つの寺の名とすれば、まことに變てこで、一本に兩の字なく、即ち湘西寺とある方が本當らしい。杜侍御は、楊常侍の幕中の者で、初めは、楊常侍自身が案内する積りであつたが、何か差支があつたと見え、杜侍御をして、代つて案内させた者と思はれる。杜常侍は、如何なる人か分からぬ。楊常侍、名は憑、即ち前詩に中丞黜三凶邪とあつて其中丞で、韓愈の自註に「楊常侍は憑なり、時に湖南に觀察たり」とあるし、なほ詳しくは舊唐書に「楊憑、字は虛受、弘農の人、湖南江西觀察使に累遷し、入つて、左散騎常侍となる。氣節を負ひ、母弟凝・凌と相友愛す、皆時名あり」とある。すると、この時は、まだ常侍では無かつたのであるが、後に追改したのであらう。湖西は即ち湘西、今の長沙一帯の地である。この詩は、韓愈が陽山から江陵に量移され、長沙附近を通つた時に作つたので、即ち前詩を作つた直後の事と思はる。この時、韓愈は、量移されたといふが、量移とは、比較的善地に遷されるといふに過ぎないから、もとより満足する筈もなく、その感慨をも併せ述べて、地方長官の最高級に居る楊憑に示したのである。

【詩意】長沙の地たるや、一望千里、極めて平坦であるが、勝地は、無論、險阻な處に在る。湘江の水の闊い處に當つて、山が突然聳えて居て、もとより、なだらかでない。山の上は、一帯の深林で、その緑の色は透き通る様であるし、青山は、その上に在つて、蜿蜒と長く續いて居る。その間に一條の路があり、その盡くる處、即ち深林の一番奥に、立派な大伽藍があつて、それが湘西寺。堂塔の

飾り付などは、美しく且つ莊嚴である。それから、竹を破つて筧となし、泉源から導いて來る清水は、混混として走り、又巖壁を削つて造つた長廊があつて、本堂の方へ行くやうに成つて居る。時しも秋の末、長沙地方は熱帯に近いから、まだ暑氣が収まらない。そこで、儀式立つて、その山に登ると、なかなか骨が折れるが、幸にも、案内をして呉れた杜侍御といふ人は、甚だ脱略な人であるから、羣行して、先後の順序を忘れ、案内者が跡になつても關はず、そして、一處に休息して、少しも禮法に頓著せず、肌を脱いでも、誰も咎めない。寺には、無論、客間があつて、それが特別に涼しい座敷、小ざつぱりした寢臺の上には、綺麗な竹むしろが鋪いてある。山中の事であるから、大した御馳走もないが、よもぎや芹などを谷川から摘んで來て、煮て呉れたし、又池中に生ずる菱の實などを剝いで食事を進めて呉れた。かういふ場處は、予が平生慕ふところであつて、今日杜侍御に陪して之に遊ぶことの出來たのは、まことに辱い。そして、杜侍御は、氣の利いた人で、自分達が長く居ると、却つて窮屈だらうといふので、案内をして寺に送り込むと、さつさと車騎を揃へて歸つて仕舞ひ、自分だけが取り残されて、此處に獨宿することとなり、もとより、邊鄙の山中で、盜賊の心配なども無いから、門は開いた儘である。今夜は宵やみ、山樓に上つても、あたりは眞暗で、何も見えないが、下は渺渺たる湘江に臨み、江中には、數點の漁火が、星の如く、燦然として輝いて居る。やがて、夜が更けると、風の音が極めて騒がしく、それは、杉だの檜だのが搖すられて、幹と幹とが互に摺れ合つて聲を

添へるからであつた。もとより、山樓の上に寝て居るのだが、さながら、江海の中に在つて波濤に揺られて居るが如く、さきに洞庭を渡つた時、あぶなく舟が難破せむとしたことなどを考へ出すと、夢にもおびえる位。おもへば、屈原が水に投じて死んだ汨羅の地も遠からず、賈誼が文帝の御機嫌を損ねて左遷されたのも、丁度、この長沙である。屈原は、子蘭・子椒の二人に妬忌せられ、賈誼は、周勃・灌嬰に讒を構へられて、あの様な事に成つたのである。今日、我をして悲を腸中に生せしめたのは誰か知らぬが、都を逐はれて貶謫された事は、かの屈原、賈誼と善く似て居る處から、千古同感、覺えず涙が流れて、顔に一ばいになる。そこで、早く都の方へ歸りたいと思ふが、鳥ならぬ身には羽翼なく、その上、人の缺點をほじくつて攻撃する手合ばかり居るから、まことに、仕方がない。今、楊常侍は、貂尾を冠にし、一地方の觀察使として、その聲威、頗る重く、そして、政化の行き届いたことは、むかし周召二公が陝を界として、天下を分治した様なものである。そして、楊公は、賢を禮して、非常に優待せられ、己を奉ずることは、勤儉で、少しも、傲慢奢靡の處がない。やがて、中央政府の大官となり、大きな家の棟梁となり、巨川を渡る舟楫となつて、次第に立身すべきものとして、囑望されて居る。されば、毎毎公務の爲に少しの餘暇もなく、遊宴などは成るべく致さぬといふ御考で、今日しも、杜侍御を代理として予を案内させて下さつたものと考へる。予の如き才力愚劣、且つ身分賤しき者が、個様な處に来て、のんきに滞留して居るのは、まことに、愧ぢ入る次第、殊に歲月荏苒

として空しく逝くことを思ふと、何一つ仕出來さぬ身は、愈よ嘆はしく覺える。もとより、平生、感慨多く、殊に今日の絶境に宿した處から、ここに柔翰を把つて、下らぬ事を頻りに書き續けた譯である。やがて、夜も段段更けて、曉近くなると、峰には猿の聲がして、展轉の間に夢も結ばれず、殘燈の光は、青く睽睽として、枕頭を照らして居るのみである。

【餘論】 乾隆御批には「獨宿より、景を寫し、情を生ず、先づ客堂華榻を以て引き起し、猿鳴燈睽、仍つて獨宿の上に就いて結ぶ、章法一綫」とある。つまり、客堂華榻を前以て言つて置いて、段段と獨宿といふ事を引き出して來た其筆路は、まことに味はふべきことだといふ意である。それから、朱竹垞は、起首の數句を賞して「情景を寫して細に入る」といひ、何義門は、夜風一何喧の四句を擧げて「四句連りに之を夢魘に係く、便ち味ふべし」といつた。

岳陽樓別竇司直

岳陽樓、竇司直に別る

洞庭九州間。厥大誰與讓。

洞庭は、九州の間、厥大誰にか譲らむ。

南匯羣崖水。北注何奔放。

南に匯る羣崖の水、北に注いで何ぞ奔放たる。

瀦爲七百里。吞納各殊狀。

瀦して七百里となり、吞納、各、狀を殊にす。

自古澄不清。環混無歸向。
 炎風日搜攪。幽怪多冗長。
 軒然大波起。宇宙隘而妨。
 巍峩拔嵩華。騰蹕較健壯。
 聲音一何宏。轟輶車萬兩。
 猶疑帝軒轅。張樂就空曠。
 蛟螭露筍簾。縞練吹組帳。
 鬼神非人世。節奏頗跌踴。
 陽施見誇麗。陰閉感悽愴。
 朝回宜春口。極北缺隄障。
 夜纜巴陵洲。叢芮纔可傍。
 星河盡涵泳。俯仰迷下上。
 餘瀾怒不已。喧聒鳴甕盎。

古しへより、澄ませども清まず、環混して歸向なし。
 炎風、日に搜攪して、幽怪、冗長多し。
 軒然として、大波起れば、宇宙、隘くして妨ぐ。
 巍峩、嵩華を抜き、騰蹕、健壯を較ぶ。
 聲音、一に何ぞ宏なる、轟輶、車萬兩。
 猶ほ疑ふ、帝軒轅、樂を張つて空曠に就くかと。
 蛟螭、筍簾を露はし、縞練、組帳を吹く。
 鬼神、人世に非ず、節奏、頗る跌踴す。
 陽、施して、誇麗を見、陰、閉ちて、悽愴を感ず。
 朝に宜春口に回れば、極北、隄障を缺く。
 夜、巴陵の洲に纜し、叢芮、纔に傍ふべし。
 星河盡く涵泳、俯仰、下上に迷ふ。
 餘瀾、怒つて已まず、喧聒、甕盎を鳴らす。

明登岳陽樓。輝煥朝日亮。
 飛廉戢其威。清晏息纖纒。
 泓澄湛凝綠。物影巧相況。
 江豚時出戲。驚波忽蕩漾。
 時當冬之孟。隙竅縮寒漲。
 前臨指近岸。側坐眇難望。
 滌濯神魂醒。幽懷舒以暢。
 主人孩童舊。握手乍忻悵。
 憐我竄逐歸。相見得無恙。
 開筵交履舄。爛漫倒家釀。
 杯行無停留。高柱送清唱。
 中盤進橙栗。投擲傾脯醬。
 歡窮悲心生。婉孌不能忘。

明に岳陽樓に上れば、輝煥として朝日亮なり。
 飛廉、その威を戢めて、清晏、纖纒を息む。
 泓澄として、凝綠を湛へ、物影、巧に相況す。
 江豚、時にいでて戯れ、驚波、忽ち蕩漾。
 時、冬の孟に當り、隙竅、寒漲を縮む。
 前に臨んで近岸を指し、側坐、眇として望み難し。
 滌濯して、神魂醒め、幽懷、舒びて以て暢ぶ。
 主人、孩童の舊、手を握つて、乍ち忻悵。
 憐む、我が竄逐せられて歸り、相見得無恙を得たるを。
 筵を開いて、履舄を交へ、爛漫として家釀を倒す。
 杯は行りて停留なく、高柱、清唱を送る。
 中盤に橙栗を進め、投擲して脯醬を傾く。
 歡窮まつて悲心生じ、婉孌、忘るる能はず。

念昔始讀書。志欲干霸王。^(三九)
 屠龍破千金。爲藝亦云亢。^(四〇)
 愛才不擇行。觸事得讒謗。^(四一)
 前年出官日。此禍最無妄。^(四二)
 公卿探虛名。擢拜識天仗。^(四三)
 姦猜畏彈射。斥逐恣欺誑。^(四四)
 新恩移府庭。逼側厠諸將。^(四五)
 于嗟苦鶩緩。但恐失宜當。^(四六)
 追思南渡時。魚腹甘所葬。^(四七)
 嚴程迫風帆。劈箭入高浪。^(四八)
 顛沈在須臾。忠鯁誰復諒。^(四九)
 生還眞可喜。剋己自懲創。^(五〇)
 庶從今日後。粗識得與喪。^(五一)

念ふ昔、はじめて書を讀み、志、霸王を干さむと欲す。
 龍を屠りて、千金を破り、藝たる、亦た云に亢し。
 才を愛して行を擇ばず、事に觸れて讒謗を得たり。
 前年、官を出づるの日、この禍、最も無妄。
 公卿、虚名を探り、擢拜して天仗を識る。
 姦猜、彈射を畏れ、斥逐して、欺誑を恣にす。
 新恩、府庭に移り、逼側、諸將に厠はる、
 于嗟、鶩緩に苦む、但だ恐らくは宜當を失はむことを。
 南渡の時を追思すれば、魚腹、葬るところに甘んず。
 嚴程、風帆に迫り、劈箭、高浪に入る。
 顛沈、須臾に在り、忠鯁、誰か復た諒とせむ。
 生還、眞に喜ぶべし、己を剋めて自ら懲創す。
 庶はくは、今日よりして後、粗ぼ得と喪とを識らむ。

事多改前好。趣有獲新尙。^(五二)
 誓耕十畝田。不取萬乘相。^(五三)
 細君知蠶織。稚子已能餉。^(五四)
 行當挂其冠。生死君一訪。^(五五)

事、多くして前好を改め、趣、新尙を獲るあり。
 誓つて、十畝の田に耕して、萬乗の相を取らず。
 細君は蠶織を知り、稚子は、すでに能く餉す。
 行く、當に其冠を挂くべし、生死、君、一訪せよ。

【字解】【一】九州。支那本土全體。禹が洪水を治めた後に天下を九州に分ちしに始まる。【二】誰與讓。與は歎に通じ、誰にか讓らむと訓すべし。【三】羣屋水。蜀中溪壑の水。【四】滌。溜まる。【五】吞納。湖水の呑んで納める多くの川。【六】環混。環繞混同。【七】巍峩。高き貌。【八】嵩華。嵩山は中岳、華山は西岳、ともに五岳の中に數へられて居る。【九】騰蹕。飛び上る貌。【一〇】轟輻。輻は車聲。【一一】軒轅。黃帝軒轅氏、莊子に「黃帝、咸池の樂を洞庭の野に張る」とある。洞庭は、冬になると湘江の流域以外、皆乾いて仕舞ふから、その時は野といふのである。【一二】蛟螭。螭は龍の屬、蛟は龍の角なくして黃なるもの。【一三】箛篴。樂器を掛ける道具、前に元和聖德詩に見ゆ。【一四】結練。れり絹。【一五】組帳。帳幕。【一六】宜春口。宜春は縣の名、即ち袁州。【一七】纜。舟を繋ぐ。【一八】巴陵洲。即ち岳州。【一九】叢苒。草の生ずる貌。【二〇】星河。天の河。【二一】噴聒。かまびすしきこと。【二二】鳴甕。瓶の中の水が捲かれて鳴り響く。【二三】輝煥。光明の貌。【二四】亮。爽朗の貌。【二五】飛廉。楚辭に後三飛廉使奔屬とあつて、その註に「風伯なり」とある。【二六】息織。木華の海賦に輕塵不飛、織羅不動といへると同義。細かいことが羅紗の模様に似た湖面は少しも動かないといふこと。【二七】巧相況。くらべ合ふ。【二八】江豚。海豚の類で、淡水中に住んで居る。説文に「江豚、一名、傅鯨、風ふかむと欲すれば踊る」とあり、許渾の詩にも、江豚吹浪夜還風とある。【二九】蕩漾。のたりのたりする。【三〇】孩童。小供の時分から昔馴染。【三一】忻悵。喜憂に同じ。【三二】履寫。寫は靴足袋。【三三】爛漫。興酣なること。【三四】高柱。柱は瑟の柱。【三五】中盤。盤中に同じ。【三六】投擲傾脯。脯は肉の乾

かしたものを、醬はひしほの類。橙栗などの菓物に脯醬を添へて味をつけること。【三】婉孌、ここでは親切なること。【三】干、説きつける。【四】屠龍破千金、莊子に「朱泚漫、龍を屠ることを支離益に學ぶ、千金の家を殫し、三年技成つて、その巧を用ふる」ところなし」とある。【四】亦云元、高尚過ぎる。【二】此禍最無妄、無妄は易に見えた語、ここでは必然的なる禍といふこと。【三】天仗、天子の儀仗。【四】姦猜、姦人の猜忌。【四】彈射、彈劾する。【四】恣欺誑、無實の罪に陥れられる。【四】移府庭、江陵府に量移されしこと。【四】逼側、相迫ること。【四】周諸將、江陵府は武將の節度使が治めて居る處なるをいふ。【五】南渡、前年この湖を渡つて、南、陽山に赴きし時の事をいふ。【五】魚腹、史記に「屈原曰く、むしろ常流に赴いて江魚の腹中に葬らるるも」とある。【五】嚴程、嚴重なる旅程。【五】忠鯁、誠忠骨鯁。【五】剋己、自分を枉げる。【五】懲創、懲らし痛める。【五】新尙、新しい好尙。【五】萬乘相、天子の宰相。【五】細君、漢書東方朔の傳に「歸つて細君に遺らむ」とあつて、顔師古の註に「細君は朔の妻の名。一説に、細は小なり、朔、自ら諸侯に比し、その妻を謂うて小君といふ」とある。【五】能餉、辨當を運搬する。【六】挂其冠、辭職すること。後漢書逢萌傳に「冠を解いて東都城門に掛け、因つて遂に潛藏す」とあり、南史に「陶弘景、冠を神武門に掛け、表を上つて祿を辭す」とある。

【題義】この詩も、前の二首と同時で、陽山を發し、長沙を経て江陵に赴く間の作である。韓愈は、緩緩と此邊の山水を探りつつ赴任したので、詩中に冬之孟とあるより見れば、十月の初であつたが、その時、岳州にかかり、仍つて、岳陽樓に登つた。この樓は、周處の風土記に「岳陽樓は、城の西門の門樓なり、下に洞庭を瞰る、景物寬濶」とあるし、その詳は、宋の范仲淹の岳陽樓記に見え、文章軌範などにも引いてあるから、讀者諸君は、すでに先刻御承知の事であらう。その時、寶庠といふものが、岳州地方の役人であつたが、やがて、この人と別るるに臨んで、此詩を作つたのである。韓

愈の原註には「寶庠、時に武昌の幕を以て岳州に權たり」とある。そして、舊唐書には「寶庠、字は胃卿、韓阜の武昌に鎮するや、幕中に辟し、大理司直に陟り、權りに岳州を領す」とある。

【詩意】洞庭は、支那全土に於て、他に比類なき程大きな湖水であつて、蜀中羣崖の水は、南にめぐつて、この湖水となり、それが更に北注して長江となるので、その勢の奔放なるも、尤も至極な事である。洞庭の周圍は、七百里に及び、その呑んで納める多くの川は、各、狀を殊にして居る。中には、随分濁流もあること故、いくら澄まそうとしても、その水は清くならないし、多くの水が環繞混同して、何處に歸向するか分からぬ位。もとより、熱い處であるから、炎風が日日その湖面を攪き亂し、さまざまの幽怪なる動物が、役にも立たぬ癖に、澤山生長して居る。かくの如き大湖であるから、軒然として大きな波が逆巻くと、宇宙を狭しとし、且つこれが邪魔で仕方がないといふ様に暴れ廻る。嵩山だの、華山だのは、巍峨として随分高い山であるが、洞庭の大波が飛び上るときには、これ等の山と其健壯を較べやうとして居る。従つて、その聲音の凄まじく大きいことは、萬輛の車が一時に馳せ出したかと思ふ位であるし、むかし、黃帝が空曠なる此處洞庭の野に於て咸池の樂を張られたのも、かくやとばかり。それから、水中の動物が形を現はすのは、丁度その時樂器の掛けてある道具に蛟螭の蟠つて居るのが露はれて居るかと思ふ様であるし、波の白く長く續いて居るのは、その時、帳幕を設けて、四方に白い練絹を張つたやうである。かかる大きな響は、全く鬼神の爲すことで、到底人間の仕

業ではなく、又黄帝の頃は太古の昔であるから、跌宕たる大きな鼓吹を以て節奏としたのであらう。かくて、音律が陽に響くときは、萬物が調和して、賑はしきまで綺麗であるが、陰の聲をなす時は、悽愴の極、秋のやうな氣がして、人心を傷ましめ、それに應じて、景色が變り、氣候も違つて來る。洞庭湖の景色は、ざつと上述の如く、そして、予は、今朝、宜春口から舟を乗り出して、ここに到着したので、北進する間には、少しも、隄防などもなく、風でも起つたら、どうするかと思ふ位。夜に成つて、巴陵の洲に泊したが、そこには、蘆荻の類が叢芮として生えて居て、どうやら舟を寄せることが出來た。天の河は、その影を湖面に涵し、俯仰する間、空や水、いづれとも、上下を分かち兼ねるばかり。そして、餘瀾は、怒つて、なほ止まざるが故に、壺の中の水が揺られて、ざぶざぶと鳴るやうであつた。あくる朝、名だたる岳陽樓に登ると、きらきらしく朝日が輝きわたり、風伯は、その威を收め、湖面の羅紗模様も決して動かさず、非常に澄みきつた水は、凝緑を湛へ、萬象、皆その影を寫して、互に較べ合つて居る。その間に、江豚が時時水を出でて戯れると、驚波がのたりのたりとして居る。時しも、十月冬の初、寒く漲つた水の縮まるのが、隙間から見え、従つて、身に浸む水氣は、ぞつとする程である。前の方に臨んで近い岸を眺望すれば、よく見えるが、側坐して脇を向くと、眇として望み難いやうな心持がする。そこで、おのれの神魂を洗濯して、豁然として醒め、そして、幽懷をのびのびと引き延ばすことが出來た。今日、ここに予を招いて呉れた寶司直といふ人は、

子供の時から昔馴染であつて、久し振りに遇つたから、手を握つて、一喜一憂、貴君は陽山に竄逐されたが、恙なくして、此地に還り、かういふ様に御目にかかることの出來たのは、まことに結構な事だといふので、宴を開いて履寫を交へ、多くの人人と併せて招き寄せ、手造りの酒を傾けて、ともに打ち興じた。そこで、しきりに盃を廻はして、少しも停滯することなく、やがて、琴柱を高くし、面白い歌などを歌はせ、盤中には、土地の名物たる橙栗を盛り、その上、脯醬などを添へて味を加へ、出來るだけ、御馳走をして呉れたので、喜び極まつて、物とはなしに悲を生じ、君の親切は、決して忘れることが出來ないと思つた。おもへば昔、はじめて書を讀んだ時、霸王者に遊説し、天晴の人物となつて、一仕事やつて見たいと考へて居たが、その學んだところは、千金を費して龍を屠る術を稽古したと同じく、折角、その技が出來るやうになつても、高尚すぎて、役に立たない。加之、自分は、朋友と交際するのに、才のみを擇んで、その行狀を擇ばなかつたから、事に觸れて、先方の感情を害し、その爲に、讒謗せらるるを免れなかつた。これとても、前年出でて朝廷に官したから、必然的に起つた、謂はゆる無妄の禍であつた。その時、自分は、どうやら氣が進まなかつたが、公卿輩は、我が虚名を取つて、推薦して呉れ、やがて、擢んでられて朝官に拜し、天子の儀仗を識ることも出來る様になつたのであるが、間もなく、奸人の猜忌に因つて彈劾せられ、無實の罪を言ひかけられて、南方に斥逐せられたのである。しかし、近ごろは、天恩を受けて、小縣より大府に轉任するこ

となつたが、そこは、武人どもの組織して居る節度使の官署であつて、自分は迫られて、諸將の間に立ち交り、もと文弱な身であるところから、薄のろであるといはれたり、事の宜しきを失つて、排斥されたりすることは無いかと、今から取越し苦勞をして居る。それから、曩に陽山に赴いた時の事を追思すると、矢張、ここを通過したが、非常の大風浪で、あはや、魚腹に葬られる處、おまけに何日任所に到着せよといふやうに、嚴重な日程がある處から、風帆を揚げて、矢を射るやうな勢で高浪の中に潜り入つて仕舞ひ、あぶなく、舟は顛覆する處であつて、若し死んで仕舞へば、わが忠信骨髄を誰も諒として知るものは無かつたであらう。しかも、不思議に難を免れ、今日生きて此に還つたのは、まことに、喜ぶべく、自分の特性を枉げて、世事に懲りた様に行つて見やうと思ふのである。希はくは、今日より後、略ぼ人事の得失をも知つたから、事ごとに、むかしの嗜好を改め、そして新しい好尚を以て、趣味ある方に向ひたい。それには、歸隱して百姓となるのが第一で、誓つて、十畝の田を耕し、そして、天子の宰相と成らうといふ了見は抛つて棄てて仕舞はふ。わが妻は、蠶を飼つたり、布を織つたりする位な事は出来るし、倅も、大きくなつて、辨當を運ぶことは出来るから、行く行く冠を掛けて辭職しやう。それに就いて、君と此に別れるのであるが、時時、手紙でも寄せて、生きて居るか、死んで仕舞つたかといふ位の事は、尋ねて、御貰ひしたいものである。

【餘論】 蔣之翹は「退之の岳陽樓の詩、前半は景を寫し、猶ほ卓犖にして致あり。時當冬之孟以下

に至つては、便ち瑣屑甚だしきを覺ゆ。故に、唐子西謂へるあり、子美は四十字のみ、氣象闊放、涵蓄深遠、殆んど洞庭と雄を争ふ、退之、禹錫、率ね大篇を爲るも、遠く逮ばざるなり」といつたが、その境遇と詩體とが、自然異なつて居ることを思へば、かく一概に言つて退けるのは、あまりに無造作である。そこで、兪瑒は「この詩、前半首は景を寫し、後半首は事を述べ、却つて、追思南渡時を用ひて、數語挽轉、眞に千鈞の力あり、且つ此二段あつて、わづかに、此に到つて鋪張することの漫然に非ざるを見るなり、公が布局運筆の妙を見るべし」といひ、朱竹垞は「宏濶跌宕、これ大局面、大抵力量を以て勝る」といひ、後に其官途の經歷を述べる一段に就いては「この事、屢は敘述す、改換の法、虚實繁簡、各境あるを見るを要す」といひ、何義門は追思南渡時に就いて「前半を打轉し、方に寫景の處、漫然鋪敘するに非ざるを見る、これ眞に匠手の結構」といひ、乾隆御批には「寫景兩段、陽開陰閉、范希文の岳陽樓記、これより脱胎するに似たり」とある。それから、この篇は、截然として二段に分れ、起首より幽懷舒以暢に至るまでは、専ら洞庭の風景を敘し、主人孩童舊より結末に至るまでは、専ら己の境遇を述べ、情景融合して、組織も緊密に出来て居る。劉禹錫は、この篇に和する六十韻の一篇を作つて、現に集中に載せてあるが、篇幅が長いから、ここに附載することを合はせる。

送文暢師北游

文暢師の北游を送る

昔在四門館。晨有僧來謁。
 自言本吳人。少小學城闕。
 已窮佛根源。粗識事輓軌。
 攀拘屈吾真。戒轄思遠發。
 薦紳秉筆徒。聲譽耀前閥。
 從求送行詩。屢造忍顛蹶。
 今成十餘卷。浩汗羅斧鉞。
 先生閱窮巷。未得窺剗剗。
 又聞識大道。何路補剗剗。
 出其囊中文。滿聽實清越。
 謂僧當少安。草序頗排訐。
 上論古之初。所以施賞罰。

むかし、四門館に在りしとき、晨に僧あつて來り謁す。
 自ら言ふ、本と吳人、少小にして城闕に學ぶ。
 すでに佛の根源を窮めて、粗ぼ事の輓軌を識る。
 攀拘して、吾が真を屈し、轄を戒めて遠く發せむを思ふ。
 薦紳、筆を乗るの徒、聲譽、前閥を耀かす。
 從つて送行の詩を求め、屢ば造りて顛蹶を忍ぶ。
 今、十餘卷を成し、浩汗、斧鉞を羅す。
 先生、窮巷を閱ちて、未だ剗剗を窺ふを得ず。
 又聞く、大道を識ると、何の路か剗剗を補はむ。
 その囊中の文を出せば、聽に滿ちて實に清越。
 僧に謂ふ、當に少しく安んずべし、序を草して頗る排訐す。
 上は、古しへの初、賞罰を施す所以を論ず。

下開迷惑胸。窳豁劓株槩。
 僧時不聽瑩。若飲水救渴。
 風塵一出門。時日多如髮。
 三年竄荒嶺。守縣坐深樾。
 徵租聚異物。詭製怛巾韞。
 幽窮共誰語。思想甚含噉。
 昨來得京官。照壁喜見蝎。
 況逢舊親識。無不比鷓蟹。
 長安多門戶。弔慶少休歇。
 而能勤來過。重惠安可揭。
 當今聖政初。恩澤完穢狖。
 胡爲不自暇。飄戾逐鷓鷲。
 僕射領北門。威德壓胡羯。

下は、迷惑の胸を開いて、窳豁として株槩を劓る。
 僧、時に聽瑩せず、水を飲んで、渴を救ふが若し。
 風塵、一たび門を出で、時日、多きこと髮の如し。
 三年、荒嶺に竄せられ、縣を守つて深樾に坐す。
 徵租、異物を聚め、詭製、巾韞に怛く。
 幽窮、誰と共にか語らむ、思想、噉を含むよりも甚し。
 昨來、京官を得、壁を照らして、蝎を見るを喜ぶ。
 況んや、舊親識に逢ひ、鷓蟹に比せざるなし。
 長安、門戸多く、弔慶、休歇少し。
 而、能く勤めて來り過ぐ、重惠、安んぞ掲ぐべき。
 當今聖政の初、恩澤、穢狖を完うす。
 何すれど、自ら暇あらざる、飄戾して、鷓鷲を逐ふ。
 僕射、北門を領し、威德、胡羯を壓す。

相公鎮幽都。竹帛爛勳伐。

相公、幽都に鎮し、竹帛、勳伐を爛かす。

酒場舞閨妹。獵騎圍邊月。

酒場、閨妹を舞はしめ、獵騎、邊月を圍む。

開張篋中寶。自可得津筏。

篋中の寶を開張すれば、自ら津筏を得べし。

從茲富裘馬。寧復茹藜蕨。

これより、裘馬に富まば、むしろ、復た藜蕨を茹はむや。

余期報恩後。謝病老耕垝。

余は期す、恩に報する後、病を謝して耕垝に老ゆるを。

庇身指蓬茅。逞志縱獫狢。

身を庇して蓬茅を指し、志を逞うして獫狢を縱たしめむ。

僧還相訪來。山藥煑可掘。

僧還つて相訪ひ來らば、山藥、煑て掘るべし。

【字解】【一】四門館 即ち四門學、四方侯伯の子弟を教へる處。もと國子監に六學があつて、一に國子學、二に太學、三に四門學、四に律學、五に書學、六に算學といふので、後魏の太和中、はじめて學を四門に立て、因つて、以て名となし、隋では、始めて國子に隸し、唐でも之を承けた。そして、唐代では、四門博士が三人あつて、即ち其教授である。つまり、國子學は在京貴族の子弟を教へ、四門學は在外有爵者の子弟を教授したので、兩方を合せて學習院といつた様なものである。【二】城闕 詩經の鄭風子衿に挑兮達兮、在城闕兮とあつて、都會といふ義、必ずしも天子の都に限つた譯ではない。【三】輓軌 輓は輓端の横木、以て軌を縛するもの。軌は、輓端上の曲れる鈎衡。つまり、輓は輓、軌は馬を縛り付ける木。個個の物の用途性質といふ義に用ひてある。【四】擊拘 漢書鄒陽傳に「能く擊拘の語を越ゆ」といひ、文選西征賦に陋吾人之拘擊」といひ、即ち束縛といふこと。【五】戒轄 轄は車輛の鐵、即ちくさび。【六】薦紳 大官連中。【七】羅前閥 從前の門閥として著名である。【八】忍顛蹶 蹶きころぶことを我慢する。

【九】浩汗 分量の多いこと。【一〇】羅斧鉞 磨き立てた斧や鉞を羅列するが如く、光彩燦然たること。【一一】先生 韓愈自ら言ふ。【一二】閻窮巷 裏小路に佗住居をして居る。【一三】未得窺剽 剽は曲刀、剽は曲鑿、ともに板木を彫刻する道具。ここでは筆の働きに借りて言つたので、未だ先生の御作を頂戴しないといふこと。【一四】補剽 剽は剽に同じ、入墨をすること。別は足を切ること。ともに極刑の名。莊子の大宗師に「庸詎ぞ、夫の造物者の我が黥を息めずして、我が劓を補はざるを知らむや」とある。儒家から見ると、坊主は、髪を剃つたりするから、刑餘の罪人に等しい、その者の道を補ふやうなことを承りたいといふ義。【一五】排訐 悪くいふ、譏る。【一六】寧豁 寧は開達の貌、二字でからりとする貌。【一七】鬪株檠 列子に「吾が處るや、檠株に拘せらるるが如し」とあつて、その註に「斷木なり」とある。つまり、聖人の道を妨げる亂杭を一刀の下に切り棄てる。【一八】聽瑩 莊子の齊物論に「これ黄帝の聽瑩するところなり」とあつて、その註に「聽瑩は疑惑の貌」とある。【一九】救喝 喝は渴に同じ。【二〇】深樾 楚に兩木交陰の下を謂うて樾と爲す、即ち林。【二一】詭製 奇怪なる拵へ方。【二二】巾幘 頭巾と足袋、即ち服裝を汎稱す。【二三】含噦 噦は逆氣、胸が悪くて嘔吐を催す。【二四】得京官 元和元年六月、江陵より召し還されて國子博士となりしことを云ふ。【二五】喜見蝸 蝸はさそり、これに噬まれると腫れ上つて痛い。但し、南方に居らずして、北地に限るといふこと。そこで、これを見るを喜ぶといつたのである。蔣註に「酉陽雜俎、江南舊と蝸なし。隋元の初、一主簿あり、竹筒に盛りて、江を過ぐ、今、江南、往往之あり、俗呼んで主簿蟲と爲すと。蘇東坡、驛駄を聞いて筆を試むるに、余、黃州に謫居すること五年、今日、泗州を離れて北行す、岸上に驛駄、空籠を聲らす、意、亦た欣然たり。蓋し、此聲を聞かざること久し、退之の照壁喜見蝸も、虚語ならず、又嶺南より歸るに云ふ、既脱間蝸變、行有見蝸喜と。皆これを此に取る」といつて居る。【二六】鷓鴣 鷓は比翼の鳥、蟹は二頭相憑つて歩くといふ獸の名。爾雅に「南方に比翼の鳥あり、比せざれば飛ばず、その名これを鷓鴣といふ」とあり、孔叢子に「北方に獸あり、名を蟹といふ、蟹蟹を愛す。食して甘草を得れば、必ず齧んで以て遺る。蟹蟹を愛するに非ざるなり。その甘草を負うて以て走る、蟹は蟹蟹を愛するに非ざるなり、その足を假るが爲めなり。二獸も亦た蟹を愛するに非ざるなり。その甘草を得て、之に遺るが爲めなり。夫れ禽獸猶ほ比假して、相報ゆるを知るなり、況んや、士君子、名利を欲するものをや」とある。

【二七】而能 而は汝と訓すべし。【二八】安可揭 もたげ上げて之に報することも出来ない。【二九】狻猊 狻は猶に同じ。禮記に「鳳以て畜と爲す、故に鳥猶せず。麟以て畜となす、故に獸猶せず」とあつて、その註に「猶は鸞飛なり、狻は鸞走なり」とある。【三〇】飄戾 戾はもとる、違ふ。飄然として一般の人と趣か異にする。【三一】鷓鴣 鷓は鷓の屬、鷓は鷹に似て尾白く、善く鼠を捕へる。【三二】僕射 田季安が魏博節度使たるをいふ。【三三】胡羯 とともに蠻夷の名。【三四】相公 劉濟が幽州節度使たるをいふ。【三五】竹帛 書物、古しへは竹簡に書し、又帛に書せしが故に云ふ。【三六】篋中寶 例の薦紳先生の作つた送序の類をいふ。【三七】津筏 渡りに船といふ義。【三八】茹食 食ふ。【三九】藜藿 あかざ、わらび。【四〇】耕岱 土を耕起するを岱といふとあつて、即ち土を均らすこと。【四一】獫狫 詩經に載獫狫猶とあつて、爾雅に「長喙を獫といひ、短喙を狫といふ」とある。即ち獵犬で、口先の長い短いに因つて區別する。【四二】山藥 山の芋。

【題義】文暢に就いて、韓愈は、別に送序を作つたことがあるので、それは貞元十九年、愈が四門博士であつた時である。その文は、文章軌範にも載せてあるから、讀者諸君は、先刻すでに御承知の事であらう。文中に「浮屠師文暢、文章を喜び、その天下に周遊する、凡そ行くあれば、必ず其志すところを詠歌せむことを求む、貞元十九年春、將に東南に行かむとす。柳君宗元、これが爲に請うて、その装を解けば、得るところの詩敍累百餘篇を得たり」とある。蔣註には「柳君宗元、これが詩を作らる、然れども、宗元の詩、今傳ふるなし」とあるが、柳宗元が此時詩を作つたといふことは、韓愈の送序には書いてないので、これは、一時檢點の誤であらう。その後、凡そ三年を経て、元和元年、韓愈は、京師に召し還されて、國子博士となり、元和四年の六月、都官員外郎に改められて洛陽に赴任す

るまでは、長安に居たから、その間に、此詩を作つたので、因つて、前に送序を作りし後、種種の閱歷を爲し、ここに又文暢の行を送るといふ處から、前後の對照を取つて、自己の感慨を寓したのである。それから、柳宗元の文集に、送文暢上人登三臺遊三河朔序の一文があるが、宗元は、永貞元年十月、永州司馬に貶せられ、元和十年、例に依つて京師に召され、やがて、柳州の刺史となるまで、凡そ十年間は、永州に居たのであるから、無論、この序も永州に於て作つたのである。さうすると、文暢は、貞元十九年に東南に旅行するといつて、長安を出てから、各處をめぐり、元和二三年の頃、永州にも往つて、柳宗元に遇ひ、それから、長安に歸つて、五臺竝に河朔の方へ往くといつて、その序を作つて貰ひ、幾月をか經たる後、長安に来て韓愈に遇ひ、仍つて、この詩を作つて貰つたものと見える。

【詩意】むかし、予が四門博士として、都に在官した頃、朝早く、一人の坊主が尋ねて來た。聞いて見ると、名を文暢といひ、もと吳國の人で、若い時には、都會の學校で勉強をして居たが、その中にあらぬ方にそれて、佛學の根源を窮め、略ぼ佛理の本末を知り、その嚴重なる戒律に束縛されて、本性の眞を屈することを厭はず、又雲水の行脚を爲す爲に、車の轄を締めて遠地向つて出發せむとし、そこで、吾が方に來たのである。都に名高い貴顯を始め、文筆の士などは、文字上の関閥をなし、聲譽赫赫として、なかなか偉く構へて居るから、毎毎さういふ人に送序を作つて貰はうといふので、滅

多に書かないのを、根氣よく數ば足を運び、顛び蹴くことを忍んで、毎日催促に出かける。さういふ風にして、處處で作つて貰つた詩文は、段段たまつて、今では十餘卷となり、その分量も多く、且つ磨き立てた斧鉞を羅列するが如く、光彩燦然たるものがある。ここに、韓愈先生は、陋巷に佗住居をして居られ、未だ其文章を頂戴しないのは、まことに遺憾至極である、そして、先生は儒家の大道を知つて居られるから、刑餘の人に等しいと稱せらるる吾吾佛徒の爲になる様なことを教へて戴きたい、今まで手に入れたのは、この通りだといつて、囊中の文を取り出して、それを讀み上げるのを聞くと、いかにも清越である。そこで、予は、文暢に答へて、さういふ譯なら、書いて遣るから、少し待つて呉れといふので、浮屠文暢を送る序といふものを書き上げたが、佛教の事は、性來大嫌であるから、餘程これを譏り、そして、全文の大意たるや、上にしては、古しへ國家といふものが出来上つた時分、聖君賢主が賞罰を施して人民を督勵した所以を論じ、下にしては、今佛教を信じて居る有り難屋の迷つたり惑つたりして居る胸を推し開き、そして、聖人の大道を妨げるところの亂杭をさつぱりと一刀の下に截つて仕舞ひ、つまり、佛を排し、儒を進めるやうにせねば成らぬといふ旨意を述べた。これが、普通の坊主ならば、腹を立てるに相違ないが、流石に高僧と稱せられる文暢のことであるから、わが言ふところを聞き分けて、大分腑に落ちた様な風で、たとへば、渴者が水を飲んで喉を濕すといふ様に、非常に有り難く感じた様に見えた。かくて、文暢は、浮世の風塵を追うて、一たび都門を出

でてより、知らず、識らず、時日を経過したことは、亂れたる髪の毛の數ふるに勝へざるが如くであつて、その間に、わが一身にも、非常なる變化が起り、三年の間、荒れはてたる嶺南の地に謫せられ、陽山の縣令として、森の奥に住居し、土地の租税として徴收せるは、いづれも見たことの無いやうな物品ばかり、その地の人民の服装も、變てこな拵へ方であつて、すべてが目慣れぬものである處から、幽窮の中に在つて、話し相手もなく、いろいろ考へると、胸が悪くなつて、嘔吐を催すばかり。ところが、幸にも、國子博士となつて、都に召し還され、燈火を壁にさし付けて、蝸を見て、嬉しく思ふ位。まして、むかしの朋友に逢ふと、鷓鴣と稱する鳥が翼を並べて飛ぶが如く、蟹といふ獸が二頭相馮つて歩くが如く、いつまでも、相比し、相竝びて、末長く一處に居たいと思つて居た。さはれ、長安の都に於ては、非常に戸數も多いし、朋友も澤山ある處から、相離れない様にといつても、さうは行かず、今日は誰の葬禮、今は某の慶事といふので、必ず出かけて行かねばならない。ここに、文暢は、よくも勤めて來訪されたので、その恩惠の厚いことは、なかなか、掲げて報ゆることも出来ぬ位である。今しも、聖天子が新に即位されたばかり、その恩澤は、飛禽走獸にも及ぶ程であるのに、如何なれば、君は、自ら暇あらず、ことさらに世人と違つて、鷹の如く、鷓の如く、矢鱈に飛び去りたがるのであるか。君の行く方には、魏博節度使田季方が北門を領して、その威徳は、胡羯を壓服するに足るべく、幽州節度使劉濟は、幽都を鎮して、その勳功は、竹帛の上に耀いて居る位。さういふ

處に君が行かれると、或は、宴會を催し、酒筵の上に於て、若い女どもに舞はせることもあるべく、或は狩獵を催し、邊地の月の皎皎たる下に、羣がる騎馬を以て獵場を圍むこともあるべく、いづれにしても、非常な歡迎を受けられることであらう。それから、君が今まで極力蒐集して篋中の寶となる例の送別の詩文を、一一開いて、僕射や相公に進めたならば、渡りに舟を得たるが如く、何か然るべきを役目でも仰せ付けるかも知れない。かくて、君は、裘馬に富む様な身分となれば、坊主の本色を無くして、精進三昧、藜や蕨ばかり食つて居るやうなこともなく、その方が、人間味があつて、却つて、善いかも知れない。これに反して、予は、今次召還された天恩に報ずるを得ば、それで、思ひ置くことが無いから、病氣を言ひ立てて歸農し、蓬茅の中に此身を置き、耕作を以て世を終り、その間、暇でもあれば、獵犬でも引き連れて、山林を跋涉したい。その時、君が浮世の事をうるさく思つて、尋ねて来て呉れたならば、僕射や相公の如き大した御馳走は到底出来ないが、せめては、山の芋でも掘つて、それを煮て差し上げやう。

【餘論】李光地は「先づ、文暢の言を求めて、當日序を作りしを敍し、古義を極陳し、以て其惑を破る、即ち今集中文暢を送るの序、是れなり。中ごろ、陽山に貶せられ、自ら還つて親識を見るを幸とし、而して、僧の往來、尤も密。後、乃ちその墨を逃れて來り歸するを勸め、詩文を以て縁となし、以て自ら致すに足り、且つ與に異日相從ふの約を爲す」といひ、愈場は「公の諸長篇、險韻を用ひて、

すべて傍借せず、正に謂はゆる巧を見難きに因る、獨り張十八に贈るの一首のみならざるなり、但だ江字韻、尤も窄しと爲すのみ」といひ、朱竹垞は「一味逞粗、硬然たる氣力、亦た驅使するに足る」といひ、何義門は酒場舞閨姝以下の數句を評して「數語甚だ鄙、恐らくは、却つて聰明道理を識る者に笑はれむ」といつたが、これは、わざと文暢を揶揄したので、さう眞面目に攻撃するにも及ぶまいと思ふ。なほ乾隆御批には「北道主人に就いて、歌動の語を爲す、純ら是れ聲色貨利の事、昌黎の胸次、何等乃ちこの腐鼠の嚇を作すか。その異學を惡むこと、俗情を鄙むより甚だしきに縁るか」とあるが、無論、韓愈は、坊主の世を捨てて清淨寂滅を事とするを惡み、それよりも、人は人らしくせねばならぬといふので、仍つて、此に及んだのであらう。

答張徹

張徹に答ふ

辱贈不知報。我歌爾其聆。
首敍始識面。次言後分形。
道途縣萬里。日月垂十齡。
浚郊避兵亂。睢岸連門停。

辱く贈らるるも報ゆるを知らず、我歌はむ爾其れ聆け。
首には始めて面を識ることを敍し、次には後に形を分
道途萬里縣に、日月十齡に垂んとす。
浚郊、兵亂を避け、睢岸、門停を連ぬ。

肝膽一古劍。波濤兩浮萍。
 漬墨竄舊史。磨丹注前經。
 義苑手祕寶。文堂耳驚霆。
 暄晨躡露鳥。暑夕眠風樞。
 結友子讓抗。請師我慚丁。
 初味猶噉蔗。遂通斯建瓴。
 搜奇日有富。嗜善心無寧。
 石梁平佺佺。沙水光泠泠。
 乘枯摘野豔。沈細抽潛腥。
 遊寺去陟巘。尋徑返穿汀。
 緣雲竹竦竦。失路麻冥冥。
 淫潦忽翻野。平蕪眇開溟。
 防泄塹夜塞。懼衝城晝扃。

肝膽一古劍、波濤兩浮萍。
 墨を漬して、舊史を竄し、丹を磨いて、前經に注す。
 義苑、祕寶を手にし、文堂、驚霆を耳にす。
 暄晨、露鳥を躡み、暑夕、風樞に眠る。
 友を結んで、子、抗に譲り、師を請うて、我、丁に慚づ。
 初味、猶ほ蔗を噉ひ、遂に通じて斯に瓴を建つ。
 奇を搜つて日に富めるあり、善を嗜んで心寧きなし。
 石梁、平かにして佺佺たり、沙水光つて泠泠たり。
 枯に乗じて、野豔を摘み、細を沈めて、潛腥を抽く。
 寺に遊んで去つて巘に陟り、徑を尋ねて返つて汀を穿つ。
 雲に縁つて、竹竦竦たり、路を失うて、麻冥冥たり。
 淫潦、忽ち野に翻り、平蕪、眇として溟を開く。
 泄るるを防いで、塹、夜塞ぎ、衝を懼れて、城、晝扃さす。

及去事戎轡。相逢宴軍伶。
 觥秋縱兀兀。獵旦馳駟騶。
 從賦始分手。朝京忽同舫。
 急時促暗棹。戀月留虛亭。
 畢事驅傳馬。安居守窻螢。
 梅花灞水別。宮燭驪山醒。
 省選逮投足。鄉賓尙摧翎。
 塵祛又一摻。淚背還雙熒。
 洛邑得休告。華山窮絕陁。
 倚巖睨海浪。引袖拂天星。
 日駕此廻轄。金神所司刑。
 泉紳拖修白。石劍攢高青。
 磴蘚澁拳跼。梯飈颭伶俜。

去つて、戎轡を事とするに及び、相逢うて軍伶を宴す。
 觥秋、縱に兀兀たり、獵旦馳せて駟騶たり。
 賦に從つて、始めて手を分かち、京に朝して忽ち舫を同うす。
 時を急にして、暗棹を促し、月を戀うて、虛亭に留まる。
 事を畢りて、傳馬を驅り、居に安んじて、窻螢を守る。
 梅花灞水に別れ、宮燭、驪山に醒む。
 省選、足を投ずるに逮び、鄉賓、尙ほ翎を摧く。
 塵祛、又一たび摻し、涙背、還た雙熒。
 洛邑に休告を得、華山に絶陁を窮む。
 巖に倚つて海浪を睨し、袖を引いて天星を拂ふ。
 日駕、此に轄を廻し、金神、刑を司るところ。
 泉紳は、修白を拖き、石劍は、高青を攢む。
 磴蘚澁にして拳跼し、梯飈颭いで伶俜たり。

悔狂已咋指。垂誠仍鐫銘。
 蛾豸忝備列。伏蒲愧分涇。
 微誠慕橫草。瑣力摧撞筵。
 疊雪走商嶺。飛波航洞庭。
 下險疑墮井。守官類拘囹。
 荒餐茹獠蠱。幽夢感湘靈。
 刺史肅著蔡。吏人沸蝗螟。
 點綴簿上字。趨跲閣前鈴。
 賴其飽山水。得以娛瞻聽。
 紫樹雕斐蠶。碧流滴瓏玲。
 映波鋪遠錦。挿地列長屏。
 愁狄酸骨死。怪花醉魂馨。
 潛苞絳實坼。幽乳翠毛零。

狂を悔いて已に指を咋み、誠を垂れて仍ほ銘を鐫る。
 豸を蛾うして、列に備はるを忝うし、蒲に伏して涇を
 微誠、横草を慕ひ、瑣力、撞筵を摧く。「分つを愧づ。
 疊雪、商嶺に走り、飛波、洞庭に航す。
 險を下つて井に墮つるかと思ひ、官を守つて囹に拘は
 荒餐、獠蠱を茹ひ、幽夢、湘靈を感ず。「るに似たり。
 刺史、著蔡を肅し、吏人、蝗螟を沸かす。
 簿上の字を點綴し、閣前の鈴を趨跲す。
 賴に其れ山水を飽し、以て瞻聽を娛ましむるを得たり。
 紫樹、雕つて斐蠶たり、碧流、滴つて瓏玲たり。
 波に映じて遠錦を鋪き、地を挿んで長屏を列す。
 愁狄、骨を酸して死す、怪花、魂を酔はせて馨し。
 潛苞、絳實坼け、幽乳、翠毛零つ。

赦行五百里。月變三十莫。
 漸階羣振鷺。入學誨螟蛉。
 萃甘謝鳴鹿。疊滿慚罄餅。
 問問抱瑚璉。飛飛聯鶴鶴。
 魚鬣欲脫背。虬光先照硯。
 豈獨出醜類。方當動朝廷。
 勤來得晤語。勿憚宿寒廳。

赦行五百里、月變三十莫。
 階に漸みて、振鷺を羣り、學に入つて、螟蛉に誨ゆ。
 萃甘くして鳴鹿を謝し、疊滿ちて罄餅を慚づ。
 問問として、瑚璉を抱き、飛飛として、鶴鶴を聯ぬ。
 魚鬣、背を脱せむと欲し、虬光、先づ硯を照らす。「すべし。
 豈獨り醜類を出づるのみならむや、方に當に朝廷を動か
 勤めて來つて晤語を得、寒廳に宿するを憚る勿れ。

【字解】一 其聆 聆は聞く。二 始識面 北史に「齊の神武、太原より來り朝し、宋遊を見て曰く、かつて其名を聞く、今日はじめて其面を識る」とある。三 分形 曹子建の求自試表に「誠に國と分形同氣、憂患これを共にするなり」とある。四 縣 是るかに。五 十齡 貞元十二年丙子より元和改元丙戌に至るまでを云ふ。六 浚郊 古しへの衛邑の名、唐の汴州。時に貞元十五年、董晉の死後、宣武軍亂れて、留後陸長源を殺せしことを云ふ。七 睢岸 徐州に至つて張建封に依りしこと。前の此日足「可惜の詩中に、僕射南陽公、宅我睢水陽」とある。八 門停 停は居に同じ。九 漬墨 墨を筆に含ませる。一〇 竄舊 史 古しへの史書などに句讀を切り、文字の誤を正し、又自説などを書き入れをする。一一 磨丹 朱墨を磨る。一二 義苑 義は經義、つまり古人の經解を集める。一三 雲鳥 露に濡れた靴。一四 風樞 風の吹き入る窓。一五 讓抗 晉書の羊祜傳に「祜、出でて南夏に鎮し、陸抗と相對し、使命交通す。祜、これに藥を饋る。抗、これに服して疑ふ心なし。人、或は抗を諫む、抗曰

く、羊祜豈に人を醜するもの」とある。【三六】慚丁。左傳襄公十四年に「はじめ、尹公佗、射を庚公差に學ぶ、庚公差、射を公孫丁に學ぶ。二子、公を追ふ、公孫丁、公に御たり。尹公佗曰く、子は師たり、我は遠し」とある。【三七】初味。晉書顧愷之傳に「甘蔗を食ふ毎に、恆に尾より本に至る、曰く、漸く佳境に入る」とある。【三八】建瓴。漢書高帝紀に「譬へば、猶ほ高屋の上に居て、瓦水を建つるがごときなり」とあり、如淳の註に「瓴は水を盛る瓶なり」とある。【三九】石梁。石橋。【四〇】促促。長き貌。【四一】乘枯。枯木で編んだ筏に乗る。【四二】野花に同じ。【四三】沈細。目の細かい網を水に投げ下す。【四四】抽溜。水中に匿れて居る魚を取り上げる。【四五】緣雲。雲に依る。【四六】淫潦。長雨の後の洪水。【四七】開溟。溟は大海、水色の黒きが故に溟といふ。【四八】壘。溝渠の水門を塞ぐ。【四九】懼衝。水勢の衝突を恐れる。【五〇】事戎轡。張建封の手引に依つて節度推官に任ぜられしことを云ふ。【五一】軍伶。軍樂隊。【五二】縱兀兀。兀兀たる思を縱にして痛飲する。【五三】駟調。勢よき貌、詩經に駟調牡馬とある。【五四】從賦。張徹が進士の試験を受ける爲に上京せしをいふ。【五五】同船。船は舟の窓あるもの。この年冬、韓愈は、徐州の従事を以て京師に朝し、仍つて、張徹と途中で會して、それから舟で同行したと見える。【五六】暗棹。暗夜に舟を棹す。【五七】虚亭。人なき亭臺。【五八】傳馬。傳は驛、即ち宿つぎの馬。十六年春、朝正の事畢りて、彭城に歸ることをいふ。【五九】守窻。螢を集めて讀書した車胤の故事を用ふ。【六〇】瀟水。前にも見えた、長安の近郊に在る川。【六一】宮燭。驪山には離宮があつて、そこに點した燈火。【六二】醒。宮人の夢が醒める、即ち朝早起時分。【六三】省選。禮部省の選抜試験を行ふ。【六四】投足。足を投じて其中に入る、即ち試験場に入る。【六五】鄉賓。即ち鄉貢進士。【六六】摧翎。鳥が羽を摧くといふのは失意の極で、こゝでは落第せしことを云ふ。【六七】塵祛。塵にまみれた袂。【六八】一揆。揆は擯る、身に著ける。【六九】雙燄。兩方の目が涙に輝く。【七〇】洛邑得休告。貞元十八年、韓愈が四門博士となりし後、暇を願うて洛陽に歸省した時の事を指す。【七一】絕陸。爾雅に「山は絶陸」とあつて、郭璞の註に「連山中斷するを陸といふ」とある。【七二】日駕。日の車、前にも見えた日御に同じ。【七三】廻轄。轄はくさび、車を廻すといふこと。山が非常に高いから、太陽も此に來ると、車を廻して退却するといふ意。【七四】金神所司刑。華山は五嶽の中の西嶽で、その神は少昊、金神、そして西方は刑を司る故に云ふ。【七五】泉紳。瀑布が帶を垂らした様になつて居る。【七六】

修白。長く白い。【七五】磴。苔を帯びたる石段。【七六】漣。ゆらりと滑べる。【七七】拳跼。詰屈して行き難き貌。【七八】梯。ゆらゆらと風に動く繩梯子。【七九】颯。うごく、ゆらめく。【八〇】俗傳。行いて正しからざる貌。【八一】咋指。指を噛む。【八二】鏑銘。心魂に銘じて刻みつける。李肇の國史補に「韓愈、奇を好む、客を華山の絶峰に登り、返るべからざるを度り、乃ち遺書を作り、狂を發して慟哭す。華陰の令、百計これを取らしめ、乃ち下る」とあるが、全く實事であるか、さなくば、この詩句に本づいて捏造した小説であらう。【八三】峨豸。説文に「獬豸獸は、牛に似て一角あり」といひ、異物志に「北荒中に獸あり、獬豸と名づく。性、曲直を分つ。人の鬪ふを見れば、直ならざる者に觸れ、人の争を聞けば、正しからざる者を咋む。楚王、かつて此獸を獲、因つて、其形に象り以て衣冠を製す」といひ、漢官儀に「獬豸獸、性、不直に觸る、故に、執憲者、角形を以て冠となす」といつて居る。獬豸の付いて居る高い冠を戴くといふことで、貞元十九年、侍御史となりしことをいふ。【八四】伏蒲。漢書に「史丹、直に臥内に入り、頓首して青蒲の上に伏す」とあつて、應邵の註に「青を以て地を規するを青蒲といふ」とある。蒲上に身を伏せ、面を犯して天子を諫める。【八五】分涇。涇は濁流、渭の清きに對していふ。分涇とは、涇渭と分別して清濁を明かにすること。詩經に涇以渭濁、湜湜其地とある。【八六】橫草。漢書終軍傳に「軍に橫草の功なし」とあつて、顔師古の註に「言ふは、草中を行き、草をして偃臥せしむるなり」とある。【八七】撞筵。筵は草の莖、鐘を撞くに草莖を以てしても、何の効果もない。説苑に「子路、趙襄子に對へて曰く、天下の鳴鐘を建てて、之を撞くに筵を以てす、豈に能く其聲を發せむや」とある。【八八】拘囹。囹圄即ち獄中に囚へられる。【八九】獠。獠は種族の名、北史に「獠は南蠻の別種、名字なく、長幼の次第を以て之を呼ぶ」とある。蟲は蟲。【九〇】湘靈。即ち湘君、堯の二女、舜の妻で、舜を追うて洞庭の邊に來り、舜の死を聞いて、そこで死んだ。【九一】著蔡。著はめとき、蔡は龜、ともに卜筮を爲すに用ふ。史記の龜策傳に「著、千歳なれば、一本百莖、下に神龜あつて之を守り、上に青雲あつて之を覆ふ」とあり、家語に「臧氏の家を守龜あり、名づけて蔡といふ」とあり、袁彦伯の三國名臣贊に思同著蔡、運用無方とある。【九二】蝗。蝗はいなこ。螟はうんか、稻を害する蟲。左傳隱公五年、螟の杜預註に「蟲の苗心を食ふもの」とある。【九三】簿上字。簿書の文字。【九四】閭前鈴。役所に出頭すると、鈴を鳴らして著到を報ずる。後漢書の周行傳に「又鈴下を問ふ」とあつて、その註に「漢官儀に、

鈴下侍閣辟車、これ皆名を以て自ら定むるものなり」とあり、晉書の羊祜傳に「出でて南夏に鎮す、鈴閣の下、侍衛、十數人に過ぎず」とある。【七】 斐璽 重なり合ふ。【六】 瓊玲 玉の響く聲。【五】 愁狢 狢は雌、獼猴に似て大、亦た善く啼く。楚辭に猿狢羣嘯兮虎豹嘯とある。【八〇】 酸骨 骨を酸にする。【八一】 潛苞 見えぬ葉かげに苞に包まつて居る。【八二】 幽乳 濕氣を帯びたるをいふ。【八三】 翠毛 苔をいふ。【八四】 五百里 陽山より江陵に量移されたことをいふ。【八五】 三十莢 帝王世紀に「堯時に天子となる、萸莢、庭に生じ、帝の爲に歴を成す、一日に始まり、一莢を生じ、月半に至つて十五莢を生じ、十六日、一莢を落ち、晦日に至つて盡く。小月には、莢厭して落ちず」とある。即ち三十個、二年半の義。【八六】 漸階 紫宸殿の階に進む。【八七】 振鷺 詩經に振鷺于飛とか振振鷺とかあつて、官員の行列をなすこと、これは召し還されて國子博士となりしことを云ふ。【八八】 螟蛉 揚子法言に「螟蛉の子、瘞れて裸羸に逢ひ、これを祝して曰く、我に類せよ、我に類せよ、と。久しうして之に肖る」とあり、陸璣の蟲魚疏に「螟蛉は桑上の小青蟲、螺は羸土蜂、蜂に似て小腰、桑蟲を取り、これを木空中に負ひ、七日にして化して其子となす」とある。【八九】 萃甘 詩經の鹿鳴に呦呦鹿鳴、食野之萃とあるに本づく、前にも見ゆ。【九〇】 鼎滿漸馨餅 詩經に餅之聲矣、維鼻之恥とあつて、疊は大なる器、餅は小なる器。【九一】 問問 輝く貌。【九二】 瑚璉 論語に孔子が子貢を稱して瑚璉だといつたことが見えて居る。【九三】 鶴鶴 詩經に鶴鶴在陂、兄弟急難とあり、爾雅に鶴鶴雛渠とあつて、郭璞の註に「雀の屬なり、飛べば鳴き、行けば搖く」とある。張徹の墓志に「徹の弟復、亦た進士に擧げらる」とあつて、この頃、二人ともに試験の準備をして居たのである。【九四】 魚蠶欲脫背 魚の鱗が取れ、變化して龍となる。【九五】 虹光 刀の光をいふ。【九六】 照硯 砥石で磨けば愈よ光る。【九七】 醜類 醜は同類。【九八】 晤語 晤は對面する。【九九】 寒廳 さびしき官舎。

【題義】 張徹は、前にも見えて居た人であつて、もと韓愈の門下の士、又その從子の婿である。韓愈は、後に其墓志を撰して「徹、進士に擧げられ、殿中侍御史に遷り、幽州節度判官となり、軍亂るるや、賊を罵つて死す」とあつて、なほ其詳は唐書に載せてある。はじめ、張徹が韓愈に詩を贈つたから、韓愈は、之に答へて、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】 折角、君から贈詩を辱うしたから、何か之に報ゆるところが無くてはならぬ。そこで、我は一つの歌を作つたので、どうか君聞いて呉れ。その歌は、最初君と相見て知り合に成つたことを敘し、それから、君と別れ別れになつた今日までの経過を述べ、述べるつもりである。地を以てすれば、道途萬里を隔て、時を以てすれば、日月、すでに十年にもならうとする。その間の事であるから、隨分長くなつて聞きづらいが、マア辛抱して聞いて呉れる。その頃、われは、汴州の兵亂を避けて、睢水の流れて居る彭城に來り、君とは門を連ねて、鄰り同士であつて、その時、はじめて君を知つたのである。子の君に於ける、肝膽相照らして、殆んど一把の古劍の如く、そして、予とともに、波に揺らるる浮草の定めなきが、偶然ここに出合つたやうなものであつた。君は、筆に墨を付けて、古い歴史類に書き入れをしたり、朱墨を磨つて、前代の經書に註釋を加へたりして、専ら經史を研究して居た。かくて、君は經義の苑に立ち入つては、古人が奥義を極めた祕寶を手にし、文章の堂に入つては、高名雷の如く、人の耳に轟き渡る位。しかし、勉強ばかりしても居られないから、暖かい朝には、露に靴を濡らして吾が家に來り、暑い夕には、風の吹き入る窓に眠る爲に、君の住居を訪ふこともあつた。君の如き善き友達はないと思つて、頻りに平等の交際を求めたが、君は、其才陸抗に譲るといつて謙遜し、予に師たるを請はれたが、予は公孫丁に及ばぬことを愧づるばかり。予の言ふことは、初めこ

そ詰まらないが、後には味が出て来て、丁度甘蔗を噛むやうであるが、君は、早くも之を悟り、たとへば、屋上から瓶の水を傾けるが如く、まことに、思ひ残すことが無くて、ひどく嬉しかった。そこで、珍らしい文字を捜がして、日ごとに知識を増し、又善を嗜んで、之を身に行ひ、心に少しの暇もない位。しかし、時は打連れ立つて、郭外に出かけたこともあるので、石橋は、平に長く、その下には、沙をひたして居る水が冷冷として流れる。そこへ、枯木を編んだ筏を浮べて、岸に咲きたる野花を摘み、網を打つて、水底に潜める魚を取つたこともある。又、時として、古寺を訪はむとして、山に上り、歸途には、捷路を尋ねて、元の沙汀に出でむとし、ふと道を誤り、雲に縁つて、疎疎たる竹林に入り、麻畑の暗い處に迷ひ込んで、出るにも出られず、大に閉口したことがある。この邊は、黄河に近いから、長雨の名残の洪水が、なほ野に翻り、そして、平蕪の處は、渺渺として、さながら大海の如くであつた。そこには隄があつて、水の漏れ出ることを防ぐ爲に、夜になると、水門を塞ぎ、又、水勢の衝突するを恐れて、晝でも城門が閉ぢてある。かういふ處をうろろした時には、お互に随分困まり入つたことであつた。兎角する内に、予は節度推官に任せられたから、前の様に閑散な身でないやうになり、時たま、君に逢うて軍樂隊の居る前で酒を飲んだ位な事であつた。それから、秋の頃、田獵を畢つて宴會を催される其席上に於て、君に遇つたこともあつたが、大きな杯を手にし、兀兀たる思を縦にして、十分痛飲し、あくる朝は勢よく馬を馳せた。その後、君は、都に出

て試験に應ずる爲に、暫く手を分つこととなつたが、折ふし、予も公用を帯びて上京することがあつたから。途中で遇つて、舟を同じうすることになつた。二人とも、急ぎの旅であるから、船頭を促して、暗夜にも舟を棹させたが、今宵は月が好い、明日急げば取り返しも付くからといつて、虚亭に宿して、良夜の眺を恣にするといふ様な風流もあつた。かくて、上京の後、予は、用事も片付いたからといふので、驛馬を馳せて徐州に還らむとし、君は試験準備の爲に、窓の螢を集めて、これから一勉強するといふことに成つた。そこで、君は、梅花の開く頃、態態予を瀟水まで送られたが、朝早く、驪山の宮殿に於ては、燭火わづかに盡きて、宮人の夢將に醒めむとする時であつた。それから、君は愈よ試験場中に足を投げ入れた處が、折角の郷貢進士も、鳥が羽を摧いた様に、落第して仕舞ひ、朝衣を着ける筈の目的が外れて、塵に塗れた衣物を執つて、今一度、身に著けねばならぬこととなり、涙の爲に、兩の背も輝いて見えるばかり、頻りに慟哭して、その不運を歎き侘びて居た。その時、予は段段閱歴を重ね、休暇を貰つて、洛陽に歸省して居たが、幸な折だといふので、絶險を躡んで、華山に登攀を試み、絶頂なる巖に倚りかかつて、浪だつ雲の海を眺め、袖を引いて、天上の星を拂ひ落し、流石にこの山は渡る日の影も、かざろひて、車を廻すかと疑はれる程の高さで、西方を支配し、秋の神として刑罰を司るといふのも、尤もな事と思つた。山中處處に瀑布があつて、帶の如き泉は、眞白に長く、劍の如き石は、攢まつて高く青い。それから、降り道は、まことに危険で、苔むした

る石段は、ぬらぬらと滑つて、なかなか足が運ばれず、風にゆらめく繩梯は、ひらひらとして、容易に進むことが出来ない。そこで、かかる冒険を敢てした少年の狂氣を悔いて、おもはず指を噛み、君子は危きに近よらずといふ誠は、一刻も忘れてならぬものと、深く心に銘した。その内に、侍御史に任せられ、獬豸の高い冠を戴いて、朝臣の員に備はり、蒲に伏して直諫し、自分だけは、清んだ水であつても、同輩の濁りを分たねばならぬことを心に愧かしく思つた。もとより、赤誠を盡して、草野の中に横はつても、君の爲に報效を致さうと思つて居るが、何分微力である處から、草莖を以て鐘を撞けば、やがて擗けて仕舞ふと同じである。兎角する内に、罪を得て、陽山に謫せられ、雪中、商山を踰え、春の波起つ頃、洞庭を渡り、險を下れば、井戸の底に落つるかと思はれ、官を守つて遠地に居るは、さながら、囚人の様な氣がして、堪まらなかつた。もとより、蠻地であるから、住民は、蟲などを取つて食となし、貶謫の身は、夢の中にも湘靈の事を感し、淋しき思は愈よ増すばかりであつた。その地の刺史は、卜筮をなして、穀物の實のるを祈るのが本職の様になつて居るが、役人どもは、そんな事とは知らず、蝗螟でも出ると、鼎の沸いた様に騒ぐ。すべて下役人の仕事は、帳簿の上の整理をすることであつて、出入の際には、閣前の鈴を振り鳴らして、長官に知らせるやうになつて居る。こんな處で、こんな事をして居ては、まことに詰まらぬが、唯だ一つの樂は、飽くまで、山水の勝を探つて、耳目を喜ばしたことである。紫色の木は、浮き彫りをした様に重り合ひ、碧色の綺

麗な水は、玉の如き音を發して流れて居る。その木が波に映じたのは、錦を鋪き詰めたのを遠くから眺めるやうであるし、地に挿んだ處は、長い屏風を立て列ねたるが如く、その山水の間には、猿が居て、悲しき聲に骨までも痛めて死し、見なれぬ花は、人の心魂を酔はしむるまで、高い香氣を發して居る。葉がくれには、苞が破れて、中から赤い實が顯はれ、濕地には、苔がへばり付いて居る。兎角する中に、予は、量移されて、江陵に徙ることとなり、又ぞろ、五百里の長旅を爲し、それから、凡そ三十ヶ月を経て、やつと、都に還ることとなり、天子の階に進みて、鸛鷺の班に連り、そして、國子學に於て、蜂が蛆蟲に向つて、我に類かれ我に類かれといふ様に、子弟どもを教育することとなり、呦呦たる鹿が友を呼び集めて、萃といふ草を食ふ様に、専ら同役と共に其事に當つて居るが、折角、生徒を仕立て上げやうといふ志を遂げず、大きな疊が一ぱいでも、小さな餅に分つことの出来ないやうなのは、まことに、愧づべきことである。ここに、君は、問問たる珊瑚の器を抱いて居るから、及第して偉らい者に成るは、もとより言を俟たず、そして、飛飛たる鶴鶴の如く、令弟も一處に試験の準備をして居られるさうで、随分苦しいことであらう。さはいへ、君は、もとより前途多望の身で、やがて、魚の背の鰭が取れて龍に變化するが如く、劍を砥石にかければ、愈よ光を出すと同じで、やがて一朝志を得て、仕官したならば、ひとり同類に抜き出づるばかりでなく、その名聲は、忽ち朝廷を震動させることと思ふ。そこで、逢つて御話をすれば、幾分か御爲めに成ることもあらうから、

見苦しい官舎ではあるが、ここに泊ることを憚らず、どうか、是非尋ねて來られむことを希望する次第である。

【餘論】筆墨閒録に劉涓の言を擧げて「張徹に答ふる詩、尤も奇麗、梅花灞水の一對、極めて風味あり」といひ、蔣之翹は「退之、張徹に答ふるの詩、綦組特に工、雅緻、靡靡たる者の比に非ざるなり、思を運して、更に精鑿を加へしむれば、是れ潘陸と彷彿たるべし」といひ、顧嗣立は「この詩、通首對句を用ひ、しかも、生峭の筆を以て之を行る、便ち律詩と大に別、少陵、橋陵の詩、便ち是れ此種」といひ、乾隆御批には「排律、拗體を用ふ、亦た是れ變格、調古にして詞豔、徒に敘致の工のみならず」とある。

薦士

士を薦む

周詩三百篇、雅麗理訓誥。周詩三百篇、雅麗にして訓誥を理む。曾經聖人手、議論安敢到。かつて、聖人の手を經たり、議論安んぞ敢て到らむ。五言出漢時、蘇李首更號。五言は、漢時にいで、蘇李首めて號を更む。東都漸瀾漫、派別百川導。東都、漸く瀾漫、派別して百川導く。

建安能者七、卓犖變風操。建安、能くする者は七、卓犖として風操を變す。逶迤抵晉宋、氣象日凋耗。逶迤として、晉宋に抵り、氣象、日に凋耗。中間數鮑謝、比近最清奧。中間、鮑謝を數ふ、近きに比すれば最も清奧。齊梁及陳隋、衆作等蟬噪。齊梁と陳隋と、衆作、蟬噪に等し。春を搜つて、花卉を摘み、沿襲して、剽盜に傷らる。國朝盛文章、子昂始高蹈。國朝、文章盛なり、子昂、始めて高蹈。勃興得李杜、萬類困陵暴。勃興して、李杜を得たり、萬類、陵暴に困む。後來相繼生、亦各臻閩奧。後來、相繼いで生じ、亦た各閩奥に臻る。有窮者孟郊、受材實雄鷲。窮者孟郊あり、材を受くる實に雄鷲。冥觀洞古今、象外逐幽好。冥觀、古今を洞し、象外、幽好を逐ふ。橫空盤硬語、安帖力排冪。空に横はつて、硬語を盤し、安帖して力排冪。敷柔肆紆餘、奮猛卷海潦。敷柔、紆餘を肆にし、奮猛、海潦を卷く。榮華肖天秀、捷疾逾響報。榮華、天秀に肖たり、捷疾、響報に逾えたり。

行身踐規矩。甘辱恥媚竈。身をおこな行なうて規きく矩ふをふ踐み、辱じよくをあまん甘びじて媚竈せむことを恥づ。
 孟軻分邪正。眸子看瞭眊。孟まう軻か、邪じよ正せいをわかち、眸ぼう子し、瞭わう眊を看みる。
 杳然粹而清。可以鎮浮躁。杳えう然ぜん、粹すみにして清せい、以もつて浮躁ふさうを鎮すべし。
 酸寒溧陽尉。五十幾何耄。酸さん寒かんたり溧陽りやうの尉、五ほ十と、幾なんんど何ぞ耄せる。
 孜孜營甘旨。辛苦久所冒。孜し孜しとして甘旨かんしを營み、辛しん苦く久ひさしく冒すところ。
 俗流知者誰。指注競嘲傲。俗ぞく流りやう知る者は誰ぞ、指し注ちゆう、競きそうて嘲てう傲がう。
 聖皇索遺逸。髦士日登造。聖せい皇くわう、遺い逸いつを索め、髦ほう士し、日ひに登造とうざう。
 廟堂有賢相。愛遇均覆燾。廟べう堂だうに賢相けんしやうあり、愛あい遇ぐう、覆ふ燾たうに均し。
 況承歸與張。二公迭嗟悼。況いはんや承うく歸と張と、二こ公たう迭ひて嗟悼さたうするを。
 青冥送吹噓。強箭射魯縞。青せい冥めいに吹噓すいきよを送り、強きやう箭せん、魯ろ縞かうを射る。
 胡爲久無成。使以歸期告。胡なんすれぞ久しく成るなく、歸き期きを以て告げしむ。
 霜風破佳菊。嘉節迫吹帽。霜さう風ふう、佳か菊きくを破り、嘉か節せつ、吹すん帽ぼうに迫る。
 念將決焉去。感物增戀嫪。念おもふ將に決焉けつえんとして去らむとし、物ものに感じて戀嫪れんらうを増す。

彼微水中荇。尚煩左右芼。彼かの微たる水中すいぢゆうの荇、尚なほ左さ右いうに芼ぶことを煩はす。
 魯侯國至小。廟鼎猶納郛。魯ろ侯こう、國くに至いたつて小せう、廟べう鼎てい猶なほ郛かうを納る。
 幸當擇珉玉。寧有棄珪瓊。幸さいに當に珉玉びんぎよくを擇ぶべし、寧なほ珪けい瓊けいを棄つることあらむや。
 悠悠我之思。擾擾風中蠹。悠いゆう悠いゆうたる我の思、擾ぜう擾ぜうたり風中ふうぢゆうの蠹。
 上言愧無路。日夜惟心禱。言げんを上つて、路みちなきを愧ぢ、日にち夜や、惟ただ心に禱る。
 鶴翎不天生。變化在啄菹。鶴かく翎れいは天生せいせず、變へん化くわは啄菹たくしゆに在り。
 通波非難圖。尺地易可漕。通つう波は、圖はかり難きに非あらず、尺せき地ち、漕こぐべきこと易し。
 善善不汲汲。後時徒悔懊。善ぜんを善とすること汲汲きききたらざれば、後こう時じ、徒たら悔懊くわいあうせむ。
 救死具八珍。不如一簞犒。死しを救はむとして八ちん珍ちんを具ふるは、一たん簞たんの犒へるに如か
 微詩公勿誚。愷悌神所勞。微び詩し、公こう、誚せしるなかれ、愷がい悌てい、神しんの勞するところ。

【字解】(一)周詩三百篇 詩經を云ふ。(二)雅麗 麗は詩の共通性質であるが、その麗にも種類があるので、詩經の詩は雅麗であるといふこと。(三)理 修める。(四)訓詁 古訓を調べて今の言葉で解釋する。(五)蘇李首更號 文選に李陵が蘇武に與へた詩があつて、その註に「五言の詩は、陵より始まるなり」とある。更號とは、前に四言を詩といつたが、今後改めて五言を詩と號したといふこと。五言の詩が蘇李二人から始まつたといふのは、通説であるが、實は未必の事で、文選に收めた古詩十九首中の八首と蘭若

生春陽の一首とは、玉臺新詠に載せて、作者を枚乗としてある。枚乗も、蘇李も、同じく漢の武帝の時の人であるが、蘇李河梁の唱和は、昭帝の時の事であるし、枚乗は、武帝の初年に死んで居る。それから、卓文君の白頭吟の如きも、無論、武帝の在世中で、ともに蘇李に先つて居る。要するに新體詩の發生は、特に誰といつて一人を名さず譯にも行かず、一般の風氣が、自然に、かかるものを醗酵したのである。【六】東都 後漢は洛陽に都した。五言の詩は、後漢に成つて漸く瀾漫して世に行はれたといふこと。【七】建安能者七 建安は漢末獻帝の時の年號。當時名だたる詩人が凡そ七人あつた。魏の文帝の典論に「今の文人、魯國の孔融文學、廣陵の陳琳孔璋、山陽の王粲仲宣、北海の徐幹偉長、陳留の阮瑀元瑜、汝南の應瑒德璉、東平の劉楨公幹、この七子は、學に於て遺すところなく、辭に於て假すところなし」とある。但し後世では、孔融に代ふるに曹植を以てして居る。元來、孔融は、年次の上からいつても、獨り其外の者より長じて居るし、曹植の才は、これ等の諸人を抜いて居るのであるが、文帝は、自分の弟だから、わざと之を數へなかつたのであらう。【八】卓犖 すぐれる。【九】風操 風は國風の風。操は琴曲であるが、汎く樂章といふ義。つまり古風及び樂府といふこと。【一〇】逶迤 するすると推移して行く。【一一】凋耗 凋萎して衰耗する。【一二】鮑謝 鮑照と謝朓、或は謝朓でなくて謝靈運だといふ人もある。杜甫の詩にも、賦詩何必多、往往凌鮑謝とあつて、この二人は、齊梁間の代表者となつて居る。【一三】比近 近代の者に比すれば。【一四】清奧 清雋博奧。【一五】沿襲 沿襲 剽盜 自分で新意を出さず、前人の作意のみを踏襲し、自然剽竊に類する嫌がある。【一六】國朝 唐代。【一七】子昂 唐書に「陳子昂、字は伯玉、梓州射洪の人、唐興つて、文章、徐庾の餘風を承け、天下祖尙す。子昂、はじめて雅正に變じ、感遇の詩三十八章を爲り、海内宗として以て法と爲す」とある。【一八】李杜 李白・杜甫、唐書に「杜甫、少にして李白と名を齊しうし、時に李杜と號す」とある。【一九】萬類困陵暴 天地の萬物は、李杜二人の詩筆に因つて蹂躪されるのに閉口して居たといふ義。【二〇】閭奧 數居の内、奥の間。蘊奧といふこと。【二一】冥觀 冥冥の中に廣く觀る。【二二】象外 天地萬有の外。【二三】盤 めぐる。【二四】妥帖 平易で穩當。【二五】排纂 夏の時、寒泥、有窮の后翠を殺し、その室に因つて纂を生む。纂多力、能く陸地に舟を行る。少康に殺さる。纂は人名で、多力の義に用ひ、この多力の人をも筆の力で推し開くといふこと。許彦周詩話に「退之云ふ、横空盤硬語、妥帖刀排纂、蓋し能く殺縛の事實、意義と合ふ、最も之を能くし難し。その難きを知らば、與に詩を論すべし、これ東野を稱する所以なり」とある。【二三】海潦 海と行潦とではなく、韻の都合で、潦の字を用ひたので、唯だ海水といふに同じ。【二五】媚竈 論語に見ゆ。【二六】孟軻 人の善惡邪正を知るには眸子を見よといふことが孟子に見えて居る。【二九】瞭眊 瞭は黑白分明なること、眊はぼんやりして居る。【三〇】耄 禮記に「八十、九十を耄といふ」とある。【三一】甘旨 禮記の内則に「味爽にして朝す、慈むに甘旨を以てす」とある。親を養ふこと。【三二】指注 指さして注目する。【三三】嘲傲 嘲弄する。【三四】髦士 俊傑の士。【三五】登造 登庸されて、官に就く。【三六】賢相 鄭餘慶を指す。【三七】覆燾 天が地を覆ふこと。【三八】歸與張 歸登と張建封。孟郊は、かつて、この二人に知られて居た。或は、歸を以て歸崇敬となす説もある。【三九】吹嘘 李白の詩に、故人東海上、一見借吹嘘とあり、杜甫の詩に、揚雄更有三河東賦、唯待吹嘘送上天とある。吹き上げる。【四〇】射魯縞 漢書の韓安國傳に「強弩の末力、魯縞に入る能はず」とあつて、顔師古の註に「縞は素なり、曲阜の地、俗、善く之を作る、尤も輕細となす」とある。【四一】吹帽 晉書孟嘉傳に「桓温の參軍となる。九月九日、龍山に宴す。寮佐畢く集まる。風あり至る、嘉の帽を吹いて墮落す、嘉、これを覺らず」とある。【四二】戀嫪 嫪は物を恠む、又「嫪嫪は戀惜なり」とあり。【四三】荍 詩經に參差荍菜、左右荍、す、嘉、これを覺らず」とある。【四四】廟鼎猶納郛 春秋桓公二年に「郛の大鼎を宋に取り、戊申、大廟に納る」とある。之とあつて、毛傳に「荍は擇ぶなり」とある。【四五】廟鼎猶納郛 春秋桓公二年に「郛の大鼎を宋に取り、戊申、大廟に納る」とある。【四六】玨珉玉 擇はえり分ける、玨は石の玉に似たるもの。禮記に「君子は、玉を貴んで磻を賤む」とあつて、磻は玨と同じ。荀子に「玨の彫彫ありと雖も、玉の章章たるに若かず」とある。又李白の詩に、流俗多錯誤、豈知玉與玨とある。【四七】珉珉 珉は珉、諸侯の執るもの。又周禮に「天子、珉四寸を執り、以て諸侯を朝す」とある。珉は、圭頭、邪に刻む、即ち天子の圭。【四八】風中籟 籟は籟の尾を以て之を爲り、大、斗の如く、左、騑馬軛の上に繋ぐ。左傳に「楚王曰く、寡人の心、搖搖然として旌を懸くるが如し」とあり、張景陽の詩に、騑旅無定心、翩翩如懸旌とあつて、即ち其意を取つたのであらう。【四九】啄菹 菹は鳥の卵を伏すること。【五〇】通波 川の水が海の波に通すること。【五一】尺地 地は池だらうといふ説もある、さうすれば一層善く分かる。【五二】悔懊 後悔して懊惱する。【五三】八珍 周禮の膳夫に「珍、八物を用ふ」とあり、食醬に「八珍の齊を掌る」とあり、禮記の内則に「八珍とは、淳熬・淳母・炮豚・炮牲・擣珍・漬・熬・肝腎を謂ふなり」とある。【五三】一簞幅 黃石公記に「むかし、良將、兵を用ふ、

古詩 薦 士 三二二

人、一筆の醜を餓るものあり、これを河に投ぜしめ、將士をして流を迎へて之を飲ましむ」とある。稿はれがらふ。【五四】愷悌詩
經に愷悌君子、神所勞矣とある。

【題義】舊註に「東野を鄭餘慶に薦むるなり。東野、貞元十一年、深陽の尉となる。時に鄭餘慶、河南に尹たり、公、この詩を作り、以て之を薦む」とある。顧嗣立は説をなして「舊唐書鄭餘慶傳、貞元十四年、中書侍郎平章事に拜せられ、郴州司馬に貶せられ、元和元年、復た本官平章事に擢んでられ、尋いで河南尹に拜せらる。公の貞曜先生墓志、東野、年五十に幾く、來つて京師に集まり、進士の試に従ひ、すでに得て即ち去る。四年を間て來り、選ばれて深陽尉となる、尉を去ること二年にして、故相鄭公、河南に尹たり、奏して、水陸運從事と爲す。後、鄭、興元軍を節領し、奏して、軍參謀となす。卒するとき年六十四。今、王註に謂ふ、東野、貞元十一年、深陽尉となる。この時、餘慶、尙ほ未だ河南に尹たらざるなり。公の詩に云ふ、廟堂有二賢相、愛遇均二覆燾」と。その餘慶に薦むる、中書侍郎たるの時か、且つ、公、餘慶に與ふるの書、再び示問を奉ずるあり、皆孟家の事に縁る。すなはち、公の東野に薦むる、止だ此一詩のみならざること知るべし。公の詩、又云ふ、況承歸與張、二公迭嗟悼、と。蓋し、東野五十を以て尉と作り、人、ともに歎息す、二公を引重して、以て餘慶の聽を啓かむとするなり。按ずるに、唐書、張建封、貞元十六年に卒す。もし是詩餘慶が河南に尹たるの日に作ると云はば、建封死すること、すでに久し、何ぞ獨り援引して之に及び、しかも竝に懷舊感嘆の意な

きか。舊註紛紛、附會穿鑿、悉く刪去を爲すといつて居る。すると、貞元十一年は善いとして、その時鄭餘慶が河南尹であつたといふのが悪いので、これは十四年頃、餘慶が中書侍郎であつた時だらうといふことである。貞元十一年といへば、韓愈は博學宏詞に試みられたが、意の如くならず、三たび書を宰相に上つて報せられざるに因つて、洛陽に赴き、途中で二鳥の賦を作り、その翌十二年、汴州に往つて董晉に依つて十五年まで居たので、まだ無位無官の一書生であるのに、東野を鄭餘慶に薦めたといふのも、一寸變であるが、餘慶は、數ば韓愈の爲に譽を引き、特別の關係があつて、依頼するに易い處からであらう。しかし、考へ様に依つては、孟東野を薦むると共に、併せて、自己の事を暗に頼んだものかも知れない。孟東野は、文字上に於て、韓愈の莫逆の友であつて、平生互に推服したから、現に東野が初めて深陽尉に調せられた時には、大凡物不得三其平一則鳴の一句を冒頭に置いて、鳴の字を三十九用ひたといふ一篇の序を以て其行を送り、東野の才を稱しては「その存して下に在るものは、孟郊東野、始めて其詩を以て鳴る。その高きこと、魏晉に出で、懈らずして古に及ぶ、その他は漢氏に浸淫す」といひ、最後に「東野の江南に役せらるるや、釋然たらざるが若きものあり、故に、吾、その天に命せられたるものを道うて以て之を解す」といつた。かくて、東野は、一先づ深陽に赴任したが、遠地の一卑官でもあり、到底、榮轉の見込などが無いから、韓愈は、ひどく之を氣の毒に思ひ、頼まれもせぬのに、汴州から、態態この詩を鄭餘慶に上つて、汲引の惠を垂れむことを囑望し

たのであらう。しかし、この一篇は、韓愈が特に精神を注いだもので、士その者に對する自己の見解を詳しく述べた處が、後世に重んぜらるる所以で、ひとり、孟東野を薦めたばかりでなく、自然韓愈その人の學問識見抱負が窺はれる。なほ此詩中に孟郊の詩を稱して、横空盤硬語、妥帖力排慕といふ語があるが、いくら韓愈でも、故なくして、手前褒めをする譯には行かぬから、東野を借りて、詩に對する自己の理想を述べたのである。王荆公は、李・杜・韓は唐の三家で、そして、その得力の處は、各その詩の中で知ることが出来る、吟詩各得るところありで、李白は清水出芙蓉、天然去雕飾。杜甫は或看翡翠蘭苕上、未掣鯨魚碧海。韓愈は横空盤硬語、妥帖力排慕で、各盡きて居るといつた位、これを以て見ても、韓愈の此詩に於ける、東野を薦むる以外に、大に爲にするところあつて作つたものだといふことが分かる。

【詩意】周詩の存するものは三百篇、一言にして評すれば雅麗、即ち著想が高雅で、文字が綺麗に出て居る。但し、古訓を調べ、それに依つて、今人が初めて解釋することが出来るので、學問として研究することが必要である。この三百篇は、孔子の刪正を経て、一部の詩經としてまとまつて居るから、今更批評すべき限りではなく、もとより、超絶的である。現世に行はれる五言の詩は、漢の時代に出來たので、蘇李の唱和に始まると稱し、これまでは、四言を詩といつたのに、爾後、改めて五言を詩と號することに成つた。五言の詩は、後漢の世になつて、次第に廣がつて來て、たとへば、一の

源の水が海に落ち込むまでには、様様に別れて、百川になると同じ様に、流派が多くなつて來た。漢末建安の世には、詩を能くするものが七人あつて、いづれも、すぐれた才氣を以て、競うて之を作つたから、古詩樂府を變じて、詩の規模が一層大きく成つて來た。それから、愈よ變化を重ねて、兩晉より宋になると、折角の氣象が、凋喪消耗して、今は意を主とせず、却つて辭を主とするやうに成つた。六朝の詩は、もとより道ふに足らぬが、鮑照謝朓の二人は、その中間に於ける名家であつて、近代の諸家に比すれば、清雋にして博奥なる處がある。次いで、齊梁となり、陳隋となると、世は愈よ降つて、その間の衆作は、唯だ蟬の聲の耳に聒しきと同じく、全然取るに足らぬものが多い。その爲すところは、春を搜つて、花卉を摘むが如く、いくら、花が綺麗でも、根の無いものは、生氣が缺けて居るから、仕方がないので、唯だ前人の眞似を爲し、人の摘んだものを横取りして、わが物が缺けて居るから、その極、剽竊に陥ることを免れなかつた。かくて、唐代になると、文章が又そろとするといふ風で、その極、剽竊に陥ることを免れなかつた。かくて、唐代になると、文章が又そろ盛になつて、詩も再び勃興し、陳子昂が第一に起り、衆人を飛び越えて、復古を唱道し、その次に、李杜二人が勃興して來た。李杜二人は、古今稀に見るところの大詩人で、宇宙間の有らゆる物を捉へて、盡く詩にした處から、萬類は、この二人の筆に蹂躪されるのに辟易した位。そこで、後來相繼いで起つた詩人輩も、各その閭奥に參入することが出来る様に成つた。ここに、窮者孟郊といふ者が居るが、その天稟の才は、實に雄銳にして、馬の逞しきが如く、冥冥の中に洞觀して、詩に關した古

今の事を一切腹の中に疊み込み、天地萬有の外に於て、自分ひとり、詩の幽僻なる嗜好を逐うて居るので、つまり、立脚地を前人未踏の地に求め、その作つたものは、六つかしい言葉のみを空中に蟠まらした様であるが、鍊り上げて脱稿した上は、よく落ち付いて、極めて平易らしく、その力量は、稟といへる古しへの力者をさへ排斥するに足る位である。その延んびりと柔かい處は、紆餘の趣を恣にして、見榮えある華美なる趣は、天然の花の秀でたるが如く、奮つて勢猛き時は、大風の海水を捲くが如く、その素早いことは、響の聲に應ずるが如くである。孟郊は、獨り詩を善くするのみならず、はじめより、聖人の教に服して、身を行ふには規矩に従ひ、微官の卑きに甘んじて、竈に媚びるといふ阿諛主義に反對である。むかし、孟子は、人物を鑒識するときには、その眸子を見よといつたが、孟郊の目は、杳然と澄み渡つて居て、他の浮躁者流を鎮めることが出来る。溧陽の尉といへば、酸寒の極で、まことに貧乏臭い上に、壯年ならば、これから榮達するといふ望もあるが、年五十といへば、最早老耄に近く、これから先の壽命も知れたものである。それなのに、一家を背負ひ、孜孜として勉勵し、親に甘旨を興へさへすれば善いといつて、久しい間辛苦を冒して居る。それなのに、俗流は、もとより之を知るものなく、却つて之を指して嘲弄して居るので、孟郊その人に對して、まことに氣の毒で堪まらない。今や、聖天子、上に在つて、遺賢逸民を索められ、俊髦の士は、日ごとに登用されて、各地位を造るといふ折柄、廟堂の上には、閣下の如き賢宰相が居て、才ある者を愛遇する

ことは、さながら、天の地を覆ふが如く、その上、承はれば、歸登・張建封などいふ有力者も、孟郊の不遇に就いて、痛く同情を寄せて、毎毎嘆息されて居たといふので、どうにかして下されさうなものだと思つて居る。物が青冥の天空に飛び上るには、大風の吹嘘を待たなければならぬし、強弩の末ならぬ強箭ならば、容易に魯縞を射ぬくことも出来る筈で、宰相の御聲がかりといへば、孟郊を擧げること位は、造作も無いと思はれるが如何。おまけに、孟郊は久しくして成すことなく、この頃、任期が満ちると、その儘免官になるといふことである。今しも、秋の末、霜を帯びたる風は、香しき菊を開かしめ、重陽の佳節は、眼前に迫つて、即ち孟嘉が帽を落した高興もしのばれる。この時、孟郊は、免官に成れば、その儘、決然として、此を去る積りであらうが、我我は、物に感じて、孟郊の才を愛する處から、是非これを引き止めたいと思ふのである。かの微微たる水中の荇は、宮女輩が左右から后妃を助けて擇り分けた上で、御祭の供へ物にする。孟郊の如きものでも、之を扶けて、上に擇び取る人さへあれば、初めて、廟堂の上に立つことが出来る。魯は、春秋列國の中では、極めて小さい國であつたが、その廟の寶物として、周の鼎が必要だといへば、邾の大鼎をば太廟に納れたといふことがある位で、堂堂たる我が唐の朝廷に於て、鼎に等しきこの孟郊を容れないといふ譯がない。抑も人を用ふるには、宰相の鑒識が必要で、玉石を判然と見わけねばならぬが、孟郊の如きは、珪璋といつて、天子の禮に用ひられる最上の玉に等しきものであるから、これを棄てるといふ理由はない。その孟郊

は、貧窮の底に沈んで居るから、悠悠たる我が思、まことに堪へられず、その擾擾として落ち付かぬ有様は、さながら、大旗が風の中に動揺して居るやうである。さればといつて、自分も、矢張、微賤に居て、天子に上言を致さうと思つても、その路なきを愧づるばかり、日夜心に念じて、閣下の如き人が宰相の位に居られる上は、孟郊とても、まさか、棄てられることも有るまいと思ふが、それとも、あてにならぬ處から、この詩を作つた次第である。鶴は、品格の善い貴い鳥であるが、天然に生長するのではなく、親鳥が抱いて之を孵化せしめ、餌を啄んで之に與へ、それで、やつと生長するのである。孟郊にした處で、矢張、上位に居る人が啄菹の勞を取つて、懇に世話をしないことには、到底物には成らない。それから、一河の水を大海の波に通せしめるのは、まことに造作も無いことで、たとへば、一尺も隔つて居る處に物を運漕する様なものである。善を善とし、人を登用することに汲汲たらざれば、即ち同情が無いといふことであるし、又孟郊にしても、今の時に救はなければ、何にもならぬので、他日惜い事をしたといつて後悔された處で、追ッ付くものではない。孟郊の窮の甚しき、まさしく、飢餓に迫つて居るので、これを救ふには、何も八珍といふやうな山程の御馳走を以てせずとも、一簞の食を以て勞つて遣れば、それで善いので、もとより、一足飛びに高位大官を希望するといふ譯でもない。この詩を見られて、韓愈は餘計な世話をする奴だ、そんなことを言つて來ても、此方でも困まるといつて、責められるかも知れぬが、詩經にもある通り、愷悌の君子、即ち心樂

しくして、優しい御方が、此の如き人物を登用されたならば、神様から御褒めの言葉を賜はるに相違なく、無益な事でも無いどころか、これが即ち閣下の職分で御座りませう。

【餘論】この首は、初めに支那に於ける詩の沿革を敘し、そして、孟郊の地位を明かにして、今次推薦の事由としたのであるが、その議論は、流石に簡明にして、よく要領を得て居る。許彦周詩話に「六朝詩人の詩、熟讀せざるべからず、芙蓉露下落、楊柳月中疏の如き、鍛鍊、ここに至る、唐より以來、人の能く及ぶなきなり。退之云ふ、齊梁及陳隋、衆作等蟬噪」と。この語、吾、敢て議せざるも、亦た敢て従はず」といつたが、韓愈は唯だ概説して居るので、かういふ様に、區區たる一聯を擧げて、彼此言ふのは、議論の旨意が丸で違つて居る。臨漢隱居詩話に「孟郊の詩、蹇澁窮僻、啄削暇あらず、真に苦吟して成る。その句法格力を觀て、見るべし。その自ら夜吟曉不休、苦吟鬼神愁、如何不自閒、心與身作仇と謂ひ、しかも、退之その詩を薦めて、榮華肖天秀、捷疾逾響報といふは何ぞや」といひ、竹坡詩話に「韓退之、薦士の詩に云ふ、孟軻分邪正、眸子看瞭眊、杳然粹而清、可三以鎮三浮躁」と。余、かつて東野下第の詩を讀む、云ふ、棄置復棄置、情如三刀劍傷」と。登第に及んでは、自ら謂ふ、春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花、と。宜なり、その之を得と雖も、しかも享くる能はざるや。退之、可三以鎮三浮躁といふ、恐らくは、未だ過情を免れず」といひ、ともに一應は尤もである。しかし、韓愈が孟郊の詩を褒めて云云したものの、その大部分は、これを借つて、おのが詩の理想を述べ

たので、孟郊に取つては、意外の贊辭である。又孟郊の人物は、猥瑣踟躕、もとより大詩人の襟度を缺いて居るが、その詩の爲に苦心する處は、いかにも、氣の毒で、韓愈が之を極力推舉したのは、ひとり、嗜痴の癖のみならず、その平生の有様に就いて、同情を寄せたからである。これ等諸家の評語を觀て、後人が一概に孟郊を排斥し、殆んど三文の價値なき様にするのは、又極端なる見解といはねばならぬ。全唐詩話に「李翱の孟郊を張建封に薦むるに云ふ、ここに平昌の孟郊あり、正士なり、伏して聞けば、執事舊と之を知ると。郊、五言の詩を爲り、前漢の李都尉・蘇屬國より建安諸子、南朝の二謝に及ぶまで、郊、能く其體を兼ねて之を有すと。李觀の郊を梁肅補闕に薦むるの書に曰く、郊の五言詩、その高處ある、古しへに在つては上なし、その平處ある、下に兩謝を顧ると。韓の郊を送る詩に曰く、作詩三百首、杳默咸池音と。彼の三子は、皆知言なり、豈に天下の人を欺かむや」といひ、兎に角、李觀・李翱までが、これ程に言ふ處を見ると、孟郊とても、さう馬鹿にしたものでないといふことが分かる。次に顧嗣立が「公の此詩、詩學の源流を歴敘し、三百篇より後漢魏には止だ蘇李、建安の七子を取り、六朝は止だ鮑謝を取り、餘子は一筆に抹倒す、眼明かに、手辣に、識力最も高し。唐初の格律、子昂に變じ、李杜二公に至つて極まる、謂はゆる李杜文章在、光焰萬丈長と、公の平生、最も力を此に得るを知るなり。後、東野を以て、之に繼ぐ、猶ほ未だ此に當るに足らざるに似たり。公の才大にして力雄、思沈んで筆雄なるが若き、庶はくは、李杜に配して慙なかるべし」といひ、

乾隆御批に「孟郊は、一詩流の幽逸なる者のみ、殊に未だ武を諸大家に踵ぐに足らず、而して、退之の士を説く、乃ち肉に甘んじ、その自ら善を嗜み心寧きなしといふものは、此なり」とあり「横空盤硬語、妥帖力排冪、十字中、尤も妙なるは、妥帖の二字に在り、樊宗师の文最も奇崛、しかも、退之は文從ひ字順なるを以て之に許す。其れ亦た世の謂はゆる妥帖なるものに異なれり」とあるが如き、ともに議論の精該を極めて、細心に玩味すべきものである。

喜侯喜至贈張籍張徹

侯喜の至るを喜び、張籍・張徹に贈る

昔我在南時、數君長在念、
むかし、我南に在るの時、數君長く念に在り。

搖搖不可止、諷詠日喞喞、
搖搖として止むべからず、諷詠して日に喞喞す。

如以膏濯衣、每漬垢逾染、
膏を以て衣を濯ふが如く、漬す毎に垢逾よ染む。

又如心中疾、箴石非所砭、
又心中の疾の如く、箴石砭すところに非ず。

常思得遊處、至死無倦厭、
常に思ふ、遊處を得て、死に至るまで、倦厭なしと。

地遐物奇怪、水鏡涵石劍、
地遐にして物奇怪、水鏡、石劍を涵す。

荒花窮漫亂。幽獸工騰閃。
 礙目不忍窺。忽忽坐昏墊。
 逢神多所祝。豈忘靈即驗。
 依依夢歸路。歷歷想行店。
 今者誠自幸。所懷無一欠。
 孟生去雖索。侯氏來還歎。
 欵眠聽新詩。屋角月豔豔。
 雜作承閒騁。交驚舌舌澹。
 繽紛指瑕疵。拒捍阻城塹。
 以余經摧挫。固請發鉛槧。
 居然妄推讓。見謂燕天燄。
 比疎語徒妍。悚息不敢占。
 呼奴具盤餐。釘餛魚菜贍。

荒花、窮まつて漫亂たり、幽獸、工に騰閃す。
 目を礙つて窺ふに忍びず、忽忽として、坐ながら昏墊す。
 神に逢うて祝する所多く、豈に靈即ち驗なるを忘れむや。
 依依として歸路を夢み、歷歷として行店を想ふ。
 今は誠に自ら幸なり、懷ふところ、一も欠くるなし。
 孟生、去つて索ると雖も、侯氏、來つて還た歎れり。
 欵眠して新詩を聽けば、屋角、月、豔豔たり。
 雜作、閒を承けて騁せ、交も驚いて、舌、舌に澹く。
 繽紛として、瑕疵を指し、拒捍して、城塹を阻つ。
 余が摧挫を経たるを以て、固く請うて鉛槧を發せしむ。
 居然として、妄りに推讓、天を燕くの燄と謂はる。
 比疎にして、語、徒に妍なり、悚息して、敢て占めず。
 奴を呼んで盤餐を具へ、釘餛、魚菜贍ふ。

人生但如此。朱紫安足僭。

人生、但だ此の如くむば、朱紫安んぞ僭するに足らむ。

【字解】【一】在南時。陽山に在りし時をいふ。【二】在念。念頭に在つて忘れ得ぬこと。【三】嗚噉。吳都賦に「嗚噉沈浮」とあつて、その註に「嗚噉とは、魚・水中に在つて羣出し、口を動かす貌」とあり、淮南子に「水濁れば魚噉噉す」とある。【四】漬。ひたす、つける。【五】砭。針を打つ、説文に「石を以て病を刺すを砭といふ」とある。【六】水鏡。涵石劍。水鏡、一名は蟻。陸璣の毛詩疏に「蟻、一名は射影、江淮の水濱、皆之なり。人、岸上に在つて、影、水中に見ゆれば、人影に投じて之を殺す」とある。その蟲が石の蔭などに潜んで居て、劍を以て人の影を刺すと、その人は忽ち病氣になつて、死ぬといふこと。【七】騰閃。飛び上つて閃めく。【八】昏墊。塞がつて開通せざること。【九】孟生。即ち孟郊。【一〇】雖索。索は素居の索で、離れる。孟郊は、その年の十一月、江南尹鄭餘慶に從ひ、水陸運從事となつて赴任した。【一一】歎。慊に同じ。ここでは、飽き足る。【一二】舌手。舌は互に同じ、體は吐く。互に舌を吐いて驚嘆する。【一三】拒捍。拒いで強情を張る。【一四】發鉛槧。前に秋懷の詩にも見えて居た。西京雜記に「揚子雲、事を好む、常に鉛を懷にし、槧を提げ、諸計吏に詣り、殊方絶域の語を訪ふ」とある。ここでは、筆を執つて十分に評正すること。【一五】悚息不敢占。恐れ入つて敢て受け取らない。【一六】釘餛。積み重れる。【一七】朱紫。大官の服色をいふ。禮服の義に用ふ。

【題義】數ば述べた通り、韓愈は、元和元年六月、江陵法曹參軍より召し返されて、國子博士となつた。その頃、孟郊、竝に張籍・張徹などは、頻りに其門に出入し、詩酒の間に交を結んで、唱和をなし、城南聯句の如き、會合聯句の如きものをさへ作り、即ち聯句に於て一新體を創出して、大に世俗を驚かした。ところが、孟郊は、前に薦士の詩に在つた通り、深陽の尉を罷められた儘、都に久しく居たが、矢張任用されず、食ふにも困まる處から、又微官を得て、遂に都を去つて仕舞つた。す

ると、侯喜といふものが新に入門したから、韓愈は、大に喜び、この詩を作つて、張籍・張徹等に吹聴したのである。侯喜、字は叔退、貞元十九年、進士の第に中り、國士主簿に終つたので、韓愈の文集に祭侯主簿一文といふのがある。

【詩意】さきに、予が南陽山に在りしときは、諸君の事を念頭に掛けて、一刻も忘れることなく、是非逢ひたいと思ふ心は、搖搖として、止めることも出來ず、せめては、諸君を寄懷する詩でも作つて、自ら慰めやうといふので、諷詠終日、丁度、魚が口を動かして居る様であつた。しかし、それは、垢の付いた衣を膏で洗ふやうなもので、洗へば洗ふ程、垢が付くと同じく、詩を作らうとすれば、する程、一しほ諸君の事を思ふ様になる。又、心臓の病は、針でも、藥でも、到底治療することが出來ぬと同じく、諸君の事を我が念頭より去るといふことは、絶対に不可能であつた。その頃、諸君と會合して、面白い遊び場所まで心ゆくばかり唱和でもしたならば、死すとも決して厭はないと、常常心中に思つて居たものの、それが中中六つかしかつた。陽山は、熱帯に近くして、地、すでに遠ければ、見る物として、奇怪ならぬはなく、水鏡といふ蟲が居て、水中に人の影が映つると、それを目掛けて、その身を投げる、すると、その人は、非常な疫病に罹つて直に死ぬといふ位、この蟲は、平生、石の陰で劍を水に涵して待ち横へて居るといふやうな安排。それから、名も知らぬ變な形の氣味の悪い花が爛漫として咲き亂れ、山深く住む奇異な獸類は、時たま、白晝にも出て來て、頭の上を飛んで

閃くことがある。こんな風であるから、目を礙るものは、すべて見るに忍びず、終日忽忽として、丸で昏睡して居る様であつた。そこで、神社さへあれば、必ず參詣して、歸京の一日も早からむことを祈り、もし靈験があつたらば、神恩は、決して忘れないと固く心に誓つた位で、時たま、都に歸る夢を見て、旅宿の有様なども、歴歷たるばかりであつた。かくて、心の誠が貫徹して、さきに都に召し還され、今日ここに在るのは、誠に幸とせねばならぬことで、南方に在つて、色色豫想して居たところは、少しも缺けて居ない。尤も孟郊だけは、獨り離れて此に居らず、どうやら物淋しい心持がするが、その代り、侯喜といふ人が新に入門して、日夕過訪せられ、まことに、この身に取つては満足なことである。諸君が我が家に會合して、詩を作られる時、自分は、横に成つて臥しながら、その朗吟の聲を聞いて居ると、折しも、屋角に上つた月は、豔豔として輝いて居る。その詩たるや、さまざまの事を作つて、少しでも、目つけ處があると、それをすかさず、おのが才情を騁せ、その出來上つたのを見ては、互に舌を吐いて驚くばかり、そこで、互に入り亂れて、瑕疵を指摘すると、中には、強情に負惜みを云つて、城に塹濠を設けて、固く守つて居る人もある。諸君は、予が貶謫を経たる身なるを以て陋なりとせず、筆を執つて、十分に加朱して呉れるといつて依頼され、いつもながら、予に對して推讓し、一同の師範と仰がれ、予の作つた詩文は、光焰萬丈、天を焼くといはれるが、比較が甚だ無造作であつて、言はれる言葉は、誠に美はしいが、恐懼の餘、うかとは受け取れな

い様である。何は兎もあれ、かういふ會は、非常に、楽しいから、下部を呼んで、御馳走の用意を爲さしめ、積み上げた惣菜は、魚や野菜が澤山で、格別珍らしくもないが、決して不足なことではない。苟くも、この世に在る間、毎日かういふ風にして面白く暮らして行けたならば、この上もない愉快なことで、何も朱紫を身に纏ふにも及ばない。つまり、詩酒の樂は美官に勝るといふべきものではあるまいか。

【餘論】この詩は、一應無難とは見えるが、陽山の風土を擔ぎ出した處などは、蛇足に類して、どうやら、相應しくもない。何義門は歆眠聽新詩の二句を評して「佳句、老杜の夜闌月落の一聯に方ぶべし」といひ、又、人生但如此の二句を評して「收め得て力を費さず、虚含味あり」といつたが、その妙處は、零碎的に求むべく、渾成の妙に至つては、未だしといはねばならぬ。

古風

古風

今日曷不樂。幸時不用兵。

今日、曷ぞ樂まざる、幸にして時に兵を用ひず。

無日既蹙矣。乃尙可以生。

すでに蹙まれりと曰ふ無かれ、乃ち尙ほ以て生くべし。

彼州之賦。去汝不顧。

彼の州の賦、汝を去つて顧みず。

此州之役。去我奚適。

この州の役、我を去つて奚くにか適く。

一邑之水。可走而違。

一邑の水は、走つて違ふべし。

天下湯湯。曷其而歸。

天下湯湯、曷其して歸らむ。

好我衣服。甘我飲食。

我が衣服を好くせよ、我が飲食を甘くせよ。

無念百年。聊樂一日。

百年を念ふ無かれ、聊か一日を樂まむ。

【字解】【一】蹙矣。民の命が縮まる。【二】賦。田の税。【三】役。公役として奉仕すること。【四】一邑。一の村落。【五】湯湯。水の多い貌。【六】曷其。何其に同じく、如何かと訓すべし。

【題義】樊汝霖の解に「安史の亂後、方鎮、内地に相望み、大なるものは州十餘を連ね、小なるものも三四を下らず、兵驕れば帥を逐ひ、帥強ければ上に叛く、廷せず、貢せず、往往にして是れなり。故に古風に託して意を寓す。詩意を觀れば、當に徳宗の世に在つて、烽火の詩と表裏を相爲すべしと云ふ」とある。すると、この詩の主意たるや、今日の様では、とても太平の長く續く望はない、きつと今に騷亂が起るに相違ない、現にその前兆が見えて居るといふ意を述べたのである。この詩は、疑もなく、徳宗時代であつて、即ち貞元中の事に係るのである。前にもいへる如く、今の韓集は、分類でもなく、編年でもなく、唯だたたに編輯したから、かういふ錯亂が起るので、すべて詩文集の

編年は、最も自然的と思はれる。なほ以下數首は、いづれも、韓愈の若い時分の作である。それから、この古風といふのは、李白の古風などとは異にして、格別深い意味もなく、一は、詩體が古に近い處からでもあるし、一は、わざと分からね様に、かくの如く題を命じたのであらう。

【詩意】刻下の時勢を観ると、マア成るべく享樂を爲すより外に仕方がない。幸にして、何處で戦が起つたといふ譯でもないから、今の内に愉快を盡すべきである。處處の藩鎮では、勝手に苛税を課して居るが、まだ民命すでに縮まつたといふ程でもなく、どうやら、生きて居られるのが何よりである。かの州の賦は、自分の居る處でないから、一向關係がないが、この州の役は、現に自分が住んで居て、厳しく課せられるから、どうにも仕方がない。どこへ往つた處で、到底賦税を免れることは出来ない。一つの村落だけに水が出たのならば、走つて之を避けることが出来るが、天下湯湯、到る處、大洪水であれば、どうにも、仕方がないので、丁度それと同じ様なものである。今にも、兵亂が起るに相違なく、一たび起つたら、死ぬより外に道はない。されば今の内に、我が衣服を出來るだけ好くし、我が飲食を在らむ限り贅澤にし、百年も末の事などは考へずに、聊か一日の安を偷んで、兎に角樂むのが第一である。

【餘論】胡渭は「詩に云ふ、幸時不用兵と、これ必ず貞元十四年以前の作ならむ。十五年には吳少誠反し、而して大に諸道の兵を發して之を討つ。本と賦役の民を困めて逃却するところなきを譏る。言

ふは、時に兵を用ひず、正に宜しく甘食好衣、相與に樂を爲すべし。辭、邇よ婉にして、意、彌よ痛む。山樞長楚の遺音なり」といひ、蔣之翘は「この詩、質にして俚ならず、婉にして風多し、古謠諺の遺に似たり、唐人の語に非ざるなり」といひ、乾隆御批には「史記韓信傳に曰く、農夫、耕を輟め、耒を釋て、綸衣甘食せざるなしと。索隱に曰く、滅亡久しからざるを恐る、故に作業を廢止して、美衣甘食を事とすと。この篇、結意これに類す、長歌の哀、痛哭より深しといふべし」とある。

駑駘

駑駘

駑駘誠齷齪。市者何其稠。

駑駘誠に齷齪たり、市ふもの何ぞ其れ稠き。

力小苦易制。價微良易酬。

力小なれば苦だ制し易し、價微なれば良に酬い易し。

渴飲一斗水。饑食一束芻。

渴しては一斗の水を飲み、饑ゑては一束の芻を食ふ。

嘶鳴當大路。志氣若有餘。

嘶鳴して大路に當り、志氣、餘あるが若し。

騏驥生絕域。自矜無匹儔。

騏驥は絶域に生じ、自ら匹儔なきを矜る。

牽驅入市門。行者不爲留。

牽驅して市門に入れば、行くもの爲に留まらず。

借問價幾何。黃金比嵩丘。
借問行幾何。咫尺視九州。
饑食玉山禾。渴飲醴泉流。
問誰能爲御。曠世不可求。
惟昔穆天子。乘之極遐遊。
王良執其轡。造父挾其輅。
因言天外事。茫惚使人愁。
駑駘謂騏驎。餓死余爾羞。
有能必見用。有德必見收。
孰云時與命。通塞皆自由。
騏驎不敢言。低徊但垂頭。
人皆劣騏驎。共以駑駘優。
唱余獨興歎。才命不同謀。

借問す、價幾何ぞ、黃金、嵩丘に比す。
借問す、行くこと幾何ぞ、咫尺、九州を視る。
饑えては玉山の禾を食ひ、渴しては醴泉の流を飲む。
問ふ誰か能く御を爲す、曠世求むべからず。
惟れ昔、穆天子、これに乗じて遐遊を極む。
王良、その轡を執り、造父、その輅を挾む。
因つて、天外の事を言ひ、茫惚、人をして愁へしむ。
駑駘、騏驎に謂ふ、餓死、余、爾に羞づ。
能あらば、必ず用ひられむ、徳あらば、必ず收められむ。
孰れか云ふ、時と命と、通塞皆自由と。
騏驎敢て言はず、低徊して但だ頭を垂る。
人皆騏驎を劣れりとし、共に駑駘を以て優れりとす。
唱として、余、獨り歎を興す、才命、謀を同じうせず。

寄詩同心子爲我商聲謳

詩を同心の子に寄す、我が爲に商聲に謳へ。

【字解】 一 駑駘 やくざ馬。 二 饑餓 鮑照の放歌行に小人自饑餓とある。こせこせして詰まらぬこと。 三 苦 甚だ。
【四】 嵩丘 即ち嵩山、黄金を嵩山ほど積み上げる、杜甫の驄馬行に朝來久試華軒下、未覺千金滿高價と同義。 五 玉山 山海經に「玉山は、王母の居るところ。崑崙の墟、高さ萬仞、その上に木禾あり、長さ五尋、大さ五圍」とある。 六 醴泉 甘い泉、禮記に「地、醴泉を出す」といひ、史記に「崑崙山上に醴泉あり」といひ、白虎通に「醴泉は美泉、狀、醴の如し」とあり、孫興公の天台山賦に醴泉涌溜于陰渠とある。 七 穆天子 史記の秦本紀に「周の穆王、騏驎、温驎、驪驎、騶耳の駒を得、西に巡狩し、樂んで歸るを忘る」とあり、裴烟の註には郭璞の紀年を引いて「穆王、十七年、西、崑崙の邱に征いて西王母を見る」とあり、正義には六國春秋を引いて「前梁張駿の酒泉守馬炭上言す、酒泉南山は即ち崑崙の邱なり、穆王、西王母に見ゆるは即ち此、石室、王母堂、珠璣樓あり、嚴飾、煥として神宮の若し」とある。 八 王良 王褒の聖主得賢臣頌に良執轡とあつて、張晏は「王良は郵無郵なり」とあり、又、韓子に「王良、轡を佐くれば、身、勞せずして輕獸に及び易し」とある。 九 其轡 轡は手綱、これを「くつわ」といふのは、邦訓の誤である。 一〇 造父 史記の趙世家に「造父、周の穆王に幸せらる。穆王、造父をして御たらしむ。西に巡狩して、西王母を見る、乃ち造父に賜ふに趙城を以てす」とある。 一一 其輅 輅は車轅。 一二 天外事 即ち崑崙の邱の事をいふ。 一三 唱 唱然、溜息を吐く貌。 一四 商聲 阮籍の詠懷に素質由商聲といひ、禮記に「孟秋の月、その聲商とあつて、秋の淋しい聲。

【題義】 蔣註に「唐本に贈歐陽詹の字あり、或は駑駘吟示歐陽詹に作り、詹の集に、答韓十八駑駘吟あり」とあり、詩の結末に寄詩同心子とあれば、無論、これは歐陽詹に贈つたものであらう。それから、他人ならば、駑駘吟といつて、吟の字を添へるのであるが、韓愈は、題を古めかしくする

ことが好きであるから、初めは有つたのを、後に削り去つたのかも知れない。歐陽詹は、中唐に於ける一才人で、韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣と同時に、進士に及第し、その時、龍虎榜と稱せられた。又蔣註に「詹、字は行周、泉州晉江の人、貞元八年、公と同じく進士の第に當る。公、貞元十五年の冬、徐州從事を以て、京に朝す。詹、時に國子監四門助教たり、その徒を將率し、闕下に伏し、公を擧げて博士となす、この詩、殆んど斯時作るところか」とある。詩の意は、驚駘と騏驥とを並舉し、騏驥の良馬を以て、己れ若しくは歐陽詹に比し、驚駘を以て、一般の人に比したのである。比興の意味は、むかしから有り觸れたことで、格別珍らしくもなく、韓愈の詩としては、むしろ淺近平易であつて、同時の白樂天・元微之の作に酷似して居る。或は、元白の新樂府などを觀て、試にたび其調を彈じ、偶また之に倣つたのかも知れない。

【詩意】やくざ馬は、まことに詰まらぬものであるが、これを買ふものは、極めて多い。そは何故となれば、力乏しきが故に、暴ばれることがなくて、極めて制し易く、價やすくして、たやすく買ひ取ることが出来るからである。又、これを飼ふにしても、格別費用がかかる譯でもなく、渴すれば一斗の水を飲ませ、飢ゑては一束の藁を食はすに過ぎぬ。そこで、驚駘は大流行となり、高い聲に嘶いて長安の大道を歩くときなど、志氣餘あつて、自分ほど偉いものは無いといふ様に威張つて居る。これと反對に、騏驥は中國よりもすつと遠い絶域に産し、自分では他に匹儔の無いものと思つて居るが、

牽かれて長安の市門に入ると、道ゆく人は、格別目も呉れず、立ち留まつて見る人もない位、まことに情ない話であるが、それにも理由はあるので、その價はと問へば、黄金を嵩山ほどに積まねばならぬといひ、その代り、一日にどれ位行くかといへば、九州を見ること、さながら咫尺の如くである。この馬を飼ふとき、飢ゑては崑崙に生ずる穀物を以てし、渴すれば仙境に湧くところの醴泉を以てする。そして、誰が之を御するかといへば、世を曠しうしても、その人は見付からず、唯だむかし周の穆王が之に乗つて、四方を巡遊したといふことで、王良は、その手綱を執り、造父は其轅を挟み、そして思ふが儘に馳驅し、崑崙の彼方、西王母の居る處に往つたといふが、それは、天外の事であつて、今日では、茫昧恍惚、いたづらに人をして愁へしむるばかり、従つて、この馬を買はうといふ者はなす外なく、まことに氣の毒ではあるが、今さら仕方がない。吾は、汝を以て羞づべきものと思つて居る。凡そ能あればこそ用ひられ、徳あればこそ人に收められるので、汝の如きは、偉いには相違なからうが、用もなければ徳もないものである。勿論それには時あり、命あり、如何に能あり徳あるものでも、そればかりは致し方が無いといふかも知れぬが、時を得て通ずるも、時を失うて塞がるも、おのが心次第で、どうでも成るので、汝も、少しく考へたら善からうといつた。しかし、騏驥は、唯だ頭を低れて、何とも返辭もしない。げにや、世間の人は、騏驥を劣れりとし、驚駘を以て優れりと

して居るが、これに對して、予は喟然として嘆息するので、由來、才と命とは一致せず、才あるものは往往にして命なく、命あるもの必ずしも才あらず、そこで、此詩を作つて、平生同心の好ある貴兄に寄せるので、これは我が心中の感慨を述べたものであるから、君にして、之を諒としたならば、せめては、商聲を張り上げて、一度歌つて呉れ玉へ。

【餘論】この詩は前に云へるが如く、平易ではあるが、いささか淺近の嫌があるので、朱竹垞は「語氣古に近し、然れども、甚しき風致なし」といつた。

馬厭穀

馬、穀に厭く

馬厭穀兮。士不厭糠粃。

馬は穀に厭きて、士は糠粃に厭かず。

士被文繡兮。士無短褐。

士は文繡を被つて、士に短褐なし。

彼其得志兮。不我虞。

彼其れ志を得て、我を虞らず。

一朝失志兮。其何如。

一朝志を失はば、其れ何如。

已焉哉。嗟嗟乎鄙夫。

已んぬるかな、嗟嗟乎鄙夫。

【字解】一、糠。糠はぬか、粃は白で挽き割つても割れぬ大麥の粒。杜甫の句に黎民糠粃歿とある。二、文繡。さまざまの縫ひ取りをした敷物。三、短褐。漢書貨殖傳に「貧者短褐完からず」とあつて、顔師古の註に「短は布の長襦なり、褐は編桑の衣なり」とある、つまり尻切半天と弊衣。或は短を短に作り、二字通用するといふ説もある。方崧卿は「前漢の貨殖傳、實に短の字を用ふ。董彦遠、洪慶善、皆かつて古しへ短褐の字なきを辨す。按ずるに、短褐の字、兩漢、賈誼、貢禹、貨殖傳、班彪、劉平、張衡傳の如き、凡そ六たび見えて、短の字に作るものなし。班彪の王命論に短褐の襲、漢書に短に作り、音堅、襦なり。文選には丁管の切を用ふ。唐人に至りては、方に之を用ふ。故に史記孟嘗君傳と戰國策墨子の語とを以て、皆傳寫の誤となす。退之、古を好むこと、最も深し、當に短の字を以て正となすべく、是なり」といつて居るが、蔣之翘は之を駁し「然れども、これを淮南子に考ふるに、巫馬期、纒に短褐を衣る、しかも、高誘、説なし、亦た恐らくは、未だ必ずしも皆傳寫の誤ならず、況んや、柳子厚も亦た嘗て之を用ふ、又安んぞ退之が必ずしも然らざるを知らむや、今兩つながら之を存して、以て知るものを俟つ」といつて居る。要するに、短褐も、短褐も、兩つながら、古く用例があるから、或は其一を以て他の傳寫の誤といひ、或は短短同音だといふが如き、ともに取るに足らぬ僻説であらう。四、虞。はかる、心配する。

【題義】韓愈は、博學宏詞に試みられし後、なかなか任官されなかつたから、直接に宰相に上書して、登庸を依頼すること、打續けて三回に及んだが、宰相は、一向かまひつけもしなかつた。この詩は、大方、その時にでも作つたらうといふので、その構想の本づくところは、劉向新序の中の一節に在る。曰く、燕相、罪を得て將に出でむとし、門下の諸大夫を召して曰く、能く我に従つて出づるものあるか。大夫に進む者あり、曰く、凶年饑歲には、士、糟糠にも厭かず、しかも、君の犬馬、餘穀粟あり。隆冬烈寒、士短褐、全からず、而して、君の臺觀幃簾、錦繡、飄飄として弊る。財は君の輕んずると

古詩馬 厭 穀

ころ、死は士の重んずるところ。君、君の輕んずるところを施す能はずして、士の重んずるところを求む、亦た難からずやと。韓愈は、新序の文字を使ひこなし、士を遇することを知らぬ宰相の愚を罵倒して、この詩を作つたのである。

【詩意】 厩に居る馬は、穀に飽けども、門下の士は、糠粒にも飽かぬ。その住居は、非常な結構を盡し、土の上に文繡の敷物を被らせて居る位であるが、士には極褻すら無い。宰相輩が賢才を遇する道を知らぬことは、洵に甚しい。彼は、今得意の境涯に居て、自分達の事などは一向念頭にも置かぬ位であるが、彼にして、一朝志を失つたならばどうか、死力を出して、艱難を共にするものなどは、一人もなく、その時になつて、賢才を冷遇したことを後悔したところで、仕方がない。こんな譯の分からぬ奴等が權勢の地位に居る間は、全く駄目で、已んぬるかな、已んぬるかな、それに就けても、鄙夫の者ども、今にも屹度思ひ知ることがあらう。

【餘論】 蔣之翘は「意、古に似て、語、亦たただ激す」といつた通りで、その激した處は、あまりに淺露に失し、聊か韓愈の人格にも關係することと思ふ。

出門

門を出づ

長安百萬家。出門無所之。

長安百萬の家、門を出でて之くところなし。

豈敢尚幽獨。與世實參差。

豈に敢て幽獨を尚ばむや、世と實に參差す。

古人雖已死。書上有其辭。

古人すでに死すと雖も、書上、その辭あり。

開卷讀且想。千載若相期。

卷を開いて、讀んで且つ想ふ、千載、相期するが若し。

出門各有道。我道方未夷。

門を出づれば、各道あり、我が道、方に未だ夷ならず。

且於此中息。天命不吾欺。

しばらく、此中に於て息ふ、天命、吾を欺かず。

【字解】 一 參差 不揃といふが本義だが、ここでは齟齬する、くひ違ふ、相容れずといふ義。 二 未夷 未だ平かならず。

【題義】 方世舉の説に據ると、この首は、韓愈が郷貢進士として長安に來たばかりの時の作に係り、一向彼を顧るものなく、ひどく落拓したのを嗟嘆したものだといふことで、内容から見れば、至極尤もであるし、又文字の使ひ方なども、極めて幼稚で、佶屈聱牙の特質を見出さず、極めて、流暢平易なる處は、又實に之を證するものである。

【詩意】 長安の都には、百萬の人家があるが、飄零落拓の孤客は、門を出ても、何處へ行かうといふあてもない。もとより、幽獨を貴ぶ譯ではないが、世人と兎角相容れずして、食ひ違つて居るから、かく成るのも仕方がない。古人は、既に死んだが、その言辭は、書物の上に殘つて居る。卷を開いて

之これを讀み、その後、瞑想めいさう一番、千載せんざいの下、古人こじんと相期あきして、冥契めいけいするやうな感がある。門もんを出れば、大道坦坦たいだうたんたんとして、誰たれでも行けるが、吾われのみは、その道みちとするところが、未だ平たいかならず、危き険けん至極しごくで、うつかり出て歩あるかれない。そこで、しばらく、古人こじんの書物しょぶつの中に吾われが身を休やすめる外ほかなく、天命てんめいは、もとより吾われを欺あざむかず、これが此身このみの定業ぢやうごふであるから、どうにも仕方しかたがないのである。

嗟哉董生行

嗟哉董生行

淮水出桐柏山。

淮水は桐柏の山より出で、

東馳遙遙千里不能休。

東に馳せて、遙遙千里、休む能はず。

淝水出其側。

淝水は其側に出で、

不能千里百里入淮流。

千里なる能はず、百里淮に入つて流る。

壽州屬縣有安豐。

壽州の屬縣に安豐あり。

唐貞元時縣人董生召南。

唐の貞元の時、縣人董生召南、

隱居行義於其中。

隱居して義を其中に行ふ。

刺史不能薦。

刺史薦むる能はず、

天子不聞名聲。

天子名聲を聞かず、

爵祿不及門。

爵祿門に及ばず。

門外惟有吏日來徵租更

門外惟だ吏あり、日に來つて租を徵し、更に錢を索む。

索錢。

嗟哉董生朝出耕。

嗟哉董生、朝に出でて耕し、

夜歸讀古人書。

夜歸つて古人の書を讀む。

盡日不得息。

盡日息ふを得ず、

或山而樵或水而漁。

或は山にして樵し、或は水にして漁す。

入廚具甘旨上堂問起居。

廚に入つて甘旨を具へ、堂に上つて起居を問ふ。

父母不感感妻子不咨咨。

父母感感たらず、妻子咨咨たらず。

嗟哉董生孝且慈。

嗟哉董生、孝且つ慈。

人不識惟有天翁知。

人識らず、惟だ天翁の知るあり。

生祥下瑞無時期。
家有狗乳出求食。
雞來哺其兒。
啄啄庭中拾蟲蟻。
哺之不食鳴聲悲。
徬徨躑躅久不去。
以翼來覆待狗歸。
嗟哉董生誰將與儔。
時之人。
夫妻相虐。兄弟爲讐。
食君之祿。而令父母愁。
亦獨何心。
嗟哉董生無與儔。

祥を生じ、瑞を下して、時期なし。
家に狗の乳するあり、出でて食を求め、
雞來つて其兒を哺す。
啄啄庭中蟲蟻を拾ふ、
これを哺して食はず、鳴聲悲し。
徬徨躑躅久しうして去らず、
翼を以て來り覆うて狗の歸るを待つ。
嗟哉董生、誰と與に儔せむ。
時の人、
夫妻相虐し、兄弟讐を爲す。
君の祿を食ひ、而して父母をして愁へしむ。
亦た獨り何の心ぞ、
嗟哉董生、與に儔するなし。

【字解】(一) 淮水出桐柏山。書の禹貢に「淮を導いて桐柏よりす」とあつて、孔傳に「桐柏山は、南陽の東に在り」と記し、又水經註に「淮水は、南陽平氏縣胎簪山より出で、東北桐柏山を過ぐ」とある。(二) 淝水。水經に「淝水は、九江成德縣廣陽鄉より出で、西北淮に入る」とあり、即ち晉の謝玄が苻堅の大軍を破つた處である。(三) 壽州。唐書地理志に「壽州壽春郡、中都督府、本と淮南郡、天寶元年、名を更む、安豐縣あり、淮南道に屬す」とある。(四) 問起居。御機嫌を伺ふ。(五) 咨咨。歎息する。(六) 哺。養ふ。(七) 徬徨。うろろする。(八) 躑躅。跼蹐する。

【題義】詩中に見ゆる通り、董召南は、壽州安豐の人。召、一に邵に作る。しかし、その經歷は分ならず、唯だ此詩に因つて、その徳行の君子たるを知るのみである。韓愈は、別に召南の河北に遊ぶを送る序を作り、「董生、進士に擧げられ、連りに志を有司に得ず、利器を懷抱し、鬱鬱として茲土に適く、吾、その必ず合ふことあるを知るなり、董生勉めよ」とある。この文は、文章軌範にも載せてあるから、誰でも知つて居ることと思ふ。それから、蘇東坡は、かつて蘇州姚氏三瑞堂の詩を作り、君不見董召南、隱居行義孝且慈、天公亦恐無三人知、故令雞狗相哺兒、又令韓老爲作詩、爾來三百年、名與淮水馳といつて居る。詩中に貞元中とあるから、この詩は十五年、徐州に居た時の作に係り、送序よりも前であるらしく、且つ専ら其敬慕の意を述べたのである。

【詩意】淮水は、桐柏山より出で、滔滔と流れて東に馳せ、遙遙千里、なほ休まずして、何處までも流れて行く。その淮水に一つの支流があつて、淝水といひ、淮水の如く千里なること能はざれども、百里の間を屈曲して流れ、さうして、淮水に這入る。この二つの河に取り圍まれて居る處が、壽州で、

その壽州の屬縣に安豐縣といふ處がある。その安豐縣に、貞元年中、縣人董召南といふ人が隱居して、義を其中に行つて居た。董召南は、徳行の君子であるから、刺史も之を推薦することが出来ず、天子も其名聲を御聞になることなく、従つて、爵祿が門に及ばない。そして、門外には、時たま縣の役人が来て、租税を徴收し、その上、附加税の上納金などを取り立て、威張り散らして、かしましく罵る聲が聞こえるだけである。董生は、朝に出でて郭外に耕し、夜は家に歸つて燈下に古人の書を読み、終日すこしも休息することが出来ない。それから、農事の餘暇には、山に往つて薪を伐り、水に臨んで魚を捕へ、その魚は、父母に奉ずる爲めで、厨に入つて旨い物を調理し、堂に上つて父母の起居を候するを以て、唯一の樂として居る。董生が、かういふ風であるから、一家一族、いづれも、世間離れがして居て、父母は其子の貧乏をして居ることも格別苦にもせず、妻子も之を嘆かほしいことと思はず、團欒の有様は、如何にも樂しさうである。董生は、かくの如く親孝行で、慈悲深いが、世人はこれを識らず、唯だ天道様が知つて居られるだけである。そこで、天は、不思議なる祥瑞を下して、絶え間がない。家に飼つてある親狗は、子を乳する間、食を求める爲に外に出ると、雞が来て、その狗の兒を養ふ爲にと、庭中を啄んで、蟲や蟻などを拾つて来て食はせるが、狗の食ふ物と、雞の食ふ物とは違つて居るから、子狗は之を食はうともしないので、雞は悲しげに鳴き、うろろとしたがらも、踟躕して久しく去らず、はては、翼を以て子狗を庇ひ、そして、親狗の歸るを待つて居る。

雞狗互に相助けて居るのは、一寸外では見られぬことで、これも、董生の感化の然らしめたところ、つまり天より降された祥瑞の一つである。ああ、董生の徳行は、誰といつて之と匹敵するものはない。顧みれば、今の人は、夫妻相虐げ、兄弟相仇とする位であるから、仕官して、君の祿を食めば、碌な事を仕出來さず、父母に心配をかけるに過ぎぬ。彼等は、果して如何なる心か知らぬが、それにつけても、董生の徳行は、世に類なきものである。

【餘論】 兪瑒は「古詩長短句、太白に盛に、蜀道難、遠離別の篇の如き、實に公が法を取るところのものたり。その奇横は、偏に用韻の處に在り、貫下一筆、然る後截住、以て上意を足す、盡日不_レ得意、亦獨何心等の句の如き、是れなり」といつて居る。即ち、嗟哉董生朝出耕、夜歸讀_二古人書_一、盡日不_レ得_レ息は、盡日不_レ得_レ息で事が切れ、従つて、ここに押韻せねばならぬのであるが、その上なる讀_二古人書_一で押韻してある。時之人、夫妻相虐、兄弟爲_レ讐、食_二君之祿_一、令_二父母愁_一、亦獨何心も、亦獨何心で押韻すべき處を、その上なる而令_二父母愁_一で押韻してある。すると、押韻と意味の切れるのが一致しないので、參差錯落の趣が加はる。これが、古樂府の特長であるが、韓愈は古を好むところから、故意に之を學んだので、ひとり句格の長短のみではない。されば朱竹垞も「長短句錯はる、これ古樂府に仿ひ、意調亦た彷彿として之に似たり」といひ、乾隆御批にも「神味古淡、節族自然、集中の寡二少雙、惟だ琴操間ま之に近きものあり」といつて居る。

烽火

烽火

登高望烽火。誰謂塞塵飛。
王城富且樂。曷不事光輝。
勿言日已暮。相見恐行稀。
願君熟念此。秉燭夜中歸。
我歌寧自感。乃獨淚霑衣。

高きに登つて烽火を望む、誰か謂ふ塞塵飛ぶと。
王城、富み且つ樂し、曷ぞ光輝を事とせざる。
言ふ勿れ、日すでに暮ると、相見る、恐らくは行く稀ならむ。
願はくは、君、熟ら此を念ひ、燭を秉つて夜中に歸れ。
我が歌、寧ろ自ら感ずるならむや、乃ち獨り涙衣を霑す。

【字解】

【一】烽火 説文に「烽は候表なり、邊、警あれば火を擧ぐ」とある。【二】塞塵 塞上の塵埃。【三】王城 洛陽を云ふ。後漢書地理志に「河南縣は、周公築くところの維（維）邑なり、春秋の時、これを王城といふ」とあつて、その註に「地道記に曰く、維城を去ること四十里」とあり、又通典に「河南縣は、古しへの郊廓の地なり、これを王城となす」とある。

【題義】

蔣註に「周の幽王、烽燧を爲り、寇至るとき、擧げて以て兵を招く。諸侯、これを患ふ。公、時に感じて取るあり。時に、吳少誠、韓全義を敗り、兩都甚だ擾攘たり。公の詩、これを以て作る」とある。韓全義は、吳少誠を征伐に出かけた大將であつて、貞元十六年五月、廣利城に敗れ、七月又五樓に敗れ、走つて陳州を保つた。この時、韓愈は、徐州を去つて洛陽に居たので、即ち其地に於て作つたのである。

【詩意】

高い處に登つて眺めやれば、烽火が赤く見える。無論、遠い國境だとは聞いて居るが、その戰塵が此處まで飛んで來ることもあらうかと思はれるので、聊か杞憂に堪へられぬ。マアそんな事は暫く措いて、ここは、むかしの王城で、從來豪富を極めたる歡樂の郷であるから、自分の力で出来るだけ榮華を極め、光華を事としやうではないか。日が暮れば歸らねばならぬから、暮れたなどとは言はぬが善い。明日になると、今日の如く、此處で君と共に酒を飲んで樂むことは出来ないかも知れない。願はくは、君、よっく考へて呉れる。夜に成つてもかまはない、燭を秉つて夜中に歸れば善いから、先づ先づ此に留まつて、樂めるだけ樂まうではないか。しかし、考へて見れば、情ない話、今日かくの如く樂を極めても、何日兵亂に陥るかも分からぬので、わが歌は、自然感慨を免れず、はては涙下つて衣裳を溼すばかりである。

【餘論】

朱竹垞は「この烽火、塞塵に因らず、意特に悲切」といつた。つまり、烽火だけでは、塞塵が飛んで來るとまで考へずとも善いが、時勢の窮通から、自然かくの如き杞憂を懐くに至つたので、それが、即ち詩意の悲痛なる所以である。

汴州亂 二首

汴州亂 二首

汴州城門朝不開

汴州城門、朝に開かず。

【字解】【一】天狗 星の名。漢

書天文志に「天狗、狀は大流星の如

天狗墮地聲如雷。天狗地に墮ちて、聲、雷の如し。
 健兒爭誇殺留後。健兒爭ひ誇る、留後を殺すと。
 連屋累棟燒成灰。連屋累棟、燒けて灰となる。
 諸侯咫尺不能救。諸侯、咫尺、救ふ能はず。
 孤士何者自興哀。孤士、何者ぞ自ら哀を興す。

くして聲あり、その下つて地に止まる、狗の墜つるところに類す。これを望むに及べば、火光の炎炎たるが如く、中天千里、軍を破り、將を殺す」とあるし、孟康は「亦た太白の精なり」といつた。【二】健兒 兵士。【三】留後 即ち陸長源。【四】連屋累棟 留後の居室等。【五】諸

侯 鄰近各地の節度使。【六】孤士 韓愈自ら云ふ。

【題義】唐書地理志に「汴州陳留郡は武德四年、鄭州の浚儀・開封、滑州の封邱を以て置く」とある。蔣註に「汴州は、大曆より後、兵多し。劉元佐死し、子士寧、これに代りしが度なし。その將、李萬榮、逐うて之に代る。萬榮死して、董晉、實に之に代る。晉、卒して、司馬陸長源、留後の事を總べ、八日にして、軍亂れて、長源等を殺す、監軍俱文珍、密に宋州の刺史劉逸準を召して、後務を總べしむ。朝廷、これに従ひ、名を全諒と賜ふ。公、この時、すでに晉の喪に従ひ、汴を出でて四日、實に貞元十五年。二詩、蓋し德宗姑息の政を譏ると云ふ」とある。それから、この騷動は、陸長源等が自ら招いたものだといふので、楊慎は「韓文公の汴州亂の詩、白樂天の哀三良文、宣武軍司馬陸長源の爲に作るなり。他史を考ふるに及んで、長源酷刑、以て驕兵を威し、これを御するに、その道を失へり。」

又、軍中の厚賞を裁して、高く官鹽の直に在り、曰く、我、河北の賊と同じく、錢物を以て健兒の旌節を買はず、と。委任するところの從事楊儀、孟叔度、浮薄にして檢せず、常に戯に軍營に入り、婦女を調笑して、自ら孟郎と稱す。三軍怨怒、遂に長源、竝に楊孟を執へて、之を殺す。これに由つて之を論ずれば、これ長源以て自ら取るあり。何ぞ雲南の張乾陀、楊州の呂用之に異ならむや。昔人言へるあり、曰く、大雅人を先にするは福の聚まるるところ、小智自ら私するは怨を藏するの府と。長源の謂か」といつて居る。前に數は述べた通り、韓愈は、汴州の節度使董晉の幕中に居て、あまり香しくもなく、罷めたい罷めたいと思つて居る内に、董晉が俄に病死したから、その柩を奉じて、洛陽に赴くことになつて、汴州を出發した。汴州では、董晉の死後、司馬陸長源といふものが、推薦に由つて、一時、留後、即ち節度使の臨時代理となつたが、上述の如く、不人望であつた爲に、兵士が亂を起して之を殺し、汴州城中は、鼎の沸く様な騒ぎ。韓愈は汴州を出て二日の後、途中で、この事を聞き、かういふ事の起るのは、畢竟、朝廷の徳が衰へたからだといふので、歎息の意味を以て、この二詩を作つたのである。

【詩意】汴州には、大騷動が起つたといふので、朝に成つても、城門は開かず、天上の天狗星が地に落ちて、雷の如き響を發した様な騒がしさである。聞けば、兵士どもは、われこそ、留後の陸長源を殺したといつて、互に威張つて居るさうで、留後の居室などは、残らず燒けて仕舞つた。もとより、汴

州を環れる各地には、他の節度使等が居るが、皆咫尺を距つるにも拘はらず、これを救はうともせず、袖手傍觀するのは、亂を喜ぶ爲か。これを聞いて、獨り哀しく思ふのは、我輩の如き孤士であつて、いくら慷慨した處で、ごまめの齒ざしり同様、何等の効果もない。

【餘論】 蔣之翹は結末を評して「二語、神氣黯然として絶えむと欲す」といひ、朱竹垞は「質直、情を得たり、正に是れ歌謠の意」といつた。そして、この首は、主として四鄰の坐視を譏つたのである。

母從子走者爲誰。母、子に從つて走るものを誰とか爲す。

大夫夫人留後兒。大夫の夫人、留後の兒。

昨日乘車騎大馬。昨日車に乗じて大馬に騎し、

坐者起趨乘者下。坐者は起趨し、乗者は下る。

廟堂不肯用干戈。廟堂、肯て干戈を用ひず、

嗚呼奈汝母子何。嗚呼、汝母子を奈何。

【詩意】 母らしき人が子供等を連れて、倉皇逃げて行くは、誰かといへば、留後陸長源の夫人や倅どもである。昨日までは、車に乗つて外出するときには、大馬を驅つて、威勢よく走り、そこらに坐つて居るものは、俄に立つて、出て来て禮を爲し、馬に乗つて居るものは、遽つて下りて挨拶をした位。それが、今日この様を爲すのは、如何にも情ない。陸長源は兎に角、罪もない其妻子までが、ひどい目に遇ふのは、どうした事か。かくの如き内亂の突發せしにも拘はらず、朝廷から、兵を出して之を戡定するといふ御沙汰を聞かず、すでに之を未然に防ぎ得ず、又亂が起つても棄てて置くといふのは、威信地に落ちた證據で、それに付けても、汝等母子は、まことに憐むべきものである。

【餘論】 この章は、君相の姑息を譏つたのである。蔣之翹は「退之、好んで長句を爲ると雖も、然れども、短古極めて觀るべきものあり。汴州亂、馬厭穀、古風、河之水、諸作の如き、ともに高古絶倫、尙ほ是れ琴操の餘技、家の春父曰く、敍し得て慘、二首の結語、ともに奈何ともすべなきの辭」といひ、その見地、極めて公平妥當である。

利劍

利劍光耿耿。

佩之使我無邪心。

利劍

利劍、光、耿耿たり。

これを佩べば、我をして邪心なからしむ。

故人念我寡徒侶。

故人、我が徒侶寡きを念ひ、

持用贈我比知音。

持用して我に贈つて知音に比す。

我心如冰劍如雪。

我が心は氷の如く、劍は雪の如し。

不能刺讒夫。

讒夫を刺す能はず。

使我心腐劍鋒折。

我が心をして腐し劍鋒をして折れしむ。

決雲中斷開青天。

雲を決いて中斷し、青天を開く。

噫劍與我俱變化歸黃泉。

噫、劍、我と共に變化して、黃泉に歸せむ。

【字解】【一】無邪心 越絶書の寶劍篇に「三に曰く邪に勝つ」とある。【二】寡徒侶 友達が少ない。【三】持用 これを持ち來

る。【四】劍如雪 張景陽の七命に寶劍如雪とある。【五】決雲 莊子の説劍に「上、浮雲を決し、下、地紀を絶つ」とあり、又

李白の詩に飛劍決浮雲とある。【六】變化歸黃泉 晉書張華傳に「雷煥、豐城の雙劍を得、一を以て華に與へ、一を以て自ら佩ぶ。

華誅せられて、劍の在るところを失ふ。煥卒す、その子、持して延平津を過ぐ、忽ち腰間に於て躍り出でて、水に墮つ、兩龍の紫繞するを見る、ここに於て劍を失ふ」とある。

【題義】これは、劍に託して、おのが滿腔の不平を敍したのである。

【詩意】銳利なる寶劍は、燒刃の句こまやかに、光耿耿として、これを腰に佩びたばかりで、われをし

て、邪心を消亡せしめる位、まことに心持の善いものである。わが友人は、わが獨り世に容れられずして、日夕追隨する仲間の少いのを氣の毒に思ひ、この寶劍を我に贈つて、知音とも見よといはれ、その厚意は、まことに感謝すべきである。元來、わが心は氷の如く、そして劍の光は雪の如くである。

世の中には讒者が多い、それを此劍で斬れば、まことに痛快であるが、さういふことが出来ないから、わが心をして腐敗せしめ、劍の鋒先をして折れしめる。かの讒者を斬つたならば、さながら、雲を切り捲つて中斷し、そして、青天を開いて望むが如く、この上もなく、さつぱりした事であるが、それは單に理想に止まつて、到底實行出來ぬ上は、世の中に居ても仕方がないから、われと劍と、共に變化して黃泉に歸つて仕舞はうと思ふのである。

【餘論】蔣之翹は「わが明の孫炎、かつて、劉伯溫の爲に寶劍歌を作り、結に云ふ、還君持之獻明

主、歲若大旱爲霖雨」と。これ何等の精神、何等の氣概。退之、劍與我俱變化歸黃泉の一語、便ち萎餒に屬すること極まれり。世運興衰の象、ここに於て見るべし」といつたが、孫炎の極力苦心したものと、韓愈が不用意に詠み棄てたものとを比較するのは、すでに當を失して居ることと思ふ。次に朱竹垞は「語調ともに奇險、亦た風謠に近し」といつて居るが、これは流石に妥當である。

齷齪

齷齪

齷齪當世士。所憂在饑寒。但見賤者悲。不聞貴者歎。大賢事業異。遠抱非俗觀。報國心皎潔。念時涕汎瀾。妖姬坐左右。柔指發哀彈。酒肴雖日陳。感激寧爲歡。秋陰欺白日。泥潦不少乾。河隄決東郡。老弱隨驚湍。天意固有屬。誰能詰其端。願辱太守薦。得充諫諍官。排雲叫閭闔。披腹呈琅玕。致君豈無術。自進誠獨難。

齷齪たり當世の士、憂ふところは饑寒に在り。但だ賤者の悲むを見て、貴者の歎するを聞かず。大賢は事業異なり、遠抱は俗觀に非ず。國に報いて心皎潔、時を念うて涕汎瀾。妖姬、左右に坐し、柔指、哀彈を發す。酒肴日に陳すと雖も、感激、寧ろ歡を爲さむや。秋陰、白日を欺き、泥潦、少しも乾かず。河隄、東郡を決し、老弱、驚湍に隨ふ。天意、もとより屬するあり、誰か能く其端を詰らむ。願はくは、太守の薦を辱うして、諫諍の官に充つるを得む。雲を排して、閭闔に叫び、腹を披いて、琅玕を呈す。君を致す豈に術なからむや、自ら進むこと、誠に獨り難し。

【字解】

【一】齷齪 史記貨殖傳に其民齷齪とあつて、こせこせとしてあせる貌。【二】遠抱 遠大なる抱負。【三】俗觀 俗物の觀念。【四】汎瀾 涙の流れる貌。【五】哀彈 潘岳の笙賦に轆張女之哀彈とあつて、悲しい音を彈じ出す。【六】欺白日 欺は壓倒する。この二句は、楚辭に皇天淫溢而秋霖兮、后土何時而得乾とあり。杜甫の詩に秋來未嘗見白日、泥汗后土何時乾とあると同義。【七】東郡 唐の滑州は白馬縣に治し、即ち漢時の東郡である。【八】閭闔 離騷に吾令帝開闔闔兮倚閭闔而望予とあつて、王逸註に「閭闔は天門なり」とある。なほ司馬相如の大人賦に、排闥闔闔而入帝宮とある。【九】琅玕 書の禹貢に「厥貢は惟だ球琳琅玕」とあつて、その註に「石の玉に似たるもの」とある。

【題義】

蔣註に「貞元十五年、鄭滑大水。公、十六年、京師より彭城に歸る。詩に云ふ、去歲東郡水と。而して、此詩亦た云ふ、河隄決東郡、老弱隨驚湍」と。詩意相似たり。大抵、當世の士、齷齪として能く國の爲に慮るものなきを言ふ」とあるし、胡渭は更に之を詳説して「洪譜を按ずるに、公、十五年二月暮を以て、徐州に抵る。張建封、これを符離睢上に居らしむ。秋に及んで、將に辭し去らむとす。建封、奏して、節度推官となす。符離は徐州封城郡に屬す。詩に云ふ、願辱太守薦」と。太守は即ち徐州刺史。蓋し、この時、建封尙ほ未だ奏辟せず、故に太守の薦に望むあり。大賢事業異より感激寧爲歡に至るまでの八句は、太守を美するなり」といつた。この詩は、もとより、薦用を依頼したのであるが、われより憐みを乞うて求めるのではなく、今の時勢の悪いのを敲き直すには、是非我輩の如きものを登用せねばなるまいといふ意味を述べたので、その守るところを失はざるは、その人物の雋偉なる所以である。これから見ると、かの宰相に求めた三篇の上書などは、むかしから、乞

食文章といはれた通り、いかにも局促猥瑣を免れず、到底、これとは比較にも成らないやうである。

【詩意】當世の士人は、こせこせと、あせりにあせり、唯だ飢寒のみ憂へて、富貴に眷戀し、そして、自分が富貴になると、貧賤の者の事など一切考へない處から、何時まで立つても、賤者の自ら悲むを見るのみで、貴者が之が爲に嘆息し、一肌脱がうなどいふことは、かつて聞いたこともない。ここに、徐州の刺史張建封は、世に大賢と稱せられる人で、その事業は、世人と異にして、遠大なる抱負は、もとより俗人の觀念と全く別である處から、報國の心は、あくまで皎潔であるし、時勢の日に非なるを念うて、毎に涙を流して居られる。もとより、富貴の地位に居るから、美人は左右に侍し、その女どもは、主人公を慰める爲に、柔かき指を以て哀音を發する琴などを彈することはあるし、又日酒肴を陳して、宴を催されるが、平生家國の事に感激して居るから、そんな事では、歡樂を得られる譯でもない。頃ろ、秋の天氣は曇り勝ちで、白日を壓倒し、雨後の泥水は、少しも乾かず、黄河の隄は、東郡に於て決潰し、老弱男女は、逆巻く波に隨つて流れて仕舞つた。かかる災害を下したのも、畢竟、天意が下を誡める爲であるが、誰も其端端を詰り問ふものなく、一向平氣で打澄まして居る。但し、太守に於て、もとより御考も御座らう。願はくは、太守の推薦に依つて、諫諍の官に充てられたいもので、さうすれば、白日を蔽ふところの雲を推し開いて、天門の下に叫號し、今日災害の來りし所以を十分に詰問し、おのが心腹を披いて、琅玕にも比すべき濟世の方策を天子に奏聞したい。我次第である。

輩、不肖なれども、君を堯舜に致すことに就いては、相當の術があるが、自分で推薦することは、誠に六つかしいから、取り敢へず、御依頼するので、何分にも、一臂の力を貸し玉はむことを懇願する次第である。

韓昌黎集卷三

古詩

河之水二首寄子姪老成

河の水二首、子姪老成に寄す

河之水去悠悠。

河の水、去つて悠悠。

我不如水東流。

我の水の東流に如かず。

我有孤姪在海陬。

我に孤姪あり、海陬に在り。

三年不見兮使我生憂。

三年見ず、我をして憂を生せしむ。

日復日夜復夜。

日復た日、夜復た夜。

三年不見汝。

三年汝を見ず。

使我鬢髮未老而先化。

我が鬢髮をして、未だ老いざるに先づ化せしむ。

【字解】

【一】河之水

黃河。

【二】水東流

梁の武帝の詩に河中之水向東流とある。

【三】海陬

海邊の片田舎。

【四】先化

化して白髪となる。

【題義】これは、韓愈が其姪の老成に寄せたのである。老成は、韓愈の兄率府軍佐韓介の子で、姪といふものの、年もさう違はず、且つ兄弟は皆すでに死し、唯一の肉親である處から、韓愈は之と非常に親密であつた處が、早く死んだから、祭文を作つたので、即ち有名なる祭三十二郎一文である。從來、祭文には押韻するのが普通であるが、この文は、散體を以て之を行ひ、十分に思ふ様を述べて居るので、祭文に於て一新紀元を劃したものと看做されて居る。これより先、韓愈が、汴州なる董晉の幕中に居た時、老成が尋ねて來たが、家族を引き連れて來て同居する積りで、其家に歸つた。すると、間もなく、董晉が死んだ爲に、韓愈は徐州に赴いて、張建封の幕下に身を寄せた處が、老成は、來る來るといつて居て、遂に來るを果さずして病死した。その顛末は、十二郎を祭る文の中に「吾年十九、はじめて京城に來り、その後、四年にして歸つて汝を視、又四年、吾、河陽に往いて墳墓を省し、汝が嫂の喪に従つて來り葬るに遇ふ。又二年、吾、董丞相に汴州に佐たり。汝、來つて吾を省し、止まること一歲、歸つて其孥を取らむことを請ふ。明年、丞相薨じ、吾、汴州を去り、汝來るを果さず。この年、吾、戎に徐州に佐たり、汝を取るものをして始めて行かむ。吾、又罷めて來り、汝、又來るを果さず。吾、汝の東に従ふを念ふに、東又客なり、以て久しうすべからず。久遠を圖るには西歸に如くはなし、將に家を成して汝を致さむと欲す。嗚呼、孰れか、汝、遽に吾を去つて歿すと謂はむ

や」といつて居る。すると、韓愈が汴州に居た時、老成は一度尋ねて來たツ切り、相逢ふこともなく、それが即ち永別となつたのである。この詩は、韓愈が徐州に居て、ある年、參賀か何かの爲に上京した時に作つたものである。それから、老成は、何處に居たかといふと、かの祭文の中に「汝と食に江南に就く」といひ、この病（軟脚病、即ち脚氣）は江南の人、常常之あり」といひ、しきりに、江南といつては居るが、その地を點醒せず、はつきり何處とも分らぬ。しかし、今の鎮江、もしくは上海附近だらうといふことである。

【詩意】黄河の水は、悠悠として、東に流れ、末は海に注いで居る。その水に沿うて下つたならば、汝の處へ往けるのであるが、人の幕客たる此身には、それ程の餘暇もなく、つまり、河水に如かざる次第である。わが一人の姪の老成といふものは、海邊の片田舎に居て、三年以來、打絶えて逢はぬから、我をして、日夜愁を生せしめる。かくて、日復た日、夜復た夜と、歲月は頻りに移り行けども、汝と相見る機會もないから、まだ老年といふ程でもないのに、鬢髪が次第に變じて、白くなつて仕舞つた。

河之水悠悠去

我不知水東注

河の水、悠悠として去る、

我、水の東に注ぐを知らず。

我有孤姪在海浦。

我に孤姪あり、海浦に在り。

三年不見兮使我心苦。

三年見ず、我が心をして苦ましむ。

采蕨于山。緝魚于淵。

蕨を山に采り、魚を淵に緝す。

我徂京師。不遠其還。

我、京師に徂かば、遠からず其れ還らむ。

【字解】 一 采蕨于山 詩經に陟彼南山言采其蕨とある。 二 緝魚于淵 詩經に其釣維何維絲伊緝とある。

【詩意】 黄河の水は、悠悠として東に注ぐが、我は汝を訪ふことが出来ずして、河水にも及ばぬ譯である。わが一人の姪は、海邊に居て、三年の久しき、相逢ふ機會とはなく、その爲に、我が心を痛く苦ましめる。もし一處に居たならば、打連れて、山に蕨を采り、淵に臨んで、ともに釣を垂れ、どんなに樂いか分からぬが、遺憾ながら、それが出来ない。われは、今張建封の命を奉じて上京するが、遠からずして歸つて來るから、汝も亦た海邊から徐州まで來て呉れぬか。さうすれば、蕨を采つたり、魚を釣つたりすることも出来るので、相思の餘、取り敢へず、ここに詩を寄せる次第である。

【餘論】 この詩は、詩經三百篇を模擬したので、詩經は、大抵四言であるに對して、此は三言、六言、七言など色色錯綜して、體裁は聊か異なつて居るが、その構想は、全篇彼を踏襲したのである。それから、二首を竝觀すると、その大半が互に類似し、韻脚の文字を換へて使つて居る處は、全く詩經の

聯作の面影を傳へて居るし、後首の後半が前首と全く句法を異にして居る處も、矢張、詩經に例があるので、全體に於て、何處までも、三百篇の體を傳へるといふことに熱中して作つたのである。劉辰翁が「これ其れ楚語なり」といつたのは、稍や中らぬ様であるが、朱竹垞が「これ國風を學ぶ、却つて、乃ち長短句、蓋し亦た稍や面貌を換へむと欲す」と云つたのは、流石に見るところありと稱すべく、何義門が「二詩、一片の眞氣、詞も亦た古極まる」といつたのも、同じく妥當である。

山石

山石

山石犖确行徑微。山石、犖确として、行徑微なり。

黄昏到寺蝙蝠飛。黄昏、寺に到つて蝙蝠飛ぶ。

昇堂坐階新雨足。堂に昇り、階に坐すれば、新雨足れり。

芭蕉葉大支子肥。芭蕉葉大にして、支子肥えたり。

僧言古壁佛畫好。僧は言ふ、古壁佛畫好しと。

以火來照所見稀。火を以て來り照らせば、見るところ稀なり。

鋪牀拂席置羹飯。牀を鋪き、席を拂うて、羹飯を置く。

【字解】 一 犖确 かどかどしき貌。 二 行徑 人の通る小路。

三 蝙蝠 かうもり、説文に「蝙蝠は服翼」とあり、古今註に「一名仙鼠」とある。 四 芭蕉 蘇頌の草木疏に「大なるものは二三尺圍、重皮相襲り、葉は扇の如く生ず」とある。 五 支子肥 支子は梔子即ちくちなし、酉陽雜俎に「諸花六出の者少し、惟だ梔子花のみ六出、即ち西

疎糲亦足飽我饑。疎糲亦た我が饑を飽かしむるに足れり。
 夜深靜臥百蟲絕。夜は深く、靜に臥すれば、百蟲絶え、
 清月出嶺光入扉。清月嶺を出でて、光、扉に入る。
 天明獨去無道路。天明獨り去れば、道路なし。
 出入高下窮煙霏。出入高下、煙霏を窮む。
 山紅澗碧紛爛漫。山紅澗碧、紛として爛漫たり。
 時見松樾皆十圍。時に松樾を見れば、皆十圍。
 當流赤足蹋澗石。流に當つて、赤足、澗石を蹋む。
 水聲激激風吹衣。水聲、激激として、風、衣を吹く。
 人生如此自可樂。人生、かくの如きは、自ら樂むべし。
 豈必局束爲人鞿。豈に必ずしも局束、人の爲に鞿されむや。
 嗟哉吾黨二三子。嗟哉、吾が黨の二三子。
 安得至老不更歸。安んぞ、老に至るまで、更に歸らざる

域の蒼筤花なり」とある。それから、杜甫の句に紅綻雨肥梅とあつて、肥の字は、これに本づき、即ち上の新雨足を承けたのである。【三】疎糲列子に「食は則ち疏糲」とあり、杜甫の句に百年疎糲腐儒餐とある。糲は、よくつかぬ米、即ち玄米。【七】松樾 南都賦に楓柳樾樾とあつて、李善の註に「樾は樾と同じ」とある。樾は即ちくぬぎ。【八】赤足 杜甫の詩に、南望青松架短壑、安得赤脚蹋澗水とある。【九】風吹衣 杜甫の句に風吹三客衣、日杲杲とある。【一〇】爲人鞿 漢書灌夫傳に「廷論局趣、轅下の駒に效ふ」とあり、又楚辭に余雖好修姱以鞿糶とあつて、その註に「糶の口に在る糶といふ」とある。又漢書刑法志に「是れ猶ほ糶を以てして、驛突を御する

がごとし」とあつて、顔師古の註に「馬、頭を絡する糶といふ」とある。爲人鞿とは、人の爲に鞿繫せらるるといふ意。

【題義】 蔣註には「この詩、河之水の後に編次す、當に是れ徐を去つて洛に即く時に作りしなるべし。

蘇子瞻、かつて、客と南溪に遊び、醉後、相與に衣を解き、足を濯ひ、因つて公の此篇を詠じ、その韻に次すこと蘇集に見ゆ」とあるが、韓集の編次は全く出鱈目で、あてには成らず、従つて、この説は誤つて居る。この詩は、韓愈が徐州を去りし後、しばらく洛陽に居た時、貞元十七年七月二十二日、その門人、李景興・侯喜・尉遲汾といふ人人と共に、洛陽の郭外なる溫水に遊び、その歸途、洛北の惠林寺に往つた處が、夜遅くなつたから、その儘、留宿したといふので、惠林寺に題名が残つて居た爲に、その時の事實が明かに成つたのである。山石は、例の如く、篇首の二字を取つて題に填したので、格別の意味もない。

【詩意】 かどかどした山石の間に、やつと人の通る一條の細徑があつて、これを辿つて行くと、惠林寺に到着したが、それは蝙蝠が得意に飛び廻る黄昏の頃であつた。そこで、堂に升り、階に坐すれば、新に暑熱を洗ひ去つた雨あがりの時で、秋の初の氣が爽かに、冷いやりとして居た。雨後であるから、芭蕉の葉は大きく伸びひるがり、梔子の花も肥えて、えならぬ香氣を放つて居る。すると、坊主が出て来て、當寺の壁畫は、随分古いもので、佛様が大そう見事に描かれて居るから、是非御覽なさいといつたから、燈火を以て照らして見た處が、薄暗くて、何が何だか、さつぱり分からなかつた。今日は、

一日遊び暮らして、腹も減つたからといふので、牀を鋪き、席を拂つて、羹や飯を持つて来て貰ひ、さて愈よ箸をつけて見ると、まづい玄米の飯であつたが、ひもじい時に不味い物なしといふ通り、それでも、飢を飽かすには十分であつた。やがて、夜が更けたから、靜に横に成つた處が、百蟲の響も絶え、清き月が東嶺にさし上り、その光が扉の中へ照らし込んで、まことに澄み切つた氣分がした。それから、夜が明けて、同行者のまだ寢て居る内に、自分ひとり起き出て、山中の景色を眺める積りで歩いて見ると、路もない處に迷ひ入つたが、それにも拘はらず、高い處に出で、低い處に入り、朝靄の挂つて居る間を彼方此方と窮めて廻はつて見た。すると、山の土は赤く、谷川の流は青く、紛として爛漫といふやうに、如何にも善い眺めであつた、山には松だの櫟だのが生えて居て、いづれも、十抱程ある老木である。その前には水が流れて居るから、跣足になつて、巖石を踏みしめて、とぼとぼと覺束なくも進み行けば、淺瀬には、水の音が激して聞こえ、風は、颯然として衣を吹き、身にしみる様な寒さを感じた。こんな面白い事は無い、人生かくの如く、始終ここに居れば、實に楽しいことであらうと思ふ位で、世の中に局束し、きびしく繋がれて、人の爲にこき使はれるにも當るまいと、つくづく心に感じた。そこで、歸後、同行の弟子ともに告げて、ならう事なら、君等と共に、老に至るまでも、歸り去らず、この儘、山中の人と成りたいと思ふといつた。

【餘論】黄震は「山石の詩、最も清峻」といひ、乾隆御批には「以火來照所見稀、嶽廟の作、神縱

欲福難爲功と略ぼ同じ。法に於ては、手に隨つて撇脱し、意に於ては、素より満たざるるところの事、即ち隨處自然に流露するなり」といひ、顧嗣立は「七言古詩、整麗に入り易くして、亦た平熟に近し。老杜、はじめて拗體を爲る、杜鵑行の類の如し。公の七言、皆この種を祖とす、而して、中間極めて鮮麗の處あり、雕琢を事とせず、更に精采あり、聲あり、色あり、自ら是れ大家。元遺山の論詩絶句に云ふ、有情芍藥含春淚、無力薇蕪臥晚枝、拈出退之山石句、始知渠是女郎詩、眞に篤論なり」とある。有情芍藥の二句は秦少游の詩で、これを韓愈の山石の詩に對照して見ると、同じく綺麗であるけれども、秦少游のは女郎の詩、韓愈は丈夫の作であるといふので、元遺山の宗奉するところも分かる。つまり、韓愈のは、雄壯渾成の中に時たま綺麗な處があるので、これは、一寸眞似の出来ぬ處である。東坡の詩にも、犖确何人似退之、意行無路欲從誰、宿雲解駭晨光漏、獨見山紅澗碧時、とあつて、彼は、山紅澗碧が、ひどく氣に入り、始終かういふ詩を作らうと苦心して居たのである。なほ、何義門は破題四句を評して「即目を直書し、工を求むるに意なく、しかも文自ら至り、謝家の模範を一變す、畫家の荆關の如し」といひ、山紅澗碧の四句を評して「すべて是れ雨後の興象、又即ち犖确黄昏の二句中、包蘊するところに發端するなり」といつて居る。

天星送楊凝郎中賀正

天星、楊凝郎中の賀正を送る

天星牢落雞喔咿。僕夫起餐車載脂。

正當窮冬寒未已。借問君子行安之。

會朝元正無不至。受命上宰須及期。

侍從近臣有虛位。公今此去歸何時。

僕夫起つて餐し、車載ち脂す。

正に窮冬に當つて、寒、未だ已まず。

借問す、君子、行いて安くにか之。

會朝元正、至らざるなし。

命を上宰に受け、須らく期に及ぶべし。

侍從近臣、虛位あり。

公、今ここを去つて、歸るは何の時。

【字解】 〔一〕牢落 ばらばらとして居る、數が漸く少く見ゆる貌。

〔二〕喔咿 楚辭に喔咿嚙々あり、王延壽の賦に聲嚙嚙而喔咿とあり。

李白の雉子斑に、喔咿振迅欲飛鳴とある。

〔三〕車載脂 詩經に載脂載率とあつて、車に油をさす。

〔四〕窮冬 賀正に上京するから、前年の冬、出發するので、即ち貞元十四年十二月である。

〔五〕會朝 會は甲と普通。甲朝は第一の朝といふに同じく、即ち元日の朝會の義。

【題義】 この詩は、前詩よりもすつと前、貞元十四年、韓愈が汴州董晉の幕中に居た時、郎中楊凝といふ人が、賀正の爲に上京するのを送つて作つたのである。この時分の節度使は、儼然として諸侯の如く、なかなか其任地を離れて出かけることは無いので、元日以下の式日には、大抵代理を遣すことに成つて居た。韓愈も、後年徐州に居た時に、張建封の代理として、賀正の爲に上京したことがあつた。それから、楊凝は、唐書に「字は懋功、弘農の人、右司郎中に遷る、宣武の董晉、表して判官となす」とある。

【詩意】 夜は明けなむとして、天上の星は、ばらばらと輝き、一番雞が喔咿として、花やかに鳴き立てたので、僕夫は早く起きて、食事を畢り、車に脂をさして、出立の準備も調つて居る。今しも、窮冬十二月、寒さは一ばん烈しい時であるのに、君は、これから何處へ行かれるのか。元旦の會朝は、一年中で最も重い朝廷の御儀式であつて、四方萬國、至らざるなく、この度、上宰の董晉が君を代理として京師に遣はされるのであるから、さつさと出かけて屹度間に合ふ様にせねば成るまい。君は、もとより一個の人才であつて、由來、人才は、一地方の節度使などが勝手に私すべきもので無い。近ごろ、天子侍從の近臣どもの中には缺員があると聞いて居るから、君が上京されると、ひよつと、天子の御目に留まり、その儘、引き止めて任用されるであらうから、この度、ここを去れば、何時歸つて來るか分からぬ様な事に成るかも知れない。

【餘論】 結二句は、一步を拓開して、楊凝の爲に祝意を表した次第で、董晉には、あまり聞かせたくは無様な意味である。勿論、韓愈は、董晉に心服して居らず、どうかして早く汴州を去りたいと思つて居た位で、後年、張建封に於けるも、矢張その通り。彼は、無論藩鎮の屬官たるに甘んぜず、天子の直臣となり、そして、滿腹の經綸を展べて、藩鎮を敲き潰さうといふのが、その年來の夙望である。

處から、無意識の中に、時たま、かういふ事を云つたのである。

汴泗交流贈張僕射

汴泗交流、張僕射に贈る

一るが如し。

汴泗交流郡城角、
 築場千步平如削、
 短垣三面繚逶迤、
 擊鼓騰騰樹赤旗、
 新秋朝涼未見日、
 公早結束來何爲、
 分曹決勝約前定、
 百馬攢蹄近相映、
 毬驚杖奮合且離、
 紅牛纓紱黃金羈、

汴泗交流す郡城の角、
 場を築くこと千步、平かなること、削
 短垣三面、繚つて逶迤たり、
 鼓を撃つこと、騰騰として、赤旗を樹つ。
 新秋朝涼しうして、未だ日を見ず、
 公早に結束し、來つて何をか爲す。
 曹を分つて、勝を決すること約前に定む、
 百馬、蹄を攢めて、近く相映す。
 毬は驚き、杖は奮つて、合し且つ離る、
 紅牛の纓紱、黄金の羈。

【字解】【一】平如削 地ならし
 をして平坦に成つて居るをいふ。
 【二】短垣 丈の低い矢來。
 【三】繚逶迤 めぐつて長く續く。
 【四】公早 この早は早朝の義。
 【五】結束 支度をする。
 【六】分曹 組を分ける。
 【七】約前定 前以て規約を定めて置く。
 【八】紅牛纓紱 牛の毛で造つて、頭の飾りとしたるもの。
 【九】黃金羈 羈は韁、おも綱。
 【一〇】霹靂應手神珠馳 霹靂が手に應じて起るかと思はれる程に、毬が飛んで行く。南史曹景崇傳に「むかし、郷里に在り、快馬に騎して龍の如く、弓弦を拓いて霹靂の聲を作し、箭

側身轉臂著馬腹、
 霹靂應手神珠馳、
 超遙散漫兩閒暇、
 揮霍紛紜爭變化、
 發難得巧意氣麤、
 謹聲四合壯士呼、
 此誠習戰非爲劇、
 豈若安坐行良圖、
 當今忠臣不可得、
 公馬莫走須殺賊、

身を側て、臂を轉じて、馬腹に著く、
 霹靂、手に應じて、神珠馳す。
 超遙散漫、兩つながら閒暇、
 揮霍紛紜、争うて變化す。
 發するに難く、得るに巧に、意氣麤なり、
 謹聲四に合して、壯士呼ぶ。
 これ誠に戰を習はす、劇を爲すに非ず、
 豈に若かむや、安坐、良圖を行はむには、
 今に當つて、忠臣得べからず、
 公の馬、走る莫れ、須らく賊を殺すべし。

は餓鳴の叫ぶが如し」とあり、王邕の内人蹋毬賦に「毬體似珠」とある。それから、曹植の白馬篇に「仰手接三飛猱、俯身散三馬蹄」といひ、杜甫の前出塞に「走馬脫三轡頭、手中挑三青絲、捷三下萬仞岡、俯身試三拳旗」といひ、韓愈は、此等に本づいて、變化したものだといはれて居る。【一】超遙 前方に駈け去る貌を云ふ。【二】散漫 今まで整列して居たものが左右に推し開く貌。【三】揮霍 一 生懸命に技能を盡すこと。【四】意氣麤 麤は粗と同字、粗豪なること。

【題義】この詩は、貞元十五年、韓愈が徐州なる張建封の幕中に居た時に作つたのである。汴水は徐の西、泗水は徐の南、つまり、徐州は汴泗二水の間に在るところから、これを以て篇に名づけたのである。舊唐書に「張建封、字は本立、兗州の人、貞元四年、徐州の刺史となり、十二年、檢校右僕射を

加へらる。彭城に在ること十年、賢を禮し、士に下る、文人、許孟容・韓愈の如き、皆これが従事となる」とある。この詩は、張建封に贈つて、その打毬に耽けることを諷したので、文集を見ると、諫張僕射撃毬書といふのがある。張僕射は、本来打毬が好きであつた。打毬は、もとより武技を練る爲めであつて、武人として之を好むは、悪いことではないが、あまり凝り過ぎて、遊藝の様に成つては面白くないといふので、この詩の終に此誠習戰非爲劇、豈若安坐行良圖とあつて、かの諫書と同じ意味である。

【詩意】 汗水と泗水とは、郡城の角に於て合流して居る。そこに打毬場を設けて、廣さ千歩に互れる地域を、すつかり地ならしをして、平坦なること、削るが如く、そして丈の低い矢來を三面に繞らしして、すつと長く續き、その内では、どうどうと太鼓を鳴らし、赤い旗を立てて、用意を調べて居る。今しも、新秋の好季節、朝涼しくして、まだ日の出ない時分、張建封に於かれては、早朝から支度をして、親しく此場に臨まれたが、そは何を爲すかといへば、即ち打毬を催すとのことである。そこで、組を分けて、決勝點を設け、前から約束を定め、多くの者どもは、馬に跨り、馬は蹄を攢めて、近く相映じて、そこを駈け廻はつて居る。さて愈よ競技が始まると、取り合はれる爲に、毬は驚いて轉げ廻り、杖を奮つて之を撃たむとし、忽ち合し、忽ち離れ、牛尾の頭飾や、黄金をより込んだおも綱が入り亂れて、旁午しつつかある。競技する者は、いづれも、身を引込め、臂を轉じて、しつかりと馬腹

に身體をつけ、そして、杖を奮つて毬を争ひ、さながら、霹靂が手に應じて起るかや怪まれ、珠は精神あるが如く頻りに飛び廻はつて居る。時としては、先方に馳せ向ひ、時としては整列した者が左右に推し開き、しかも、足なみを揃へて、一絲紊れず、餘裕綽綽として、あわてず、騒がず、遣つて居るが、その内に、秘術を盡し、變化を極め、ここを先途と勝負を争つて居る。中にも、上手な者は、一たび毬を受ければ、容易に之を發せず、投げれば、屹度おもふ壺に中るといふので、意氣自ら粗豪であつて、その人が勝を占むれば、四方から謹聲が起り、壯士どもは、我を忘れて大呼する。元來、打毬てふものは、武技を講習する爲に案出したもので、決して、遊戲に充つべきものではない。但し、今日の時勢からいへば、なかなか、打毬どころではなく、帷幄の中に安坐して、百戰百勝の良圖を運らさねばならぬことと思ふ。殊に、刻下の世に於て、國難に身を捐てるといふ様な忠臣は、到底求められない位だから、今にも賊が來たといへば、公の馬は逃げ去らずして、進んで之を殺す覺悟を以て、下を引き回して、平生訓練することが必要である。こんな風に、遊戲三昧に打毬を遣つて居る様では、いざとなると、皆馬に乗つて逃げ去るに相違なく、この點を篤と考へて頂かねばならぬので、何にせよ、一時の快を得むが爲に、毎日打毬などを遣られるのは、甚だ以て感服せざる次第である。

【餘論】 朱竹垞は、側身轉臂著馬腹の二句を賞し「奇處は、全く身を翻して馬腹に著くるに在り」といひ、何義門は「この詩、用韻變を極めて、しかも整ふ」といひ「風旨、老杜の冬狩行と略ぼ相似

たりといひ、ともに肯綮に中つて居る。次に乾隆御批には「神采飛動、結、忠告あり、便ち雉帶箭に比して一格を高うす」とあるが、その雉帶箭は、後に見えて居る。

忽忽

忽忽

忽忽乎余未知生之爲樂也。忽忽として、余、未だ生の樂たることを知らざるなり。

願脱去而無因。

脱し去らむことを願へども而かも因なし。

安得長翮大翼如雲生我身。

安んぞ得む、長翮大翼、雲の如き、我が身に生じ、

乘風振奮出六合絶浮塵。

風に乗じて振奮し、六合を出でて浮塵を絶つことを。

死生哀樂兩相棄。

死生哀樂、兩つながら相棄て、

是非得失付閒人。

是非得失、閒人に付せむ。

【字解】(一)長翮 翮は羽の莖、つまり長い羽といふこと。(二)六合 天地四方を併稱す。

【題義】 蔣註に「貞元十五年、董晉薨す。公、汴を去りて張建封に徐州に依る。志を得ずして作る」とある。これも、矢張、局束して人の轍と爲るに忍びぬといふ意を述べて、その不平を遣つたのである。

【詩意】 忽忽として、いかにも、詰まらなく、予は、未だ此生の樂たる所以を解し得ない。そこで、この人間を脱し去らうと願つて居るが、因なくして、それも出来ない。この上は、かの垂天之雲の如き長い羽と大きな翼とが我が身に出来て呉れば善いと念じて居るので、さうすれば、風に乗じ、一たび羽ばたきをして奮飛し、見る間に、六合を出て、浮塵を超絶して仕舞ふことが出来る。かくて、死生哀樂などは、いづれも棄て去り、是非得失などは、一切世の閒人に付して、自分は之に與からず、この世界を丸呑にして、自由の生涯を送りたいものである。

【餘論】 この詩は、格別面白くもないが、唯だ古色を帯びた處は、さすがに韓退之の手筆たるに負かず、そして、其處に力量が認められるのである。

鳴鴈

鳴鴈

嗷嗷鴻鴈鳴且飛。

嗷嗷鴻鴈、鳴いて且つ飛ぶ、

【字解】

(一)嗷嗷 詩經に鴻雁

窮秋南去春北歸

窮秋、南に去つて、春、北に歸る。

去寒就暖識所依

寒を去り暖に就いて、依るところを識る、

天長地闊棲息稀

天は長く、地は闊くして、棲息稀なり。

風霜酸苦稻梁微

風霜酸苦にして、稻梁は微なり、

毛羽摧落身不肥

毛羽摧落して、身、肥えず。

徘徊反顧羣侶違

徘徊反顧して、羣侶違ふ、

哀鳴欲下洲渚非

哀鳴下らむと欲するも、洲渚非なり。

江南水闊朝雲多

江南、水闊くして、朝雲多し。

草長沙軟無網羅

草は長く、沙は軟にして、網羅なし。

閒飛靜集鳴相和

閒飛靜集、鳴いて相和す。

違憂懷惠性匪他

憂に違ひ、惠を懷ふ、性、他に匪ず。

凌風一舉君謂何

凌風一舉、君、何とか謂ふ。

【題義】 蔣註には「これ前詩と同時、公、蓋し、託して以て自ら喩ふるなり」といひ、顧註には「公、

徐州に在り、孟東野に與ふる書に曰ふあり、去年、汴州の亂を脱し、遂に此に來る、主人、余と故あ

り、余を符離睢水の上に居らしむ、秋に及びて、將に辭し去らむとす、云云、と。主人は建封を謂ふ。

公、徐に在り、鬱鬱として志を得ず、書と詩とに見ゆるもの此の如し。公、蓋し雁に託して、以て

自ら喩ふるなり」とある。

【詩意】 嗷嗷と悲しげに飛びながら鳴く雁は、秋の末には南の方に去り、春になれば北に歸る。そは

寒を去つて暖に就くので、善く己の依るところを知つて居る。然るに、今、空中を見ると、一羽の雁

があつて、天は長く、地は潤けれども、おのが棲むべき處だになく、頻りに飛び迷ひ、そして、風霜

の酸苦なるに遭うて、その食ふべき稻梁をも見出さず、毛羽は摧落して、身は瘦せ衰へ、徘徊反顧し

て、その友達を呼んで居るが、さて友達らしいものは、一向見えない。かくて、哀鳴して空から大地

に下らうとしても、身を寄すべき洲渚もない。唯だ江南は、水潤く、朝雲多く、その上、時候も暖で

あつて、草は長く、沙は軟かで、加之、網羅の憂が無いから、先づ當分そこへ往つて、閒に飛び、

靜に集まつて、その友達と共に鳴いて相和して居たらば善からう。すべて、物の性として、憂ふべき

處を去つて、惠に懷くのが普通であるから、やがて、風を凌いで、一舉して遠く去るのは、まことに

止むを得ぬ次第。自分は、久しく、君の幕下に身を寄せて居たが、どうも満足することが出來ず、よ

い處があれば、立ち去るかも知れぬが、それは、違憂懷惠の然らしむるところ、さのみ深く、君の谷

めざらむことを懇願するのである

【餘論】この詩は、何分にも、ここに居ても詰らぬから、その内どこかへ行くかも知れぬといふ心をほのめかしたのである。全篇が柏梁體で、毎句に押韻してある。一寸見ると、前の方は五微で、朝雲多以下は五歌で、韻が換はつて居るかと思ふが、實は、さうでなく、古しへは、五微と五歌とが相通じたので、韓愈は之を一韻と看做したのである。但し、之を錯綜して使用すると、或は調子はづれといはれる虞もある處から、わざと五微の方を先に出し、五歌の方を後にしたので、ここらは、特に注意したものである。

龍移

龍移る

天昏地黑蛟龍移。天は昏く、地は黒くして、蛟龍移る。

雷驚電激雄雌隨。雷は驚き、電は激して、雄雌隨ふ。

清泉百丈化為土。清泉百丈、化して土となる。

魚鼈枯死吁可悲。魚鼈枯死、吁、悲むべし。

【字解】一 雷驚電激 班固の西都賦に見ゆ。

【題義】蔣註に「この詩は、南山の湫を謂ふなり。湫、はじめ平地に在り、一日風雷、移つて山上に

居る。その下の湫、遂に化して土と爲る。長安の人、今に至つてこれを乾湫といふ。公の炭谷に題する詩に云ふ、厭處三平地水、巢居挿天山」と、これを指すとある。その湫が龍と共に山上に移つたといふ珍事は、韓退之の時分に有つた事で、それを傳聞して、乃ち此詩を作つたのである。

【詩意】一天俄に掻き曇り、大地も黒く、咫尺晦冥、そことも見分かぬ時に當り、雷は驚き、電は激し、世にも恐ろしい聲がして、蛟龍は、雌雄相隨つて、その居をば山上に移して仕舞つた。そこで、今まで龍が住んで居た百丈の清泉は、すつかり土で埋もれ、その中に棲んで居た魚鼈の類は、いづれも乾ぼしに成つて死んで仕舞つたので、まことに、氣の毒なことであつた。

【餘論】後半は、城門火を失して、その災、池魚に及ぶといつたやうな事で、何だか、諷意があるらしい。そこで、方世舉は説をなし、これは例の王叔文・韋執誼の一黨が敗れた爲に、柳宗元・劉禹錫等、謂はゆる八司馬の貶謫と成つたことを指したのであらうと云つた。無論、さう見た處で差支は無いが、ただ推測であつて、確乎たる證據の有る譯ではない。

雉帶箭

雉帶箭

原頭火燒靜兀兀。原頭、火燒いて、靜、兀兀たり。

【字解】一 兀兀 説文に「高

くして上平かなるなり」とある。

野雉畏鷹出復沒。野雉、鷹を畏れて、出でて復た沒す。

將軍欲以巧伏人。將軍、巧を以て人を伏せむと欲し、

盤馬彎弓惜不發。馬を盤らし、弓を彎いて、惜んで發せず。

地形漸窄觀者多。地形、漸く窄く、觀るもの多し、

雉驚弓滿勁箭加。雉驚き、弓滿ちて、勁箭加はる。

衝人決起百餘尺。人を衝いて決起す、百餘尺、

紅翎白鏃相傾斜。紅翎白鏃、相傾斜。

將軍仰笑軍吏賀。將軍は仰いで笑ひ、軍吏は賀す、

五色離披馬前墮。五色、離披として、馬前に墮つ。

【二】盤馬、馬を乗り廻す。【三】決起、俄に飛び上る。【四】五色、爾雅に「雉、五彩皆備はつて、章を成すを翬といふ」とあり、射雉賦に有「五色」之名翬とある。

【題義】これは、韓愈が張建封の幕中に居た時、狩獵に隨行し、その雉を射落す様を實視して作つたので、即ち縣齋有懷の詩に大梁從二相公、彭城赴二僕射、弓箭圍二狐兔、絲竹羅二酒炙、とある其時の事である。

【詩意】はじめ、鳥獸の隠れ家を索がす爲に、山野の草木を焼き拂つたから、その跡は、極めて靜か

で、兀兀然として居る。そこに雉が居るが、鷹を畏れて、頻りに出たり引つ込んだりして居る。その時に、箭を濫發すると、雉は遠くへ飛び去る虞があるが、將軍は、射藝に巧なることを以て人を心服せしめむと欲し、馬を乗り廻し、弓を引いて箭を番へた儘、なかなか放たない。段段追ひ込んで、地形の窄い處へ來ると、左右には、澤山の見物人が片唾を呑んで控へて居る。雉は、もう逃げられないから、多勢の居るのまかまはず、人を衝いて百餘尺も高く飛び上つた。この時遅く、かの時早く、弓は滿を放ち、勁箭が勢、こんで飛んだから、見事に的中し、白羽の征矢は、紅の羽と共に、ばらばらと傾斜して下に落ちて來た。その有様を見て、將軍は空を仰いで、からからと笑ひ、軍吏どもは、喝采して之を賀する程もあらせず、箭を帯びた雉は、五色離披として、さつと馬前に墮ちて來た。

【餘論】この詩は、格別諷諭の意味があるのではなく、唯だ狩獵の實況を敘したので、杜甫の哀江頭に輩前才人帶弓箭、白馬嚼嚼黃金勒、翻身向天仰射雲、一箭正墮雙飛翼、といふ其描寫の法を學んだのである。洪容齋は「昌黎雉帶箭の詩、東坡、かつて、大字これを書し、以て妙絶と爲す。予、曹子建の七啓を讀むに、羽獵の美を論じて云ふ、人稠網密、地逼、勢脅と。乃ち韓公用意來るところの處を知る」といひ、顧嗣立は「將軍欲以巧伏人、盤馬彎弓惜不發の二句、無限の神情、無限の頓挫、公、蓋し人に示すに運筆作文の法を以てするなり。その全首の波瀾委曲、細微熨貼に至りては、王留耕の謂はゆる寫物の妙、その狀、目前に在るが如し、信に然り、信に然り」といひ、又「句句實境、

寫し來つて絶妙、是れ昌黎極めて得意の詩、亦た正に是れ昌黎の本色」といひ、沈德潛は「李將軍、中らざるを度つて發せず、發すれば必ず弦に應じて倒る。未だ弓を彎かざるの先に審量し、此は已に弓を彎くの條に矜惜す。すべて肯て嚴しく其技を見はさざるなり。詩を作り、文を作る、亦た須らく此意を得べし」といひ、最後に乾隆御批には「篇幅限あり、しかも、盤屈跳盪、生氣遠く出づ、故に是れ神筆」といつて居る。

條山蒼

條山蒼し

條山蒼、河水黃。

條山は蒼、河水は黃なり。

浪波沄沄去。松柏在山岡。

浪波沄沄として去り、松柏は山岡に在り。

【題義】條山は即ち中條山、黃河が西北より來り、華山の北麓を屈曲して、やがて、洛陽の方へ流れる。その屈曲する處の北岸に中條山があつて、その下に蒲津といふ處がある。この詩は、韓愈が蒲津を通つた時に作つたのである。

【詩意】中條山は、蒼蒼として居るし、その下を流れる黃河は、いたく濁つて、その名の通り、眞黃な色をして居る。その黃なるは、波浪沄沄として流れ去るからであるし、その蒼なるは、松柏が山岡

に在つて、茂つて居るからである。

【餘論】はじめ、條山蒼、河水黃、と置いて、後の二句で之を解釋したのである。黃震は「簡淡にして餘興あり」といひ、顧嗣立は「語多からず、却つて古に近し」といつたが、こんな短いものでは、格別の面白い味を包含する譯に行かぬ。曾國藩の説に、この浪波沄沄去といふ句は、世人の俗に従つて、墮落して行く有様を言つたのであるし、松柏在山岡は、君子のみが、何處までも後凋の節を守つて居ることを美したものだとあるが、かういふ解釋は、毎毎の事で、折角ながら、あまり有り難くもない。方世舉の説では、これは、蓋し脫文が有るので、ひよつとすると、その下にまだ數句あつたのが亡びて仕舞つた爲に、こんな變なものに成つたのでは無からうかといつて居るが、これは如何にも尤もである。

贈鄭兵曹

鄭兵曹に贈る

樽酒相逢十載前。

樽酒相逢ふ十載の前、

君爲壯夫我少年。

君は壯夫たり我は少年。

樽酒相逢十載後。

樽酒相逢ふ十載の後、

我爲壯夫君白首。

我は壯夫たり君は白首。

【字解】(一) 周行 詩經にも數ば見え、もと周代習用の語で、役人の行列といふ意。(二) 遑遑 いそがしげに駆ける。

我材與世不相當。 我材、世と相當らず、

戢鱗委翅無復望。 鱗を戢め、翅を委して、復た望むなし。

當今賢俊皆周行。 當今、賢俊、皆周行、

君何爲乎亦遑遑。 君、何すれぞ、亦た遑遑。

杯行到君莫停手。 杯行つて君に到る、手を停むる莫れ。

破除萬事無過酒。 萬事を破除する、酒に過ぐるはなし。

【題義】兵曹は、詳しくいへば兵曹參軍事、將軍鎮將の屬官で、その詳は、唐書の百官志に見えて居る。ここには、鄭とあるだけで、その名は分からない。ある説には、鄭通誠で、張建封が武寧に節度たりし時、通誠は副使であり、韓愈は、その軍の從事であつたから、その時であらうといふが、白居易の哀三良の詩に、祠部員外郎鄭通誠とあるを見れば、どうも、さうとは思はれず、要するに、その詳は分からないが、詩で見ると、年は韓愈よりも多く、そして、老後なほ微官に沈淪して居たものと思はれる。

【詩意】かつて十年の前、ともに酒を飲んだ時、君は血氣盛んの壯夫で、我はまだ青二才の少年であつたが、十年の後の今日、ともに酒を飲めば、我は壯夫で、君は白髮の老人となり、十年の間に、すつ

かり變りはてて仕舞つた。顧みれば、我輩の如きは、才あるも、世の風潮に合はざるが故に、魚が鱗を戦めて小さな池に泳ぐが如く、鳥が翅を疊めるが如く、全く世事を度外視して、格別の希望もない。今しも、賢俊の士は、並び進んで、役人の行列に連つて、いづれも、納まつて居るのに、如何なれば、君は仕官もせず、そわそわとして居るか。これも時勢で仕方がないとすれば、もう何も言ふまい。されば、盃が廻はつて君の處に至れば、手を停めず、さつさと早く飲んで返杯をし玉へ、何は兎もあれ、人間の萬事を忘れるのは、酒が第一で、せめて、これでも飲まなければ、とても遣り切れない。

【餘論】朱竹垞は「起四句大快、これ韓退之ならず、これ張正言」といひ、又「收、味あり」といつた。張正言は即ち張籍で、起首の處は張籍の樂府の筆致に似て居るといふのである。しかし、この詩は、張籍よりも、むしろ白樂天に近く、當時、元白の詩體が世に流行したから、韓愈は、おれは平生六つかしいことばかり言つて居るが、さういふ詩でも作れないのでは無いぞといふので、特に其調を弾じたものと見え、集中に、數ば其例がある。それから、結二句の如き、今では、あまり人口に膾炙して、格別の妙味もないが、その當時に於ては、まさしく破天荒の名句で、讀者をしてアツと言はせたものに相違ない。